
秘密結社へようこそ

読書家

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秘密結社へようこそ

【Nコード】

N8562C

【作者名】

読書家

【あらすじ】

ひよんなことから悪の秘密結社に就職してしまった主人公の天川あまかわ朔さくが振り回されるドタバタコメディー「だれが変わってくれ…」

ぶろろーぐ（前書き）

初投稿でまだまだな自分ですが温かい目で見守ってください

ぶろろーぐ

「仕事…決めないと」

どうもこんにちは

俺は天川朔あまかわさくって言うんだ

先月に高校を卒業し、中小企業に勤めたのだが、入社して3日で倒産して無職になってから3ヶ月…貯金が無くなった

頼ろうにも親とは喧嘩して勘当されているんだよなあ…

三日間何も食べてなくアパートの家賃は払えない…

…死にそうだ…

…はっ、危ない危ない

三途の川が見えたぜ…

じいちゃんも見えたけど何故か三途の川で溺れてた

じいちゃん…

それは置いとして

求人誌をしてみるが高卒で働ける仕事が無い…

腹が空きすぎて朦朧としてきた…

ピンポン

インターホンが鳴るが動けない…

ピンポン ピンポン ドンドンドンドンドン

…うるさいな

ドンドンドンドンドンドン … ドゴーーーーーン

ドアを突き破ったーーーー！？

そしてドアを壊した破壊神が部屋に来た

「やつほー！

元気？」

「…やっぱりテメーかよ園音

それにこれで元気だったら医者なんかいらねえよ」

嫌な奴が来たな…

破壊神

高上園音

俺の幼馴染でこのアパートの隣人だ
子供のころは何回も殺されかけた…

ドアが開かないからって壊すなよ…
俺がドアの修理代払うんだからよお…

「貧乏ニート君
仕事見つかったー？」

「ニートじゃねえ
見つかってないからこうなっているんだ」

こいつは何故だか俺のところへよく来る
そして冷蔵庫を漁り貴重な食料を奪っていく

「家には何も無いぞ」

「ちがうちがう
今日は私の勤めているところで求人出しているんだけど、
月35万で土日祝日休みで休日出勤には手当がでます
専門的なことは一切なしだれでも入れます！
仕事探してんでしょう
どう？」

そして園音は勝手におれの履歴書を取り、その会社の申込書を出した
申込書には俺の名前が書いてありいつもの俺ならばそんな怪しい話
に乗らなかつたろうが
もはや瀕死に近い俺はその話に乗った

「オツケー
三日後面接だから」

にやりと笑った園音にきずくべきだった

そして三日後…その職場に行った俺は猛烈な後悔をすることになる

ぶろろーぐ（後書き）

初投稿なので指摘があればさまざまなお意見お待ちしております

厳しい面接？

昨日の乱入で壊れてそのままのドアを出て面接に向かう場所を聞くと

「このアパートから全力で走って徒歩5分だよ」

…全力で走る意味がわかんねーよ

1時間ほど余裕をもって出発した

…歩いて35分かった

あいつは何者だよ…

案外大きい会社で少し気後れするが入った

十階にあるんだっけな

会社の名前はダークリング社

「変わった名前だな」

エレベーターに乗ろうとすると

「待ってください!!」

ツインテールのかわいい女の子が乗ってきた

「十階までお願いします!」

俺と同じくあの会社に申し込んだみたいだ

「君も十階の会社に申し込んだの？」

「あなたもですか！

よかったー

私だけだったらどうしようかと思ったんです」

この子もブラックリング社に申し込んだみたいだ

「私は面白そうだったからここに申し込んだんです！
だって世界征服なんて夢があるじゃないですか！
悪の秘密結社で案外簡単に入れるんですね！」

…へっ？

秘密結社？

あのやろおおおおおおお！！
秘密結社なんて聞いてねええぞおおおお！
くっそ歸りてー

「つきましたよー」

そんな声と共に着いてしまった

中は以外ときれいで広かった

十数人ほどの人が面接に来ていた

「面接を始めまーす」

そんな感じで面接が始まった

「まずこの仕事は死ぬこともあるので気を付けてください。
あと辞退する人と失格の人の記憶は消さしてもらいます」

死ぬこともあるなら辞退しよう

「ちなみに記憶を消す機械は範囲を限定できないので運がないと
十年分位記憶が消えます」

いやいやいやいや

そんなに消えたら日常生活に支障が出るだろ！

「じゃー一番どうぞ」

一番の人が面接を受けている

ちなみに俺は一二番だ

「志望動機は？」

「私はこの仕事を小さい頃からずっとこの仕事やりたくて求人
を「ガコン」」

床が抜けたー！？

「話が長いので失格」

どんだけ横暴な面接官だよ!!

「二番どうぞ」

ガコン

うわああああああ

いやいやいや

何にも言っていないのに落とされたよ!

「イケメンは死ね!失格」

横暴すぎるよ!

…そのあと四人ほど落とされた

「七番どうぞ」

七番はエレベーターであつた女の子だ

「合格!?!?!?!」

「やったー!」

だから…

なんで何にもしゃべっていないのに合格なんだよ!

「かわいいから合格」

もう死ねよ面接官！

そして四人が落とされた
そろそろ俺の番だな

「ここで重要なことがあります」

面接官がいきなりそう言った

「めんどくさいし帰りたいんで残りの人合格」

このくそ面接官があああああ！！！！！！

落とした奴らに謝りやがれええええ！！

「明日から八時四十分までにここに来ればいいぞ」

ほんとに合格なのかよ…

そんなこんなで悪の秘密結社に就職しました。

厳しい面接？（後書き）

感想お待ちしています

出社しよう！

「出勤か…嫌だな…」

どうもこんにちは

主人公の朔です

まだ1回も出社していないのにもう行きたくありません

なんだよ…悪の秘密結社って

昨日俺をこの会社に申し込んだ園音に文句を言った

「歩いて35分もかかったぞ！」

「あたしは歩いて10分くらいだったよ」

「お前は本当に人間か！？

2キロほどあったぞ！

それになんで悪の秘密結社って言わなかったんだよ」

「だって聞かなかったから」

「そんな子供みたいな理屈が」「ドゴッ」「」

園音は壁を殴り穴を開けた

…「この壁って厚さ10センチぐらいあるぞ

」
「なにか文句ある？」

にっこりと笑いながら園音は聞いてきた

「イイエ、ナニモアリマセン」

即答でした…

…俺ってへたれだなあ…

でも自分の体ぶち抜かれたくないじゃん！

そんなこんなで会社に到着

そしてエレベーターを待っていると昨日の女の子が来た

「おはようございます！」

「おはよう」

そう言えばこの子って名前なんだろう

「名前聞いてなかったよね？」

「あつ、そう言えば自己紹介まだでしたね！
香咲葵（かすみ あおい）と申します！

よろしくね！」

葵ちゃんか

元気のいい子だなー

「俺は天川朔って言っただ
よろしく」

「天川さんですかー
いい名前ですね!」

名前を褒められたのは初めてだ

「あまかわ甘皮煮あまかわみたいで美味しそうですねー」

そんな理由なの!?

「ところで今日はこの秘密結社の説明会と研修らしいですよ」

「そうなんだ」

チーン

話しているうちに十階についた

なぜか扉の前に人が十人ほどいる

「学校に行かないと先生に叱られる!」

「あつ!

今日は入学式じゃないか!」

「ママー!!」

どこー!!」

いい年したおっさんや兄ちゃんがそんな事を言っている…

って、こいつら昨日落とされた奴らじゃねーか！

こえーよこの会社！

記憶がホントに消されてるよ！

転がっている奴らを見捨てて中に入る

扉を開けるとなぜかエレベーターがあった

…なんで？

「ヒミツホジノタメコノエレベーターデホンシャニイキマス」

エレベーターがしゃべった！

すごい技術だなー

乗ってみると勝手に進み始めた

どこまで行くんだろ…

地下100階！！？？

どんだけ下に行くんだよ！

…そのまま30分ほどしてエレベーターは止まった

エレベーターでは葵ちゃんが「お腹すいたー」と言って

俺をかじったり

俺をかじったり

俺をかじったり

降りた時にはボロボロになっていた

もう疲れたよ…

出社しよう！（後書き）

不定期に更新していきますのでよろしくおねがいします

ハチャメチャ説明会？

本部はとても大きく迷子になりそうだ

…っ！かも迷子になっている

しかもいたるところにトラップがあつて怖い

何個かのトラップに命を取られかけたよ…

「いったいどこなんでしょうねー？」

葵ちゃんはそう言いながらダッシュで駆け回っている

「…ってオイ！！」

危ないからダッシュするなー！！」

「きゃー！槍が飛んできましたー！！」

葵ちゃんはかわして…

俺の方向に槍が来たよ！？

「あぶねえ！！！」

間一髪よけられた

「すみません！！！」

「いいけど気をつけてよね…」

全く…

その後もうつろうつろ歩いているといきなり声をかけられた

「おいニート！

こっちだよ！」

「ニートじゃねー！！！」

「天川さん…

ニートだったんですか…」

「そんなわけないわ！」

疲れるよ…

会場の入り口に園音が待っていた

「そろそろ説明会始まるから」

そついうとステージに向かって行った

「マイクのテスト中、マイクのテスト中」

つて園音が司会かよ！

「それでは説明会を始めます」

始まりました

「総統からのお話です」

こんな会社作る総統ってどんなやつだ？

…っつて、昨日の面接官が総統かよ！！！！

「めんどくさいので一言

帰りたい！」

勝手に帰りやがれえええええ！！！！

「なので解散！！！！」

この会社だめだあああああ！！！！

すると秘書みたいな人が来て

ボクッ！！

…金属バットで殴った

「総統は気絶したので副総統の私が説明します」

副総統だったの!?

副総統こええ!

「この会社の目標は「世界平和」です」

いやいや!

悪の秘密結社が世界平和っておかしいだろ!

「悪の秘密結社が世界平和っておかしいだろと思った人もいますけど…」

怖いくらい当ててきたな!

エスパーかよ!

「私たちは戦争を起こしている国を叩き潰して平和にしようという組織です」

どこの暴君の考え方だよ!!

「正義の味方とかいう奴らは私たちを危険などと言いますが…」

至極まっとうな意見だよ!

「私たちは人を殺さないやり方で叩き潰します
なので正義の味方の偏見は許せません!」

いやっ!

十分過激だよ!

「皆さんも敵は戦争国家、正義の味方です！
皆さんも戦闘員として派手に散ってくださいください！」

俺たちは捨て駒扱いかよ！！

「ありがとうございました」

その後も何人かの人が話をして終った

「昼ご飯を食べた後に本部内見学です」

…なんか学校みたいだな…

波乱の本部見学！？（前書き）

これから内容が長くなっています

波乱の本部見学！？

トントン

肩を叩かれて振り返ると会いたくないやつに会ってしまった

「なんでいるんだよ…」

「ふははははは

俺様は何でも知っている

お前の家の天井裏に住んでいたからな！！」

「不法侵入じゃねーか！
即刻出てけ！」

こいつの名前は堂背次々（どうせじじ）

一言で言うとかバカ

うちのアパートにいたが家賃不払で出ていったやつだ

うちの天井裏にいるとは…

「なんででめーがここにいるんだよー！！」

「昨日の試験に紛れていたのさ！」

くっそー！！

こいつに気付いていたら叩き出したのにー！！

「そろそろ本部見学です」

こいつと話していて時間が来てしまった

仕方ない…行くか…

「ここが食堂です」

まずは食堂だ

「こんにちは

私がこの料理長の長瀬美喜ながせみきです

今日はこのオリジナルメニューを紹介します」

長瀬さんは長い黒髪のかわいい人だ

きれいな人が多いのはあの頭領のせいだな…

「まずはマグマシチュー！」

まてえええええ！！

なんで容器が真っ赤になっているんだよ！

めっちゃめっちゃボコボコいつてんじゃねーか！

「このまま食べると口がただれるので気を付けてください」

そんなもんだすなーーーー！！

「次はデビルジュース！」

くち！！

色がやばいよ!?

灰色って飲み物の色じゃねーだろ！

「世界のあらゆる漢方、薬草、ゲテモノ食材、野草、雑草を使ったジュースです」

まてええええええええええ！

雑草って違うだろ！

「ではその…細い人飲んでください」

「はいっ！」

飲むな――！！

ゴキユツ

「グベラゴハアア」

奇声を発しながら気絶した……

兵器だよ……それ

「最後は人肌のぬくもりステーキ！」

きゅっ！

人肌のステーキ嫌だよ！

「ほかにもまともなのはあるので来てくださーい」

そつち紹介しろおおお！！

「次は科学発明科です」

「よくきたな実験体ども」

いきなり実験体扱い！？

「私は科学発明家主任のエリナ・クロローゼだ
年は16歳の天才だ！」

エリナさんは金髪に青い眼の美人さんだ
だが…身長は140センチほどでとても小さい

「ちなみに…背のことを言ったやつは実験室送りだ！！」

すごい気にしてるよ…

「私は怪人も作っている」

すげーなーオイ！

「ついさっき実験体が手に入ったから見せてやろう」

おいっ！！

実験体ってあのデビルジュース飲んだやつじゃねーか！
言いにくいから戦闘員Aと呼ぼう

「それでは始めようか」

戦闘員Aは変な機械に入れられて

「スタート」

1時間後

「できたぞ…」

ゴキブリ男！」

戦闘員A - - - ！！

かわいそうすぎるー！！

「ゴキブリ男…」

きもいから寄るな」

エリナさん鬼だよ！

「それでは次にいきましょう」

「ここは戦闘員部隊です」

「私が主任の高上園音だ！」

園音か…

ある意味予想通りだな

「まずはミット打ちを見せよう」

そして戦闘員がミット打ちを始める

「そして組み手」

組み手を始めた

するといきなり

「そうだ！

私と組み手をするやつはいないか？」

その瞬間男たちが

「俺とおねがいします！」

「いえ俺と！」

「僕がー！」

園音はプロポーションが抜群で美人だからみんなが色めきだつ

本性を知ってる俺や後ろの隊員は苦笑いだ

「じゃあ…君！」

堂背が指名された

「ひゃっひゃっひゃ

どさくさに紛れてあーんなことを…」

意気揚々と妄想しているが

「始め！」

高速で繰り出した拳に吹き飛ばされる

「ぐびゃあ」

天罰だよ…

「次は？」

につこりと笑う園音に皆は震えるばかりだった

「次が最後です」

「ここは医療部隊です」

「みなさんどうも

私が医療部隊主任の白河天使です」
しらかわてんし

この人も美人だなー

「医療班には医療のプロばかりです」

安心だなー

「その中で、ドジっ子は20パーセントです」

いやっ！

いらねーだろ！

「規律は三つ

1つ どんな怪我也も治すこと」

プロだ…！

「2つ 死にかけにはとどめをさすこと」

いやっ！！

救ってくれよ！！

「3つ 給料あげて欲しい」

ただの願望だああああああ！！

「今日は解散です

明日から部署への移動が発表されます
頑張ってください」

終わった…

よし！帰ったら…

堂背をぶっ殺す!!

波乱の本部見学！？（後書き）

コメントが来ました！

感動です！

どしどしコメントお願いします！

仕事決定！！

ピピピピピ

目覚ましがなった

「もう朝か…」

今日はそして窓を開けるととても青い空が

「…いやなもんが視界に入ったな…」

アパートの天井からロープでぶら下げられたボロボロの堂背がいた

昨日の夜に天井裏を調べてみると

「無くなってた俺のケータイが！」

「探してた俺の本が！」

「盗まれた俺の財布が…」

と、いくつも見つかり俺の逆鱗に触れた堂背がボコボコにされてぶら下げられたと言うわけである

「そろそろ行くか」

朝ご飯を食べて着替えて俺は7時15分に家をでて行くことにしている

「早くねー！？」

堂背がきいてきた

うるせーな

「行く途中にコンビニとかによるからだよ」

そして出発した

「俺はーーーー！！！！？」

堂背は無視だ

「堂背は大家さんに発見されるまで1時間ほどぶら下がっていた」

会社に行くと

「今日はどこの部署に行きたいかの希望をとります」

そうか…今日決めるのか

正直まだ決めていない

うーん…

知り合いもいるし無難に戦闘部隊にしよう

みんなも書いて係りの人が集計をしている

「45名中39名が戦闘部隊を希望ですね…」

偏りすぎだろ!!

ちなみに45名いるのは3日間にわたっての試験だったみたいで俺は最後だったらしい

しかも3日とも試験内容が違っていたらしい
しっかり統一しろよ!

「偏りすぎなので園音さんとのスパーリングで決めましょう!」

その瞬間に戦闘部隊の希望者は全員辞退した

…やっぱり命は惜しいよな…

「いなくなっちゃった…」

係りの人はその後も何回か移動させたが30人以上が動くので全然決まらない

「どうしよう…」

係りの人は泣きそうになっている

「そうだ!」

何か名案が…

「皆さんで殺し合いをしてもらいます」

バトルロイヤル!!??

「係りの人……!!
しっかり……!!」

「はっ…私は何を…」

係りの人が正気を失いかけてるよ…

「こういのはどうかしら？」

いきなり副総統が現れた

「なんているんですか？」

「あのバカ総統を追っかけていたら何か困っているみたいだったからね」

総統働けよ…

「みんなが2時間ほどそれぞれの仕事をやってみて適しているのに
入れたら
いいんじゃない？」

「なるほど!」

そういうことで決定した

1番 戦闘部隊

まずはトレーニング

筋トレ、走り込みなどを30分

そのあとに実技練習

相手の人は

「お前をボコボコにしてやろう」
などと言っていてウザかったのでボコボコにして泣かした

ちなみに意外と俺は強い

家が道場をしていてその関係で強くなった

喧嘩も俺が継ぎたくないといったせいで起きたのだ

なぜなら俺には妹がいてそいつがとても強いからだ「園音級」
だから妹に継いでほしいのだが親父が

「怪我したらどうするんだ」と言って喧嘩になった

あの娘バカめ…

だがそんな娘ラブな馬鹿父の100倍母は厄介だ…

恐ろしくて俺は何も言えない…

まだ死にたくないし…

仕事はそのあとに掃除、備品整理をして終りだった

園音に「あんた使えるねー！」と言われた。

次は 科学発明科

何かを作ったりするのかと思ったが科学者は別のやり方でスカウトしているらしい

おもに俺たちは雑用や整理整頓だ
パソコンで書類製作などもやらされる

俺は情報系の高校に通っていたのでそこは抜群にうまかった

エリスさん以外にも科学者の人がいるのだが

なぜか日本の国家機密にハッキングしていたアニメおたくのハッカー
まともそうなのに青やらピンクの色の煙を出す薬を作っているお兄
さん

そんな人たちばかりだった

エリスさんに「凡人にはなかなか使えるじゃないか…実験してみたい」と不吉なことを
言われた

次は 看護部隊

おもに看護の練習や機材の整備などを行っている

俺は実家が道場だったのでけがの応急治療もできる

だがドジっ子部隊が曲者だった

- 1 こけてはさみを飛ばす
- 2 こけて注射器を飛ばす
- 3 こけてメスを飛ばす
- 4 機材を爆発させる
- 5 薬を間違えて出す
- 6 毒薬をなぜか持ってくる

などなどだ

ある意味一番きつい…

だが、仕事はみんなとても優秀だった

仕事をしていると白河さんに「すごいですねーうちに欲しいですー」
とのんびりと言われた

最後に食堂

って食堂も入るの!?

仕事はおもに買出し、料理、皿洗いをした

俺は趣味が料理でレストランでのバイト経験もあったのでうまく作
れた

1 か所だけ隔離していた場所があったので見てみると

デビルジュースを作っていた…

ガスマスク装備って料理じゃねえええ!!

長瀬さんに「君はうちに来るべきだ!」ととても強い口調で言われた

「お疲れ様です!」

疲れた…

みんなも疲れたらしく、ぐでーんとしてる

「各部署の主任にだれが欲しいというアンケートを書いてもらってるので

結果が分かったら呼びます」

30分後

決まったらしく呼ばれていく

「堂背次々 戦闘部隊」

いつの間にやら来たバカは戦闘部隊だ

「香咲葵 看護部隊」

葵ちゃんは看護部隊だ

なんとなくドジっ子部隊に入りそうだな…

次々と呼ばれていくが俺は呼ばれない

そして最後…俺だけになった

「天川朔は…」

誰もいないんでクビとか…？

「全部署でアンケート1位だったため…」

予想外の事態に！？

「全部署を1週間ごとにローテーションで回ることにする」

俺だけハードじゃねーか…！

拒否だ拒否！

「拒否権はない…！」

ちくしょー…！！

結局各部署をローテーションすることになった
俺に自由はないのか…

仕事決定！！（後書き）

読み返してみると、とても下手な文章でそんな自分に投票してくれた皆さんに感謝です
もっと精進します

戦闘部隊へようこそ！

「今週は戦闘部隊か…」

今週は戦闘部隊で働くことになった

毎週変わるのか…

ほんとに疲れるな…

3日ほどは普通の業務をこなしていた

「なんか暇だな…」

仕事があるだけでもありがたいが、同じことの繰り返しは飽きる

訓練と掃除ばかりだからな…

「あーあ

なんか面白いことねーかなー」

このセリフを言ったことに後悔することになるとは…

朝6時

ドゴォー！！！！

…また園音が壁をぶち破ってきた

…頼むから扉を使ってくれ！！

「なんだ今日は？」

すると園音は

「同じことの繰り返しで暇って言ってたでしょ」

と言った

どうやら聞いていたらしい

「だから今日の仕事は特別メニューにすることにしたよ」

「へーどんなの？」

「…食堂オリジナルメニューフルコース完食？」

「まてーーーー！！！！」

それは仕事じゃねーし死者がでるわー！！」

あれを完食できるのは地球上の生物じゃ無理だ！

「うーん…どうしよう…」

「俺はいくからな」

園音はほっという俺は出発した

俺がついた数分後に園音がきた

「決まったよ！」

物凄い笑顔で言った園音に不安を覚えた…

園音は戦闘部隊のみんなの前で

「今日の仕事は特別メニューです」

その瞬間

「まさかフルマラソン5セットー！？」

「10万本ノックだったりして…」

「50キロ水泳は嫌だー！！！！」

みんなは泣いたり叫んだり、逃げようとしたりしている

てゆーか園音ええ！

どれだけ危ない訓練なんだよ！！！！！！

「いいえ

今日は違います…」

その言葉に逆に震え上がった

（もったときついことなのか！？）

「今日は…」

緊張が高まる

「正義のヒーローの会社に殴り込みに行きまーす!」

全員が倒れかけた

いやいやいやいや!

そんなこと勝手にしちゃだめだろが――!――!――!

「許可は統領からとっています」

あのクソ統領がああああ!――!――!

「大丈夫!

ちっちゃい会社だから」

そう言う問題じゃねええええ!――!

「死んでも責任は取りません」

いやだあああああ!――!――!――!

「それではしゅっぱーっ!」

マジでいやだああああー！！！！

「来てしまった…」

カエル商事

一般の会社に見えるがカモフラージュだそうだ

ブラックリング社はそういう会社をある程度は把握しているらしい

ここにきて後悔が押し寄せる

言わなければよかった…

そしてごめん…カエル商事…

「たのもー！！」

ブラックリングの戦闘部隊が叩き潰しにきたぞ！」

園音は堂々と名乗った

歸りてええええ！

「ゲロゲロ！」

お前らの悪事は見逃さないゲロ！」

カエルの怪人みたいな人がビルから出てきた

「誰だよあんた」

「私はカエルヒーロー！
フロッ

「うるさい！」ウベエエエ！？」

園音が殴った：

聞いたんだから最後まで聞いてやれよ！！

あとキモいよ！

殴られた声が！

「ゲ、ゲロッ

卑怯ゲロ

許さんゲロ！」

怒らせてしまったようだ

「園音！」

「弱い奴に興味ないからあんた達勝手にやっというてー」

園音えええ！！！！

いくら何でもそれはないだろ！

「食らえゲロ
ゲロゲロパンチ！」

聞いていて不快になる技名だな…

バキッ

戦闘員の一人が食らったがほとんど効いていない

園音のパンチをくらいまくってるからな…

まあ園音のパンチを人類で越えられる奴はいないだろな…

「きつ、効かないゲロオ！」

聞かないと判断したカエルは俺に向かってきた

しょうがない…恨みはないけどやるか

「ゲロゲロパンチ！」

受け流してパンチを決める

「ゴボツ！」

当たったが少し浅く思ったほど効果はなかった

その声聞いていて嫌になるわ！

カエルなんだから「ゲロ」を使えよ！

「くつ、悪の秘密結社めゲロ」

それにしてもゲロゲロうるさいなー

「ゲロゲロキック!」

それを右にかわしてクロスカウンターを決めた

「ウボオオオオオエエエエ!」

とてつもなく不快だよなあああ!!

もつときれいな言い方でやられやがれえええ!!

倒れたカエルヒーローにトドメの踵落としを喰らわした

泡を吹いて気絶した

まあ何も言わなくてよかったなー

「クックックック」

「今度は誰だ?」

「私こそがカエル商事の真のヒーロー!」

真打ち登場!?

「ドン・オタマジヤクシ!!」

おいしいいい!!

カエルじゃなくてオタマジヤクシが真のヒーローっておかしいだろ
おお!!

「我が同胞の敵…とらせてもらっ」

喋り方からしてこっちの方が強そうだなオイ!

カエルの格好がつかねーよ…

「喰らえ!!」

「AK47!!」

まてええええ!!

何で普通に軍用ガトリング使ってたんだよおお!!

子供が泣くわ!!
そんなヒーロー!

ドドドドドド!

ギャー!撃ってきた!

「悪党ども！喰らえ！！
ガハハハハハ！」

どう見てもお前の方が悪党だろおおがあああ！

「私がやるのか？」

「園音えええ！
当たり前だろうがああ！」

お前がまいた種だろうがああ！！

「つーかオタマジャクシ！！！！
ヒーローが人殺していいのか！！！」

「玉は特殊ゴム弾だ！！
死にはしない！と思う！」

「だめじゃねえええかあああ！！！！！」

だが園音は

「大丈夫！

私には秘密兵器があるから！」

「秘密兵器！？」

そして懐から…

「神殺し〜！」「金棒」

いやいやいやいや！

銃器に鈍器で勝てねーだろ！

「バカめ！

喰らえ！」

A K 4 7 を撃ってくる

だが

「とりゃ〜！」

カキンカキン！！

打ち返したー！！！！

跳弾した弾は

「いでででででー！」

こっちにきてんじゃねーか！！！！！！

弾を避けていると堂背が言い出した

「そつだ！

いい手がある！」

堂背が言つたのは…

堂背の前でみんなが壁になる

「リーダーがやられたらいけないだろ！」

「バカか！！てめええええ！」

馬鹿な勘違い野郎堂背を袋叩きにする寸前

「そつだ！良い考えがある」

戦闘員Aがいきなり言い出した

「なんだ！？」

5秒後

堂背は弾避けにされた

「ぎゃああああ！！」

弾が当たって叫んでいる

自業自得だよ…バカ…

撃っていたオタマジャクシの銃が弾切れを起こした

「チャンス！」

園音はオタマジャクシの懷に入り

「撲殺ホームラン！」

思いつきり殴った

ドボッ

とても鈍い音とともに吹き飛んだ

ビルにぶつかり痙攣している

こりゃ無理だな

「これで終わりっ！」

ようやく殴り込みは終わった

被害者20数名

堂背は当分再起不能だ

まあどうでもいいがな

今日はとても疲れたよ…

「じゃあ今日は解散！」

そして本部に帰るみんなの気持ちは一つだった

…バカ統領ぶっ飛ばす!!!

仲間登場！？（前書き）

新キャラが出ます

仲間登場！？

「体が痛い…」

昨日はマジでキツかった…

命の危険を感じたよ…

「まあそれも今日で最後だなー」

来週からまた変わるからな

今度は命の危険を感じないところがいいな…

今日は備品整理やら掃除を集中的にやっている

昨日はあれだけ働いたからな…

「天川君…だね」

いきなりきかれたので振り向くと

「…誰ですか？」

優しそうな雰囲気でニコニコした人がいた

「僕は白夜京^{シラヤキョウ}」

園音さんの大学の同期なんだ」

「そうなんですか」

「君のことは園音さんからよく聞いているからね
案外普通の人と聞いているからね…
仲良くなれそうな気がしたんだ」

白夜さんはどうやら常識人みたいだ

ここにいる人みんなキャラ濃いからな…

しかし園音の大学時代が…

悪い意味で創造がつかねえ…

「大学時代園音はどんなやつでしたか？」

「まああんな感じだよ…」

園音は向こうで誰かと喧嘩して吹き飛ばしている

あんな感じが…

話してみると話が合う

「君も赤川次郎が好きなんだね…」

「山田悠介も面白いですよ」

「西尾維新も面白いよ」

読書が好きらしく話が合う

話が合うのっていいよな―

「ところで君は彼女とどうやって知りあったんだい？」

それを聞かれるとは思わなかったな

「言いたくなかったらいいんだけど…」

「いえ大丈夫です」

大変だったな…あの時は…

「まあ面白いかどうかはわかりませんが…」

7年前

家の道場に通い始めて7年ほどたったんだけど

すごい強くなったんで天狗になっていたんだ

あるとき

「強いやつと戦いたいな―」

って言ったんだけど

ほかのやつらがいきがって

「叩きのめしてやる!!」

って言ったんだ

まあ良くバカにしていたからな

まあそのあと全員ボコボコにしたんだけど

そしたらボコボコにした奴らが

「あんたならあいつを倒せる!!」

って強いヤツがいるから倒してくれ!

って頼まれたんでたんで試合をしに行っただ

そこにいたのは

華奢な美人のおねーさん

「馬鹿にしてんのか!!」

「あいつです!

信じてください!!」

仕方ないから挑戦しに行っただ

「あんただれ?」

「俺は天川朔だ！」

「あたしは高上園音だけど何か用？」

「勝負しろ！」

「いいよー」

そんな感じで初めて出会ったんだ

「ねえねえ」

「なんだ？」

「あたしが勝ったらあんた私の子分になってよ！」

まあ負ける気がしなかったんでOKしたんだけど…

「ぎゃあああああああ！！！！」

殴られ蹴られ…

ボコボコに…

そんなこんなで1分で負けたよ…

しかも右腕骨折、右足にヒビ、打撲は数知れず…

「約束どおり子分になってもらうよ!」

その時からあいつとの腐れ縁が始まったんだ…

「そんなことがあったんだね…」

白夜さんは同情してくれた…

「大変でしたよ…」

その時園音は中学3年だったんだけど

校舎を破壊したり

教頭を再起不能にしたり

校長に登校拒否にしたり

生徒会を壊滅させたり

暴走族をつぶしたり

そんなことのばかりでしかもその片棒を担がされましたよ…」

あの時は地獄だったよ…

とばつちり受けたし…

「白夜さんはどんなことがありましたか?」

なんか仲良くなれそうだな

そのあとメルアドを交換して帰った

被害者同士気が合うよ…

仲間登場！？（後書き）

紹介した作家の本はホントに面白いので
ぜひ読んでみてください

科学発明科へようこそ

どうも朔です

この二日間は死んだように寝てゴロゴロしていました

殴り込みが一番の原因だけだな

今日から新しい所だ

まあ死の危険がないところがいいな…

会社につくとロビーに

「今日から私の所だ！
早く来い！」

エリスさんがいた

つまり今日から科学発明科なのか

まあがんばるとするか

「今週は忙しい！

貴様のような凡人の力も必要なくらいにな！」

なんだか言い方にトゲがあるよな…

まあ妹に比べると大丈夫だが…

「どんなことをやるんですか？」

「対人口ロボット兵器作成だ！」

スケールでけー！！

「大丈夫なんですか！？対人兵器なんて！」

「まあ戦闘不能にするぐらいだから大丈夫だ」

死なないならOKってずいぶん乱暴だな！オイ！

「俺は何したらいいんですか？」

「うむ！

私は頭脳労働が主で力が弱い
貴様には肉体労働をしてもらう！」

なんかあんまり前と変わらないな…

「まずこの機材を運んでもらおう」

じゃあ頑張るか

なんか妥協ばかりだな…俺…

「次はAの機材を頼む」

さつきからすごい集中力で取り組んでいる

だが作っている物を見ているとチンプンカンプンだ

「ふむ…

休憩するか…」

休憩はありがたい

さつきから腕が痙攣している

いくら何でも重すぎる…

「ドリンクを買ってこい

カフェオレだ！間違えるなよ」

パシリかよ…

自動販売機があるのだがラインナップがおかしい

・完熟ミルク

それ完璧に腐ってんだろぅがぁぁぁ！！

・ブラックインク

インクはドリンクじゃねえええ！！

・トマトより赤い何かジュース…

完璧に血だろうがあああ！
誰も買わねえよ！

「あの…トマトより赤いジュース買いたいんですが…」

いたよ！

コウモリ男さんがいたよ！

・デビルジュース

デビルジュースはいらねええええ！！！！

カフェオレは普通のがあったので買った

「遅い！」

怒られた…

「うむ…

カフェオレは間違えなかったな」

どうやらカフェオレはよかったようだ

「うむ

今日はこれでいいだろう
貴様も帰るがいい」

ようやく終わった…

腕はもう限界だよ…

「お疲れ様でした」

「うむ」

3日間は同じことの繰り返しだった
明日完成するらしい

「今日はもういいぞ」

「お疲れ様でした」

「うむ」

帰る途中にいきなり

「ちょっといいかい？」

声をかけたのは怪しい薬品をつくるお兄さんだった

「何ですか」

「エリスちゃんのことです…」

エリスさんのこと…？

まあ気になるし、ちょっとなら良いか

「コーヒーでいいかい？」

「はい」

何だろう…？

「どうぞ」

「ありが…」

いやっ！

これコーヒーじゃねえっ…！

絵の具の黒みたいな色してるよ…！！？？

「これなんですか！？」

「いやー…」

別に普通のコーヒーだけど…」

絶対ちがう…！！

向こうの飲んでるコーヒーと全然ちがうし！

「まあ正直言うと試験薬がはいってるけどね」

駄目だろおお！！

「まあそれはいいとして」

「よくねーよ！」

危うく実験体にされるとこだったんだぞ！

「私は唐木康夫からきやすお」

エリスちゃんの親戚なんだ」

親戚なのか

だけど何の話だろう…

「天川君

エリスちゃんと友達になってくれ」

「えっ！？」

「あの子は5歳で大学に入った天才でね…

友達のできる環境じゃあなかったんだ

周りは大人ばかりだから頑張って張り合ってあんな感じになったからね…

感情表現が苦手なんだ…

君はエリスちゃんが高圧的な態度をとってもあまり気にしていなかったからね

君なら仲良くできると思うんだ」

エリスさんにそんな事が…

「まあせめてエリスちゃんが悪い子じゃあないって事を知って欲しかったんだ」

唐木さんはそういつて俺を帰らせた

研究室に入ってみるとエリスさんは機械をいじっていた

自動販売機に行つてエリスさんに駆け寄つた

「エリスさん」

「ギャア！」

驚いたみたいだ…

「き、貴様！私を脅かすとは良い度胸だな！」

「いえすいません
これを渡したかつたんで」

そしてカフェオレを渡した

「むっ…
すまんな」

「頑張つてますね」

「当たり前だ！」

私はコイツを作ることが仕事だからな
妥協はせん！」

「すごいですね」

「だが貴様もなかなか使えるな
名前くらい覚えてやろう」

「天川朔ですよ」

「ふむ…」

天川か…覚えたぞ」

「じゃあまた明日」

「うむ」

そしてエリスさんと少し仲良くなった

その一時間後

「忘れてたな
財布」

堂背が財布を取りにきた

「あつ！

ロボットがある
カッコイいゝ！！」

そしていろんな場所をさわっていじって

プチッ

「あっ」

「し、しーらねっと！」

そしてそれが原因である事件が起きる…

続く

科学発明科へようこそ（後書き）

続きます

次で科学発明科は終わりです

ロボット暴走！？（前書き）

科学発明科へようこそその続きです

ロボット暴走！？

「今日はあのロボットを動かすのかー」

科学発明科も今日で最後

エリスさんの作ったロボットが動くところがみれるのは良かったなー

出来たロボットは黒い外装に大量の兵器を積んでいる

「いよいよコイツを動かすぞ」

エリスさんのその一声でスイッチを入れた

「ガ、ガガガガ」

「ノイズが混じっているのが気になるが…

まあいい

RK47！こっちに来い！」

だが

「命令ハウケツケマセン」

ロボットは命令を拒否した

「何故だ！？

私の命令を絶対に聞くはずなのに！」

「ガガ……」

ターゲットロックオン

コレヨリ戦滅ヲ開始シマス」

そういうとエリスさんに発砲した

「危ない！！」

とっさに抱えて脱出した

しかし幾つかの弾丸が当たり多少の傷を負った

とっさに物陰に隠れやり過ごす

そして白夜さんに連絡を取った

「白夜さん！！」

「どうしたんだ！！」

俺の必死さが伝わったようで警戒体制をとる

「科学発明科の作ったロボットが暴走しました！
今は俺が押さえておくので救援をお願いします！」

「分かった！！
待っている！！」

白夜さんへの連絡がすんだのでエリスさんを見ると

「ば…バカな」

エリスさんは気が動転している

「何故だ！

リミッターが解除されたいる…

このままでは殺人兵器と変わらない…

確認は昨日したはずなのに…

何故だ！！」

パシン

とっさにほっぺを叩いて正気に戻させる

「分かりません

けど暴走してしまったんです

何か止める方法はないんですか！？」

そついうとエリスさんは多少落ち着いて

「う、うむ

奴の首筋には停止用のスイッチがある
それを押せば何とか…」

「分かりました

首筋のスイッチですね…！」

そして暴れているロボットに向かう

だがさっきのダメージが思いのほか効いていてよろけてしまう

「お、お前！

私をかばった傷が…」

「大丈夫です…

エリスさんは隠れていてください！」

そしてロボットへと向かっていく

「ターゲットヲ確認」

そして俺へと向かってくる

発砲してきたがかわして反撃に転じる

装甲は狙ってもダメージがないので

ガン

関節を攻撃する

バランスを崩し倒れる

その隙についてスイッチを押そうとしたとき

ガガガガガ

なんと床に発砲して反動で起き上がる

「ターゲット発見」

その言葉とともにエリスさんに向かって銃を向ける

「キヤアアアア」

俺は考えるよりも早くエリスさんの元に向かい

ガガガガガ

「グハッ…」

「なっ…天川…」

俺はエリスさんの前に立ちはだかり弾丸を食らった

「バ…バカ者！

私の事など構わなければ貴様がケガする事も…」

「いえ…

エリスさんが食らったら体があまり丈夫じゃないから死ぬかもしれない
なかったんで…」

「し…しかし…」

だがロボットは待つことはせずに

「ターゲット補足

ソレデハ攻撃開始シマス」

「ここまでか…」

だが俺はあることに気づき笑った

「遅えよ…」

バキン

ロボットは後頭部を殴られ吹き飛んだ

そして倒れた所に白夜さんが首筋のスイッチを押す

「すまない…

園音が道に迷ってね」

「はははっ…」

その声を聞いて俺の目の前は真っ暗になった…

…ここはどこだ…？

俺は白いベッドに横になっていた

「天川…目が覚めたか」

エリスさんがすぐ側にいた

「俺は…」

「貴様は気絶したのだ」

「すみません…心配をおかけました」

「ふんっ…別に心配などしていないからな！」

「あらあら」

嘘はいけないわよー」

白河さんがはいつてきた

「エリスちゃんたらすごい心配してたのよー」

とても楽しそうにいつてるな…

「エリスちゃんたらケガしてたのに私はいいから天川を

「そ、そんなことはどうでも良いだろ…！」

絶対エリスさんイジメて楽しんでるよ…白河さん…

エリスさん顔が真っ赤だよ

でもなんていったのか気になるな…

「ところであなたも凄いわね」

白河さんが俺にいきなりそう言った

「凄い？」

「ええ

普通だったら骨折しているケガなのに打撲程度ですんでいるんですもの」

すげーな俺

まあ園音に殴られていたら嫌でも丈夫になるけどな…

「だからもう動いても大丈夫よ」

「そうですか」

そしてベッドから立ち上がると

「天川」

エリスさんに呼ばれた

「何ですか？」

「あ、あああありが…」

「アリ？」

「ありがとう…」

「いえいえ」

そしてにっこりと微笑んで

「どういたしまして」

そのあと監視カメラに写っていた犯人の堂背は罰としてロボットの
実験台にされて全治一週間の傷を負った

自業自得だ

そのあとエリスさんにお詫びとして食事に誘われた
まともな食事にありつけてありがたいな…

「天川…か…」

エリスは研究所のプライベートルームで一人つぶやいている

「天川…いずれ私の物に…」

エリスは一時間以上そこで天川について一人つぶやいていた…

ロボット暴走！？（後書き）

ちなみに作者はエリスが好きです
あんま関係ありませんでした…

エリスとデート！？

「今日はエリスさんと食事だ」

エリスさんが何かを奢ってくれるなんて隕石が降ってくるかも知れない…

まあ奢ってくれるのはありがたいからな！

9時までに行けばいいんだよな

待ち合わせ場所は町のシンボル忠人口ドリゲス

どこかへと行った飼い犬を待ち続けてそのまま天国へ行ったという人を祭った像らしい

ただの変な人だよ…

しかもロドリゲスって何人だよ！

「ま、待たせたな！」

エリスさんがやってきた

格好はカジュアルな服でそれがとても似合って可愛い

まあ研究室では白衣しか見たことなかったからな…

「とても似合っていて可愛いですよ」

素直にそう言つと

「か、かかかか可愛いだと!!」

ええい! 変なことを言わずに行くぞ!!」

エリスさんは顔を真っ赤にしてそう言つと町に行く

本当なのにな…

天川達の後ろ

「エリスちゃんたら赤くなつて可愛い!」

「天川君はもてますねー」

「ぐぐぐ…」

天川さんが取られちゃいますー!!」

「あの新人…」

エリスを落とすとはやりやがる…

カッコいい俺の次にすげえな」

「総統は虫ほどもカッコよくないし凄くないので仕事をしてください」

「腹減つたー!!」

上から白河さん、白夜さん、葵ちゃん、総統、副総統、園音が天川

とエリスを追跡している

「こんな面白そうなこと見逃せませんよね」

「『モチロン!!』『』」

嫌な奴らである

天川視点

「どこに行くんですか？」

「さ、最初は私の買い物に付き合ってもらおう!」

エリスさんは最初に機械や工具の専門店に立ち寄った

…なんでそんな店が普通にあるんだよ…

「ツールセットとRK47の強化用のパーツを買ってくる」

そう言うときエリスさんは店の中へ急いで入っていった

急いでいったエリスさんにクスリときた

可愛いなー

秘密結社の愉快な仲間たち

「なんか俺らの紹介適当じゃね？」

「何の話ですか？」

「何だろ？」

総統と副総統が話していると

「あの店に入りました！」

葵ちゃんはやる気が余るくらいある

「うー！」

天川さんも入っちゃいましたー！」

「じゃあ追おうか」

そう言うと全員工具専門店に入った

天川視点

「しかし沢山あるなー」

そこには余りあるほどの機械が沢山あった

すこし見みると

「…なんだここ」

エリスさんがいる奥には専門的な機械がを取り扱っている、一般用にはなぜか変なものしかない…

例えば

頭のネジ

「誰のだよ!!」

何の利用法も浮かばないから返してやれよ!!」

すると近くの店員が

「そのネジはロドリゲスさんの頭のネジです」

「ロドリゲスさんの!」?

やっぱり頭のネジが外れてたんだ!!」

鈴木の木材

「鈴木って誰だよ!!」

「鈴木さんは3丁目に発生するホームレスです」

「発生って何だよ!!」

鈴木さん可哀想だよ!!」

人工盲腸

「いらねえええ!!」

何のために作ったんだよ!

しかもこれ医療器具じゃん！

「何ででしょう？」

「知らねーのかよおお！！」

エリスさんの買い物が済んで

「行くぞ」

変な店だった…

秘密結社の仲間

「すいませーん

ロボコップはありますか？」

「あ、ありません」

「ねえねえ

そこの綺麗なお姉さん！

俺とっしょにお茶しない？」

「総統…

いいかげんにしないとペンチで舌を抜きますよ…」

「お茶だけでも！」

プチッ！

「ほがあああああ」

「天川さんはどこー！ー！」

「お客様ー！！」

走らないでくださいー！！」

店員さんは疲れきってしまった

（凄い変な客だ…）

「皆さん

行きますよ」

「「「ハイ」」」

天川視点

「すまん…服が見たいんだが…」

「いいですよー」

エリスさんは近くの服屋に入った

…結構暇だなー

なんかないかな…

…園音がいる！？

秘密結社の仲間

「天川さんが園音さんを見つけましたー！！」

「隠れろー！！」

天川視点

「園音！

何でここにいるんだよ！」

「服屋に居たらいけないの？」

「いつもの店はどうしたんだよ！？」

とてつもなく安い服屋があるのだがここは良い服が売っている場所
なので園音に会わないはずなのに！

「まあまあ

気分転換かなー」

「…まあいいけど」

「じゃああたし行くねー」

園音はどこかへと行った

エリスさんはすぐさま帰ってきて沢山の服を持っていた

…俺が持つんだよな…

秘密結社達

「園音さんが帰ってきました!」

「どうだった?」

「うーん…
普通です」

「…そう」

()()結局どうなんだよ()()

天川視点

「そろそろ食事でもするか」

「はい」

何を食べるんだろう…!

「このレストランでいいか?」

「ぜ、全然大丈夫です」

そこは明らかに生活水準の違う人達が行くようなレストランだった…

エリスさん金持ちなんだ…

「す…」

あまりの値段の高さには驚いた

「私はフレンチだが天川はどうする？」

「俺も同じので…」

高すぎて自分で決めれない…

愉快

「縮めすぎだろ！

誰だかわからないよ！」

「総統

うるさいとまたペンチで…」

「すみませんでした!!」

ヘタレな総統

怖すぎる副総統…

さっきから静かなのは

園音は

「ラーメンがいい」と近くのラーメン屋に行った

白河さんと白夜さんは大人でマナーが完璧だから静かで

葵ちゃんは緊張のあまりガチガチだ

「何か食べましょうか」

副総統

「フレンチかな」

白夜さん

「パスタがいいな」

白河さん

「フレンチで」

葵ちゃん

「ふふふふフレンチで！」

「フレンチね」

総統

「女の

「死んでください」ほがあああああ……」

天川視点

「美味しい！」

「うむ

良かった」

とても美味しい

エリスさんが気に入っているわけだ

店員さんがいきなり現れて

「いきなりですがサプライズとしてこれを」

東京フレン○パークの最後にあるダーツのあれがでてきた

商品は5つ

高級ワインセット

パジェロ

新型ノートパソコン

豪華な商品だなー

ロドリゲスの頭のネジ

なんでそれがでてくるんだよ……!!

デビルジュース

なんでだああああ……!!

割合は8割がデビルジュース

1割がネジ

0・6割ワインセット

0・3割ノートパソコン

0・1割パジエロ

…これあげる気ねーだろ！！

「デビルジュース！デビルジュース！」

あからさまにあげる気が感じられないよ！

投げたダーツは

「…ノートパソコン！！！！！」

ヤッター！！

たまには良いことがあったー！！！！

「ちっ！

…どうぞ」

あからさまに舌打ちされてぞんざいに扱われた

ひどくね…？

「そろそろいくか」

「そうですね」

そしてお金を払い「エリスさんが」出発した

「エリス様：またのご来店を

隣の甲斐性無し様：二度と来ないでください」

…俺の扱いひどいよな…

総統達はというと

「うまい」

「なかなかです」

「おいしー！」

「いい味だ…」

満喫していた

「いきなりですがサプライズとしてこれを」

以下略

「俺がやる！」

「総統が…」

だが総統はダーツを受け取り

総統が投げる

「いくぞ！」

ヒューーーーー

ストーン

「…デビルジュースです！」

「…このバカ…!!」

パキッボキッグシャドカドゴーン

「デビルジュースを飲ませた」

「総統を倒した」

「総統？」

大丈夫ですか？」

「総統から返事がない
ただの屍のようだ」

「バカは放っておいて行きましょう」

天川視点

今日は楽しかったな

ノートパソコンも貰えたし

「今日は…どうだった…」

エリスさんは自信なさげに聞く

「とても楽しかったです！
ありがとうございます！」

「うむ…」

帰ろうとするとエリスさんは

「…すまんが頼みがある」

「何ですか？」

「…敬語を止めてくれないか…？」

それはエリスさんと仲良くなった証拠

「…わかったよ
エリス」

そう言つとエリスは真つ赤になつて

「よ、よ、よ、呼び捨てされた…」

そして

「うあああああ！…！」

…ダッシュで帰ってしまった…

副總統

「見てて恥ずかしくなるわ…」

葵ちゃん

「天川さん…」

私も呼び捨てに…」

白夜さん

「青春だね」

園音

「終わった？」

總統

「…「返事がない、ただの屍のようだ」」

嫌な奴らですね

「ありがとね」

エリスちゃんの初デート面白かったわ

えっ？

そうよ

うん

情報ありがとね

頑張ってたね

分かったって唐木君

バイバーイ！」

そして白河さんは電話を切った

教訓

白河さんは敵に回すな！

エリスとデート！？（後書き）

そろそろコメディ100%の話を書こうと思います

意外と好きですけどね
こっぴつ話

看護部隊へようこそ（前書き）

色々用事があつたので更新が遅れ、久々の更新になりました

看護部隊へようこそ

「看護部隊か…」

憂鬱だ…

なぜならあのバカがいるからだ…

行きたくね…

到着しました

「天川さん

貴方には葵さんと組んで患者さんの世話と薬の処方をお願いするわ」

白河さんはそう言うとおわてて病室へと駆けていった

忙しいんだろうな…

「ドラマ録画しなくっちゃ！」

仕事しろよ！！

さっきの尊敬した気持ちを返せよ！

「朔さんよろしくお願いしまーす」

「うん、よろ…えっ!?!」

なぜか名前で呼ばれてる!?

「なんで名前なの!?!」

「負けられませんから!?!」

何のことだ...?

「...私の気持ち...わかってもらいたいですー!」

「えっ?

なんかいった?」

「いえ、何でもないです!

仕事行きましょー!」

「ところで患者なんてそんなにいるの?」

「はい

体調不良の人や戦闘部隊の人、前線で戦ってる人たちがケガをして
やってくるんですー!」

「前線?」

「怪人さんとか戦闘員さんの一部が前線部隊として正義のヒーロー
と日夜戦って働いているんですー!」

「そうなんだ」

ようやく病室に着いた

「まずこの人は体調不良です」

「昼食の人肌ステーキを食べたら気分が…」

バカだろ！

明らかに食べたら吐きそうだよ！

「病院食の改善をお願いします…」

病人にそんなもん与えるなあああ

「吐き気止めだしますね」

「次にいきますかー」

「痛い…」

「この人は園音さんに殴られて全治一ヶ月です」

園音えええ！

せめて手加減しろおお！！

「楽にして…」

園音えええ！

謝れえええ！

「痛み止めだしますねー」

「ようやく…楽になれる…」

なんか死んでしまみたいだな…

「次に行きますー」

「デビルジュースを飲んだことにより意識不明になった方です」

デビルジュースってもう劇物の類だろ！

「意識を失ってもう一ヶ月になりました」

デビルジュースの販売を禁止しろおお！！

「次は…嫌だなー…」

「ここは堂背さんのところでーす」

なんかテンションが下がったな

気持ちは判るけど…

「入院してから器具を壊したりセクハラしたりガラスを割ったりみなさんのご飯を食べまくったりしたので隔離しています…」

バカ堂背死んでしまえ！

…ん？

奥から声が聞こえる…

「もう直ったんだから退院してください！」

「嫌だ！」

ここにいたらうまいご飯が食えるんだもん！」

「…園音さん呼びますよ…？」

「帰ります！」

ウザいなー

堂背

「嫌なのでもう良いですか？」

「うん、早くいこうか」

「次にいきましょー」

「怪人さんの病室です」

いろんな怪人がいる…

なんか別世界みたいだな…

なんか怪人らしい人が看護婦さんに起こられている

「クーさん！

触手を刺して患者さんに電気を流さないでください！」

「スイマセン…」

おそらく電気クラゲの怪人だろうな

「今重病人の怪人は二人だけです」

だれだろ…？

「ウルフさんは狂犬病にかかった恐れがあるので隔離しています」

なんか格好悪いなオイ…！

「野犬と戦って付いた傷らしいですよ
ちなみに戦いには負けたそうです」

ウルフさん弱っ…！

「次が最後になります！」

ようやく最後か…

「ゴキブリ男さんです」

ひさびさだなオイ！

「ゴキブリ退治のためのバルサンを焚いたときに逃げ遅れて倒れた
そうです」

バカだろ！ゴキブリ男！

「たまにゴキブリ退治のホウ酸団子を食べて瀕死になるので気を
付けてください」

やっぱりバカだろ！

「今日はこれくらいで終わります」

「お疲れ様」

疲れたー…

明日からも頑張るか…

今日は最終日

仕事は何事もなく終わった

この前はゴキブリ男がホウ酸団子を食べて死にかけたり…
総統が副総統に殴られて意識を失ったり…

園音に殴られて来た人が十数人やつて来たり…
白夜さんがボロボロになって現れたり…

なんか危ない人多くないか？

仕事も終わったし帰ろうかと思っていると

「朔さん！」

「葵ちゃん！？」

なぜか葵ちゃん登場

「お願いがあるんですが！」

「…どうでも良いけど…着替えてる途中なんだけど…」

そう

いまは着替えていて上半身裸である

「にゃーーーー！！！！」

すすすいませーん！！」

ネコ！？

着替え終わって外に出ると葵ちゃんが真っ赤な顔をしてそこに座っていた

「葵ちゃん

お願いって何かな？」

すると葵ちゃんは呼吸を整えて

「私を名前で呼び捨てにしてください」

「…はい？」

いきなりなんで…？

そう思っていると

「私…もつと朔さんと仲良くなりたいです！

だからこうやって名前で呼びあえば親密になれると思って！」

…かわいい…

かわいい物が実は大好きで断る気が無くなる

まあ断る気は元々なかったけどね

「じゃあ呼ぶよ…

葵」

「はにゃあ…」

そう言うと葵は溶け出した

「葵ーーーー!?」

…溶けた葵が直るまで一時間かった

「葵ちゃんの面白い情報ゲット」

そう言っていると白河さんはクスクスと笑って天川たちを眺めていた

白河さんは怖い!

by 作者

看護部隊へようこそ（後書き）

一週間に二話は更新していこうと思います

食堂へようこそ

「今週は食堂だな」

嬉しいなー！

なぜなら今週が終われば給料日もんな！

ピピピピピ

「おっと時間だ！」
さあ行くか

「うづうづうづう」

「えっ…？」

長瀬さんが泣いていた

なんで…？

「よ…ようやく登場できた…
もう…忘れられている…と思った…」

そついや全く長瀬さんに会わなかったな…

なんか悲しくなってきた…

「じゃあ頑張ろー!」

立ち直り早っ!

「まず今日は君の実力をみるよ」

「何をして見るんですか?」

「皿洗い、料理、買い出し、デビルジュースの制作、素材になる一通りやってみて!」

「デビルジュースと素材はお断りだよ!」

素材って死んじゃうじゃねーか!

「まあ頑張つて」

八時間後

「君は料理が良いかもね!」

...

料理を作る時にデビルジュースが調味料として入っていた...

皿洗いの時に洗剤がデビルジュースだった...

買い出しの時はデビルジュースの材料を頼まれた...

「デビルジュースばっかりかよ!!」

「うーん」

まあデビルジュースって人気だから」

「意識不明になる劇物なの!!?」

イヤだよ!

そんなブーム!

「気にしない気にしない」

「するわ!」

「まあ明日から厨房頼むね」

次の日

「お昼になったら戦争だから気をつけてね」

なんか大げさだなー

「あんぱーん!!!」

「唐揚げ定食を頼む!!!」

「貴様！

それは俺のだ！！」

「食らえパイルドライバー！」

マジで戦争だ！！

殴り合いになってるし！

つーかお前等はこの情熱を仕事に使え！！

ようやく終わった…

「ふー、疲れたね」

これが続くのか…
マジでキツいな…

「白河ちゃん！」

「あら何？長瀬ちゃん」

「なんか売り上げが上がるいい方法ない？」

「うーん…

そうだ、天川君のオリジナルメニューで2人は獲得できるわ」

「わかった！ありがとね！」

なぜかいきなり長瀬さんからオリジナルメニューを作れと言われた…

何でいきなり…？

食堂で

『天川特製スペシャルメニュー
一皿 二千年』

「高！！」

エリスが食堂にきました

「うーむ…何にするか…
んっ！？」

天川特製メニューを見て

「天川特製メニュー一人前たのむ！」

「お待たせしました」

天川特製メニューは和、洋、中がミックスされたスペシャルメニューである

「い、いただくとするか…」

そして一口…

「…!!」

うまい！天川…惚れ直したぞ！」

めちゃくちゃ幸せそうな顔で完食した

葵の場合

「うーん

なんか良いメニューないかなー」

天川特製メニューを発見すると

「さ、さ、朔さんの手作り…
うっ…鼻血が出てきた」

興奮しすぎだ

「あ、天川特製メニューを」

「わかりました」

ドキドキして顔が真っ赤になっている

「お待たせしました」

「…すごい」

あまりの豪華さに呆然としてしまう

「い、いただきます！」

そして一口

「…おい…しい」

ポロポロ泣いてしまった

葵は料理が出来ずカップラーメンで生活しているため手料理の美味しさに感動したのである

「お、おいしいよー！」

泣きながら完食した…

「美味しかった…」

また食べようかな…お会計お願いしまーす」

「二千円になります」

「…はい？」

「二千円になります」

後日談だがその後の三日は飢えに苦しんだそうだ

「天川君のオリジナルメニュー好評だったよー
値段以外…」

「？」

最後がよく聞こえませんでしたよ？」

「あー、気にしなくて大丈夫」

なんか気になるな…

「明日も頑張つてね」

次の日

「天川君…

君に新メニューの批評をしてもらいたいの」

「俺！？」

なぜに？

「まあ細かいことは気にしないで」

いや！

気になるよ！

「まず最初のメニューは

しかも色は鳶色に…

鳶色なんて絵の具でしか見たことねーよ…！

「これぐらいかなー

もつと作りたかったけど」

「作らないでください…！」

次の日

「ようやく最終日か…」

給料日…

早く来い…！！

「天川君

明日は予定があるかな？」

「いえ、ないですけど」

「よかったー！

あのね…出来ればいいんだけど…」

もしや…！

「魔王ジュースの試飲してくれない？」

「全力でお断りです!!」

死にたくないし!

「白河ちゃんにお礼を言わないと」

エリスが天川特製メニューを毎回食べたおかげで

「食堂の懐が潤ったー!」

ちなみにエリスに対して天川特製メニューの値段を一気に上げていた

ちなみに最後の値段は

一万円

…エリスは金づるか?

待ちに待った給料日！

「給料日だあああ！！！」

テンションはいつもの十倍！

まともな生活をやっとおくれるぜー！！！！！！

会社につくと

「はいはい

給料を渡しますよ！」

副総統が給料袋を渡している

「いったい…いくらだ…？」

そして俺に渡される

「…へっ？」

四十万円…？

「やつつったああああ！！！！！！」

「あなたは頑張っていたからすこし水増ししといたわ」

ありがとう！

副総統！

一生ついていきます！

「今日は給料を渡すだけだからもう帰って良いよ」

ちなみにブラックリング社は悪の組織のため情報漏洩を防ぐため銀行を使わず手渡しをしている

「帰るかー！！」

「四十万円…
やったー！！」

うれしくて涙がでてくるぜ！

ピンポン

「はい」

「天川！

家賃回収に来たで！」
この人は大家の三重重蔵みえじゅうぞう

オールバックの髪にサングラス、関西弁で完璧にアッチ系の人だ

「いくらですか」

「二十万や」

…はい？

にじゅうまん？

「高ー！

家賃は三万だろ！？」

このアパートは家賃三万でキッチンとトイレ完備の所だ

「たけーよ！！

ぼったくつてんじゃねえ！！」

「バカかてめえ！

壁やドアの修理代が入ってんじゃ！」

園音えええ！！！！

俺に払わせてんじゃねええ！！

「園音がやったんだから園音に請求しろよ！！」

「わしは死にたくねーんや！」

「なんで死ぬんだよ！」

「請求したらわしにものすごいスピードの拳がきたんや」

園音えええ！

脅してんじゃねえか！

「それに…おめえ金持ってたんだろ…？
四十万」

「な、何でそれを！？」

「園音からの情報や！」

…園音のやつ呪い殺そう

ばらしてんじゃねえええ！！

「つーことや
持っていくで！」

俺の二十万…

出費二十万

残金二十万

「くそっ…
俺の二十万が…」

…まあこうしてても仕方ない

食材でも買いに行くか

「重い…」

ずいぶん買ったからな…

当分はこれで持つぞ

「天川じゃん」

「いきなりうるさいぞバカ」
堂背がきたよ…

こいつと関わるとろくなことになるからな…

「何のようだよ」

「ちょっと逃げてんだ」

逃げてる？

トトトトトトトト

なんか沢山の人が来たー！！

「「「待ちやがれー！！」」」

「何したんだよ！
てめーは！」

「…少し店を壊したり…
少し物を壊したり…
あと…色々…」

「このバカが……！！！」してんだ！

逃げていく堂背に

「死ねえ！！
このクソやろう！！」

誰かがボールを投げた

だがそれはすっぽ抜けて

グシャ

俺の買った食料に当たり

衝撃で飛んでいった食料は

グシャ

…車にひかれた…

「…嘘だろ…」

結局…買い直した…

金が…

出費五万

残金十五万

「…ん？」

なぜか白河さんがいた…

「どうしたんですか？」

「天川君！

良いところに！」

なぜか興奮している白河さんは俺に色紙を渡した

…なんで？

「あそこに人気ドラマの俳優さんがいるんだけど…
サインもらってきて！」

何で俺が？

「自分で行けばいいじゃないですか」

「…照れちゃって話せないから行けないの」

うーん

意外と恥ずかしがり屋なんだな…

お世話になっているしな

「じゃあ行きましょうか」

「お願いね！」

さあ行くか

「すいません」

「何ですか？」

「あの人気ドラマの俳優さんですよね？
サイン貰えませんか？」

「いやー、もう何回も書いてんでそれはちょっと…」

「そこを何とか！」

「うーん

仕方ないですね…」

そう言々とサラサラと色紙にサインを書いて

「これで良いですか？」

「ありがとうございます！！」

何とか貰えたー

そして白河さんのところへ向かうと

ドン！

「いてーー！！」

「どうしたんですか兄貴！！」

「骨が折れた！！」

…うわー

古典的な方法だなー

「おうおう！

てめー！慰謝料払えや」

うーん…

撃退するか…？

「兄貴は骨粗鬆症なんだぞコラ！！」

「ガラス並の脆さなんだぞコラ！」

ええええ！！

まさかの展開！？

「っ！か骨弱っ！！」

「なら…仕方ない…」

「いくらですか…？」

「五万で許してやらあ！」

「以外と安いな…」

「でも俺の金が…」

「出費五万」

「残金十万」

「白河さんどうぞ」

「天川君ありがとうね！」

「白河さんが喜んでいる」

「まあこれはこれで良かったかな…」

「じゃあ俺は帰りますね」

「気をつけてね！」

白河さんに見送られて俺は帰宅した

…まだ1ヶ月もあるのにもう十万かよ

なんか貧乏神でも憑いてるのかな…

「呼んだ？」

うわっ！

いた！？

「って堂背かよ！！」

何でいるんだこのバカは！

「…家賃払うから屋根裏に住ませて」

「アパート探せば良いだろうが」

「…不動産屋にいったらボコボコにされるから」

…こいつ本当に何やってるんだよ

「三万円払うから！」

家賃を払わないで済むな…

「まあ良いだろう

だけど迷惑かけんなよ」

「おう！」

と言うことで堂背と同居？する事になった

「なんか生活感に溢れてねえか？」

追い出して1ヶ月近く経っているのやけに綺麗だ

「…実は追い出された三日後からココにいました」

「いたのかよ！」

「電気も使ってた！」

「…死ね！」

やけに電気代が高かったのはそのせいかー！！！！

「天川君には感謝ね」

白河さんは大量にあの俳優の色紙を持っていた

「俳優の色紙…知人を行かせて沢山手に入れたけど…
幾らになるかしら？」

そしてネットオークションで色紙は売られていく…

…白河さんって狡猾だな…

待ちに待った給料日！（後書き）

そろそろキャラクター紹介をしようかと思っています

あと感想待ってます！

ヒーローと対決!!

「殴りこみだー!!」

「「「オーー!!」」」

園音が言った言葉に俺は帰りたくなった

何で俺のいるときに殴りこみに行くんだよ…

…まあこうなったのも少し俺に原因があるけど

一時間前

「園音、今日は何をするんだ？」

「うーん…」

そう言えば最近前線にいる知り合いの怪人に頼まれてたな…」

「何をだよ」

「ヒーローを倒すの」

「またかよ!？」

なんでめんどくせことしなくちゃならねーんだよ

「ちなみに…結構ランクの高いヒーローだからボーナスがでるよ…」

「…いくら？」

「最大百万かな？」

「行きます！」

…我ながら意地の汚いこと

だって金が無いし！

…そう言えば

冷静に考えてみると、相手の情報が全然ない

どの程度の強さでどんなヒーローなのかも分かってない

駄目じゃん！俺！

「さあ駄目でグズグズ言ってる甲斐性無しの天川！
出発だ～～！！！」

…園音

覚えてろよ…

「今回のヒーローはどんな奴なんだ？」

聞いておかないと後で後悔しそつだもんな

「なんか戦隊ヒーローらしくて怪人は何十と倒してるらしいよ」

「なんで前線の人はこんな依頼をしたんだ？」

「なんか親友がやられたらしいよ」

敵討ちか…

なんかいい話だな

「でも、なんで自分で行かないんだ？」

「どうしても外せない用事があつたんだって」

ふーん…

前線も大変なんだな…

「なんでも一万円でファイバーになってなかなか抜け出せないって
嬉しそうに言ってたよ」

「パチンコしてんじゃねえか！！！！」

そいつ敵討ち考えてねーだろ！

「もう全然やる気でねえ…」

敵討ち頼んだ奴がそれだもんな…

「ここが敵の出現ポイントだよ」

そこは…

「なぜに遊園地？」

…いや、マジでなぜに？

「週二でバイトしてるらしいよ」

「なんか悲しいな」

…なんか泣けてくる

活躍しててもバイトしないといけないなんてな…

「貴様等は！」

そこにはよく見る戦隊ヒーローのように全身タイツをきてマスクを被った五人組がいた

「ブラックリングめ！

貴様等の野望は俺達が防ぐ！」

なんか熱血だなー

「俺はレッド

貴様等の野望を打ち砕く格闘家だ！」

なんかテレビでよくある性格…

「私はグリーン

このバカレッドを暗殺し…リーダーとなる男」

めちゃくちゃ野心的じゃん！！

しかも平和を守る気なさそうだし！

「ブツブツ…ブルー…ブツブツ…呪い殺す…ブツブツ…」

いやいや！

戦隊ヒーローにあるまじき性格だろ！！

「ハーン！

そこのお嬢さん！

このイエローとお付き合いしない？」

園音をナンパしてきたぞ！

あいつ！

「いや、お断り

むしろ死んで欲しい」

ひどっ！

まあ気持ちは分かるけど…

「…「カチカチカチカチ」」

「ピンク！

またケータイか」

いやっ！！

さすがにそこまでやる気のないヒーロー初めてだよ！

「五人そろって！「カチカチ」」

いやっ！

一名そろってねーよ

「バイト戦隊ビンボージャー」

「うわっ！

そこまで悲しい名前の戦隊ヒーロー始めてみた！」

「ブラックリング！いくぜ！」

そう言ってビンボージャーがかかってきた

「じゃあ第一部隊ゴー」

そう園音が言うと第一部隊はかかっていった

ちなみにコッチは第三部隊まであって第一部隊は弱く第二部隊は普通で第三部隊が強いのだ

俺は第三部隊だ

「くらえ！」

レッドは戦闘員に華麗な体さばきでいなし、反撃していく

…強いな

グリーンは銃を使って戦っている

「死ね…」

パン！

…レッドに撃ったよ

しかも実弾を…

ブルーは自分の周りにお札を並べ何かを呟いている

ちなみに誰も近寄らない

…まあ気持ちは分かる

イエローはヒラリヒラリとかわして棒で反撃していく

「お嬢さん！俺の愛を受け取ってくれ！」

…キモッ

ピンクは…

「カチカチカチカチ」

ケータイを止めるおお！！

何にもしてこないから誰も行かない

…なんで来たんだ？

「第二部隊ゴー！！」

だが第二部隊も善戦したがやられた

「いよいよあたし達ね」

そして

「第三部隊ゴー!!」

俺はグリーンと向き合った

ちなみに園音はレッド

白夜さんはイエロー

バカ堂背は…知らない

「レッドの相手は…強いのか？」

「めっちゃくちゃ強い」

「グッド！」

なんで!?

「これで…リーダーに…」

…本当に成りたいんだね

「まあ貴様を倒さんとリーダー失格だからな…」

…リーダーで決定なんだ…

「いくぞ！」

グリーンが銃を撃つが、軌道は読んでいたため右に避ける

そしてすかさず接近して、

「どらぁ！」

回し蹴りを放つ

顎に打ったつもりが反らされて肩に当たる

「まだまだですね」

そう言うと銃口を向けた

「ヤバイ…！」

だがとつさに近くにあったあるものでガードする

…堂背で

パンパンパン

「いだだだだだ！」

そう言うと堂背は気絶した

「ガードが間に合って良かった…
堂背！助かった」

感謝はしないけど

「くっ…やるな」

俺は近くにあった鉄パイプをもち、グリーンを鉄パイプの間合いに入れる

振り下ろしたが銃でガードされる

…だが予想範囲内だ！

そしてすかさず鉄パイプを放した

「なにっ！」

驚くグリーンの頭に肘を入れた

「がはっ！」

グリーンが目を回し昏倒した

「よし…試合終了！」

白夜さんを見ると

「うーん…もう一発いこうかな？」

「…勘弁…して…ゴハッ…ください」

… すごいよ！白夜さん！

イエローはボロボロになっていて戦う気力はゼロだろう

「白夜さん強いんですね」

「まあ、こう見えても元デットリーズって言う暴走族のリーダーだったからね」

「…マジで？」

デットリーズは関西でもっとも強いチームだ

その元リーダー…

「うーん…」

あのころは荒れてたからね…

今は落ち着いてるから大丈夫だよ」

「そっなんですか」

うーむ

意外な一面をみたな…

「あつ！園音は！？」

振り向くと

「ぐほお！」

…心配して損したな

圧倒的なまでに勝っている

「なかなか防御が巧いねー」

確かに園音相手にここまで粘ったのは凄いがあまりの威力にボロボロになっている

「くっ…」

こうなったらアレを使うしかない!」

そう言つと

「秘密兵器!

ヒーローバイト砲!」

もの凄くセンスの悪い名前の武器は超巨大なバズーカだった

「いくぜ!」

レッドがバズーカを出し

「…ブツブツブツ…怨念弾…」

ブルーが怨みのパワーで出来た弾を装填する

「うおりゃー!」

イエローが抱え

「…距離よし！弾よし！ターゲットロックオン！」

グリーンが照準を合わせる

「くっ、マズいぞ…」

あれはハンパない！

「あー、あれは私でもキツいわ」

「ピンチだな…」

「ピンク！！
トリガーを！」

そしてピンクが

…いなかった

「なに！？」

ピンクがいた場所には

「デートがあるから帰るんで後はよろしくー！」

「ピイイピンクー！！」

「…いくか」

そしてとどめを刺しに行くときに思った…

ピンクを解雇しとけよ…

「ふうっ…終わったな」

ビンボージャーを倒したが結構な被害もでていた

「軽傷が35名

少し深い傷を負ったのが12名

重傷が一名です」

「重傷の一名って誰？」

「えー…堂背君ですね」

…堂背…すまん…

「それでは帰るとするかな」

園音のその一言でみんなは帰り出す

「あー…今日も疲れたな…」

今度から勘弁して欲しいな

「そう言えばブルーはどうやって倒したんだ？」

あのブルーを倒せるなんてどんな手を使ったんだ？

「あの…僕が倒したんです」

そこには童顔の男がいた

「あんたは？」

「さいとうゆうこうすけ斎藤祐一と申します」

…気づいたんだけど新キャラを出し過ぎじゃねーか？

「どんな手を使ったんだ？」

「これを投げたんです」

…魔王ジュース！

「完璧に兵器じゃねえか！」

魔王ジュースは飲み物の域を超えてるぞ！

「斎藤か…覚えておくよ」

「はい！」

「やっと帰ってきた…」

長かった…

だけどボーナスも出るし結果オーライか！

「天川！心配したぞ」

エリスが俺のところに向かってきた

「よく頑張ったな！」

なんでエリスが誉めてくれてんだろ…？

「おかげでいい実験体を手に入れられたぞ」

「実験体になるの！？」

「うふふ…今度の試験薬が試せるぞ〜！」

エリスが喜んでいる姿はとても可愛いが言っている内容はキツイ…

同情するよ…

ビンボージャー…

「スツカラカンだよ…」

「敵討ちは終わったよ!」

敵討ちを頼んだ怪人は電気クラゲのクーさんだった

「ありがとう…友達も喜ぶよ…
今月どうしよう…」

スーさんはパチンコで一文無しとなったせいで死にそうな顔をして
いた

…同情できね…

ちなみにこの後に病院へ帰り、門限を破ったせいで白河さんに怒ら
れたそうだ

同情はしないよ…スーさんのことは…

ちなみにビンボージャーは実験体として様々な実験に使われること
となった…

なんだか涙がでてきたよ…

待ちに待ったボーナス！

今日は先日の功績を讃えてのボーナスの日

いくらかな？

会社につくといきなりホールに召集された

何するんだ…？

「あー、総統だ

帰ってきてーがお前らの戦績を讃えてのボーナスの日だから帰れない」

…相変わらずやる気ねーな

「戦闘部隊だけなんだからほかの部隊に自慢するなよ」

マトモなことをいつてる…

「ではボーナスを配る

その前に」

なんか嫌な予感が…

「普通に渡しても面白くない…
だから！」

いやっ！

普通に渡してくれよ！

「第一回 ドキドキ？ワクワク！くじ引きボーナス大会」を開催する」

…なんだそれはあああ！！

「ルールは簡単

そこにあるボックスからくじを引け、そこに書いてある物がボーナスだ」

…運がものを言うのか

っ…か…普通にボーナスが欲しかったな…

「まずはその奴」

名も無き戦闘員が指名された

「はい」

「このボックスからくじを引いてみる」

「わかりました」

そして総統はくじの入ったボックスを引かせた

ガサゴソ

「これだ！」

指名された人が取り出したのは

「
…」

ボーナスは大型テレビ三台！」

そんなにいらねえええ！！

現金をくれよ！

しかもテレビが三台もあつたら邪魔だろ！

「次は…お前だ」

「はい！」

…その後、三十人ほどが引いたのだから、現金を引いたのはたったの
十人だけだった

ちなみに現金ではないボーナスは

甘栗一年分

なぜにつ！？

甘栗そんな貰っても迷惑だろ！

デビルジュース and 魔王ジュース詰め合わせ

…もらった人はマジ泣きしてた

嫌がらせ以外の何者でもねえええ！

っ！かその二つの単価が知りてえよ！

プレイステーション、スーパーファミコンセット

古すぎだろ！

一種の嫌がらせとしか思えねえよ！

総統プロマイド集 秘蔵版

もらった人はその瞬間にライターで燃やした

…気持ちは痛いほどわかる！

価値無さそうだし

「次は…そいつだ」

次に指されたのは斉藤君だった

「はい！」

そして

ガサゴソ

「うーん…これかな？」

出した紙に書かれていたのは

「…当たりだ

ボーナス百万円」

すげえよ！

斉藤！

「さらにダブルチャンスでもう一枚だとよ」

そのあたりは凄すぎだろ！

ガサゴソ

「これかな？」

「また当たりだつて！？

米百キロだ

もってけドロボー！！」

凄すぎだろ！斉藤！

「次は…バカそうなお前」

次は堂背だ

あとバカそうなのではなくバカである

バカが引き始める

ガサゴソ

「…これだっ！」

引いた紙をみて総統はニヤリと笑い

「残念だったな！」

何も無しとか！？

「エリスの研究の実験台だ」

…それはボーナスじゃなくて罰ゲームじゃね？

説明のためにエリスがやってきた

「実験台、今研究しているこの人体回復強化薬を使えば貴様は…回復力が高くなりケガが少なくなる

失敗すれば死ぬぞ」

リスクの割にリターンがすくなっ！

堂背に始めて同情したよ！

「助けてくれえええ！」

だが同情するが助けはしない

面倒くさいしな

「次は…白夜」

白夜の番になった

いい人だから良い物が当たって欲しいな

白夜さんが引いた

ガサゴソ

「…これかな」

引いた紙を見て総統は

「…良かったな」

白夜さん良い物が当たったんだ

良かったな

「図書カード五十万円だ」

よくねえええ！！

何だよ！それ！

使う用途が限られすぎだろ！

白夜さん喜んで良いのか悲しんだ方がいいのか困ってるし！

「次は…園音だ」
園音が…

まあアイツは運がいい方だからな

「じゃあ引くよ」

ガサゴソ

引いた紙を見た総統は

「…」

何故か総統が黙っている

しかもめっちゃめっちゃ冷や汗かいてるし！

「ボーナスは…ブラックリング特製武器…ジェノサイド…だ」

ダメだあああ！！

そんな大量破壊兵器みたいなものを渡したらダメだあああ！

「どんな武器なの？」

「…このグローブなんだが…」

えっ！？

まだ救いがあった！？

「これを付けるとパワーは二倍」

ダメだったあああ！！

「それに強力な振動で破壊した物をチリにする」

…この世界は終わったかも…

園音は何故か困った顔をしていた

「あー、ちよっと事情があって現金が良いんだけど…」

「ああ！

喜んで変えてやるよ！」

…助かった

「いよいよ最後の奴だ」

俺だ

なんか色々と変な物ばかりだったな…

俺のは良いのであってくれよ…！

ガサゴソ

「…これだ！」

その紙にかいていたのは

「レアくじだ！

お前は特別昇進だ！」

レアくじ！？

何でそんなもんが有るんだよ！

「お前の部署は無いんだっけな…」

頼む！！

園音みたいに現金になってくれ！

「あー…

そうだ！」

現金か！？

「お前が主任の新しい部隊を作ってやるよ！」

…なんでそうなるんだああ！！

待ちに待ったボーナス！（後書き）

続きます！

でもその前にキャラ紹介をします

新キャラも詳しく紹介するので楽しみにしてください

第一回キャラクター紹介！（前書き）

今回はキャラクター紹介です

色々と詳しく書いてるので見てください

第一回キャラクター紹介！

天川 朔「あまかわ さく」

年齢

19歳

身長

182センチ

体重

67キロ

血液型

A型

趣味

読者、料理、ボーリング

特技

武術、料理、パソコン

プロフィール

この作品の主人公

いろいろと特技があるが一流ではない器用貧乏
常に金に困っている

実は可愛い物が大好きでたれ○んだやり○ツクマの商品をいくつか
持っている

苦手なものは女性の涙

キャラからのコメント

「これからも秘密結社へようこそをよろしくな！」

香咲こしざき 葵あおい

年齢

19歳

身長

163センチ

体重

「乙女の秘密です！」

血液型

O型

趣味

猫と戯れること、ショッピング

特技

応急処置、猫をすぐに発見できること

プロフィール

花も恥じらう19歳

天川に一目惚れしている

猫が大好きで家には何匹も住んでいる

実家が医者だったために自然と治療が得意になった

苦手なものは昆虫類

キャラからのコメント

「あのお子ちゃまに負けずに天川さんをゲットするんで応援よろしくですー」

高上 園音（こうじょう そのね）

年齢

23歳

身長

178センチ

体重

68キロ

血液型

B型

趣味

ストリートファイト

道場破り

特技

スポーツ全般

プロフィール

生まれついで破壊神

小さい頃はガキ大将として名を馳せていて、小学生にして高校生八人を病院送りにした怪物

頭はなかなか良いが後先を考えず行動するためあまり頭の良さをわかって貰えない

苦手なものは文字だらけな本「見ていると頭痛がする」

キャラからのコメント

「あたしに勝てる奴はかかってこーい！」

堂背 次々（どうせ じじ）

年齢

19歳

身長

167センチ

体重

63キロ

血液型

A B型

趣味

ゲーム

特技

受け身、受け流し

プロフィール

バカ、この一言につきる

なにげに殴られたりと暴力をよく振るわれている
苦手なものは人体の急所を攻撃する人

キャラからのコメント

「俺の説明ひどくね!？」

白夜 京（しらや きょう）

年齢

23歳

身長

178センチ

体重

60キロ

血液型

A型

趣味

読書、パチスロ

特技

速読、目押し

プロフィール

温和な常識人

優しいが、敵と見なしたものには容赦しない

過去にはデットリースのリーダーだったという過去がある
その時の通り名は、「笑う無限地獄」

苦手なものは炭酸

キャラからのコメント

「ゆるーく頑張っていくのでよろしくお願いしま…
園音さん！
手加減しないとその人死ぬって！」

エリス・クロローゼ

年齢

16歳

身長

142センチ

体重

「企業秘密だ」

血液型

A B 型

趣味

実験、改造、解体、天川の写真を眺めること

特技

改造、ロボット制作

プロフィール

唯我独尊な科学者

ある事件「ロボット暴走!? 参照」で天川にベタばれした

天川のことに関しては何でも興味がある

身長のことになると見境がない

苦手なものは辛い食べ物

キャラからのコメント

「天川と……ら、らぶらぶになるために私は頑張ろう!」

唐木 康夫 (からき やすお)

年齢

25歳

身長

183センチ

体重

50キロ

血液型

O型

趣味

薬作り

特技

爆薬作り、毒薬作り

プロフィール

エリスの親戚

エリスの事を実の娘のように考えている
ちなみに婚約者がいる

苦手なものは蜂

キャラからのコメント

「出番がないな…」

長瀬 美喜（ながせ みき）

年齢

18歳

身長

157センチ

体重

「秘密！」

血液型

A型

趣味

料理

特技

料理

プロフィール

食堂の責任者

どんな料理でもうまく作れるが創作料理に関してのセンスが無い
苦手なものは虫類全般

キャラからのコメント

「おいしい料理作るからね！
出番増やしてよ！」

しろかわ
白河 天使 てんし

年齢

「秘密ね」

身長

165センチ

体重

「あら、乙女のプライバシーよ」

血液型

B型

趣味

ドラマ鑑賞、他人の秘密と弱み集め

特技

注射

プロフィール

看護部隊の主任

なにげにエグい性格をしている

他人の弱みを集めて快適な仕事ライフをしている
苦手なものは無し

キャラからのコメント

「私のところに来たらどんな情報でもあるわよ」

総統

年齢

29歳

身長

172センチ

体重

62キロ

血液型

B型

趣味

ナンパ、仕事サボり

特技

仕事をサボること

プロフィール

ブラッキングのトップ

仕事に対してのやる気がない

イケメンをこの世で一番嫌っている

苦手なものは副総統

キャラからのコメント

「イケメンは死ね！

女の子は俺と付き合おう！」

副総統

年齢

「死にたいの？」

身長

170センチ

体重

「殺しましょうか？」

血液型

A型

趣味

「…秘密よ」

特技

事務仕事

プロフィール

謎の多い女性

推定年齢は

「覚悟はいい？」…忘れました
趣味については近々その話を…

苦手なものは総統

キャラからのコメント

「みなさんもブラックリングに来てくださいね」

斎藤 祐一 「さいとう ゆういち」

年齢

18歳

身長

162センチ

体重

50キロ

血液型

AB型

趣味

懸賞

特技

パチスロ、パチンコ

プロフィール

新キャラ

童顔で女装させたら似合いそうなタイプ
神がかり的な運の良さでギャンブルがめつばう強い

苦手なものは苦いもの

キャラからのコメント

「まだまだですが頑張りますのでよろしく願いします!」

第一回キャラクター紹介！（後書き）

キャラが増えたらまたやと思います

新しい部隊結成！！

「どうなるんだろう…俺」

昨日のボーナスで新しい部隊を作ると言った後に總統は

「時間がかかるから明日まで待つてくれ」

そう言つと總統はどこかへと消え去つていった

…こんな時ばかりにやる気を出さないで仕事にやる気を出せよ…

…そろそろ行くか

「天川く至急總統のプライベートルームに來なさい」

呼び出してきた…

「つーか俺が來たタイミングで放送つて何でわかるんだよ」

エスパーか？

「あの…」

總統は一時間前からずっと二分おきに放送していましたよ」

齊藤君が教えてくれた

っーかバカだろ！総統！

「天川です」

「どうぞ」

…あれ？

総統ではなくて副総統の声がしたぞ

ここプライベートルームなのに…

「いらつしやい」

プライベートルームは真つ赤な絨毯に大型テレビ、シャンデリア、高級なソファー、さらには虎の毛皮が敷いてあった

…無駄遣いしすぎだろ…！

その部屋の真ん中に副総統がいた

だけど副総統だけで総統が影も形も…

「うわっ…！」

余りに驚いて声が出してしまった

だって赤い絨毯のところに血痕が…

しかも見た感じ数分前の血痕だぞ…

「…総統は…どうなったんです…？」

「本当に知りたい？」
全力で首を横に振った

聞いたらトラウマになる予感がしたからな…

「天川君

昨日は私が知らなかったとはいえごめんなさいね」

「い、いえ！
気にしてないです！」

「あなたの部隊を作る話だけど…
総統が許可して書類まで作っちゃったし、じきじきにハンコまで押してるからもう取り消せないの…
まったく…こんな時だけ仕事して…」

…本当に総統は偉いんだなって今実感した

無駄に力があるな…

「全く…あのバカは…総統の仕事をさぼってるくせに楽しそうなのには本気を出すんだから…
しかもこんな時だけは行動迅速でいい仕事をするって舐めてんの！
？」

「あの…副総裁…？」

完璧に愚痴だけになってるよ

「ん？」

ああ！ごめんなさいね！

新部隊の件だけど、仕事の説明をするわね」

仕事か…

まともなのだと良いな…

「あなたは仕事を掛け持ちしてたでしょ」

「そうですけど」

強制的になー！！

「それでね

オールマイティーに出来る君を活かすために…

助っ人の仕事をして欲しいの」

「助っ人？」

「うん

基本的には要請のあった部隊に手伝いに行くの
そっというのが無いときは備品整理とか壊れている備品を修理したり

の雑用をしてもらうの
分かった？」

「はい
でも俺一人だけだとキツくないですか？」

「ああ
それなら大丈夫
他の部隊で希望する人を募ってるから」

「へー…
ところで部隊の名前は何ですか？」

「それがね…まだ決まってるないの…
考えてるんだけど…後で良い？」

「別にいいですよ」

「じゃあ部隊の希望者から入れる人を決めるわよ
書類は私がいる事務室にあるからついて来て」

事務室についたら何人かの人働いていた

「何で事務を紹介しなかったんですか？」

「基本的に人手が足りているなら紹介はしないの
人手は足りているから事務は紹介しなかったの」

「へー…
そうなんですか」

話が終わったら奥の方に案内された

「これだけの人が希望してるわよ」

「うわっ！」

数人ほどだろうと思っていたら希望書が何十枚とあった

「じゃあ私は総統に仕事をさせてくるからあなたは候補を決め
て」

そう言う副総統は総統の居るであろう方向に行った

さて…決めるか

「まずは…葵ちゃん!？」

いきなり知り合いの紙が！

「うーん…やっぱり知り合いがいると心強いからな」

よし！候補に決定

「次は…堂背か…除外」

これは即決定

「次は…」

そのペースで二十枚ほど見たが、あまりいい人はいなかった

「次は… 斉藤君か」

まさか希望してくれるとは…

彼の運の良さは絶対役に立つ！

候補に決定！

「次は… エリスさん！？」

いやいや！！

あの人は主任だろ！

でも… まあ候補に入れておくか…

「次は…」

そのペースで続けていき、何人か気になった人を候補に入れておいた

「こんなもんかな？」

副総統が帰ってくるまで待つておくか…

「お待たせー」

副総統が帰ってきた

…服に返り血が付いている…

こええええ！！

改めて副総統の怖さを知ったよ！

「どれどれ…

結構選んだわね…」

そして副総統がみていき

「渡辺…館薙…檜川…

まずはこの人達は除外ね

あまりこの部隊じゃあいい仕事は望めないから」

なんて的確な指摘！

やっぱり仕事が出来ると違うな

怖いけど…

「うーん…」

エリスは…悩むわね…
いろんな意味で」

「いろんな意味？」

何のことだろう？

「まさか…あなた気づいていないの！？」

「何をですか？」

「あーあ…」

エリスちゃんと葵ちゃんが可哀想…」

可哀想？

何でだろう？

俺が何かしたのかな？

「俺…エリスさんと葵ちゃんに何かしましたか？」

「…あんた…たちが悪いわね…
自分で気づきなさい」

うーん…

頑張って気づこう！

「これはエリスを入れないわけにはいかないわね…」

「エリスさんは決定ですか」

「あと斉藤、香咲、萩原、金上ね」

残りの二人はまだいちども会ったことがない

うーん…

どんな人だろ…？

「後は部隊の名前ね」

そうだった

名前をまだ決めていなかったんだ

「どんな名前にしますか？」

「「あなたの心の隙間を埋め隊」はどう？」

「謹んで断らせてもらいます」

ネーミングセンス0！！

いくら何でも酷いだろ！！

「自信作だったんだけどね…」

あれで自信作！？

「次はもう一つの候補よ

「そんなあなたを助け隊」！
これでどうだ！」

「嫌だよー！」

それにそんなあなたってどんなのだよ！」

「うーん…これもダメか…
困ったわね…」

「そ、それなら…こんなのは…どうだ…？」

「「総統！？」「」

いきなり総統が現れたよ！

しかもボロボロじゃん！

副総統がよけい怖くなったよ！

…でも期待はしてみるか

「「総統モテモテ部隊」…どうだ…？」

副総統はどこからかバットを出して

グシャッ

…なんのためらいもなく総統に振り落とした…

総統はかるうじて息があるみたいだ

副総統…マジで怖い…

「副総統…名前は自分で決めます」

総統に期待した俺がバカだった…

「じゃあどんな名前にするの？」

うーん…

以外と悩むな…

「『請負部隊』ってのはどうでしょう？」

「別にいいんじゃない？」

何か投げやりだな…

やっぱり自分の考えた名前がダメだったからかな？

まあ…原因がそれでも名前は変えないけどね…

いくらなんでも嫌すぎるからな…

「じゃあオフィスに案内するわね」

「はい」

案内されたのは…

「ここ…総統のプライベートルームじゃん!」

「うん」

良い機会だと思ってね

無駄なものをリサイクルする事にしたの」

まあ…確かに総統のプライベートルームは無駄なものだよな

「うーん…」

虎の毛皮とシャンデリアは回収しとくわね

電灯は蛍光灯にしとくわ」

「あの…絨毯もカーペットに変えてくれませんか?」

血痕がべったりついた絨毯なんか使いたくないし…

「良いわよ」

じゃあまずは請負部隊主任の初仕事!

選ばれたメンバーに通達してきて

私は総統に仕事をさせるから」

「わかりました

…あつ!萩原さんと金上さんはどこに居るんですか?」

「萩原は戦闘部隊

金上は看護部隊にいるわよ」

どちらも問題なく通達出来るな

…じゃあ行くか

「まずは…看護部隊にいくか」

看護部隊のオフィスに葵を発見した

「葵！」

「あっ！朔さん！」

そう言うところへとすぐさま寄ってくる

なんか犬みたいで可愛いな…

「葵は新しい部隊に希望してたろ？」

「はい

そうですけど」

「明日から新部隊の請負部隊に来てもらうから
よろしくな！」

「は、はい

よろしくですー！！」

「ところで…金上さんはどこかな？」

「金上さんは後ろにいますけど…」

「うわっ！！」

確かに葵が言った通りに後ろにいた…

身長が俺よりも高くガリガリな体をしていた…

後ろにいたのに気配も感じなかった…

何者だよ！

「…どうも…金上^{かながみゆう}幽と申します…
請負部隊ですか…

まあ…がんばります…」

そう言つとスツとどこかへと行つた

なんか幽霊みたいだな…

まあ、悪い奴じゃ無さそうだし別に良いか

「次は…戦闘部隊にいくか」

斉藤君はトレーニングをしていた

「斉藤君」

「わっ！」

あ、天川さん！」

「明日から新部隊の請負部隊に来てもらうから
よろしくな！」

「はい！よろしく願いします！」

うーん…良い奴だな…

まともだし…

「萩原さんを知らないかな」

「あちらの部屋にいますけど…」

「わかった！ありがとう」

その部屋に入ってみる

中は簡素な部屋で机には長い髪にキリツとした顔のお姉さんがいた

「萩原さん…ですか…？」

「ああ！」

オレが萩原名残だよ！
はなはな

話は聞いている！

あんたが新しい部隊のリーダーなんだろう？
よろしくな！」

「よ、よろしく願いします」

「オレは作戦やらそうゆう頭を使う役職なんだ
まあ考慮しといてくれ」

「は、はい」

なんか男勝りな人だったな…

次が最後の科学発明科だな…

「エリスー！！」

「ひ、久しぶりだな天川
あ、会いたかったぞ！」

「久しぶり
今日はお知らせに来たんだ」

「お知らせ！？」

「うん

明日から新部隊の請負部隊に来てもらうから」

それを言つとエリスは

「選んでくれたか！
う、嬉しいぞ！天川！」

そう言つと

「だが…仕事が立て込んでな…
新しい部隊に行くためにも今日中に終わらせるから…
今日はサヨナラだ」

そう言つと少し寂しそうに研究室に向かつていった

「今日はこれで終わりか…
新しい部隊で頑張るかな」

そう言つて天川は帰ることにした

「…うつ…仕事したくないよ…
お家に帰りたいよ…」

「まだまだ残つてるわよ！
サボつてたツケです！
キリキリ働いてください！」

結局、総統が帰れることになったのは三時であつた…

新しい部隊結成！！（後書き）

ちよつと用事があるので、次話の更新が遅れるかもしれません

ご迷惑をおかけします

請負部隊へようこそ！（前書き）

更新が遅れてすみません

請負部隊へようこそ！

「今日から主任か…」

うーん…初めてのことから心配になるな…

「つーか、多分入社１ヶ月で管理職になった平社員は俺ぐらいだろうな…」

一般人が経験する事のない貴重な体験だが…

はつきり言って嬉しくない

もっと普通に生活したいな…

ドゴォン

「主任になったんだって！
おめでとー！」

「…本当に勘弁してくれ…
修理代が凄いんだから…」

最近は壊してなかったのに…

「主任になった君にアドバイスをあげよう！」

「俺の話は無視か
コノヤロー」

まあ…正直な話、聞いてもらえるなんて毛ほどにも思っていないけどな

「これは守った方がいいよ

殴って部下の骨を折るな

ボコボコにして部下を再起不能にするな

それに気をつけるんだよ」

「お前限定だろうがああ！！

しかも看護部隊にいたときに再起不能な人がいたぞ！」

「ああ…

力加減を間違えちゃったの

まあでも有名な言葉に弘法も笛の過ちって言うしさ」

「それは弘法も筆の誤りだ！

それに弘法が笛でどんな事をしたのか気になるし！

弘法の評価ががた落ちだろ！

弘法に謝れ！」

「ごめんなさい」

「素直でよろしい」

まったく…

「でも何で急に諺を言い出したんだ？」

こいつ国語苦手なのに…

「ふっふっふ

さっきのテレビを観ててわかったの！
なんか諺カッコいいって！」

そうだった…

コイツは思いつきで生きてる様な奴だった…

「まあ主任の仕事は聞くよりもやってみるのが一番！！
作文は一辺にやらずだよ！」

「多分それは百聞は一見にしかずだ！
作文なんかどうでも良いんだよ！」

言いたいことを行つた園音はそのまま会社に行つた

…俺も行くか

ついたらうちの部隊についての説明書きがあつた

「新部隊 請負部隊についての説明」

・その一 仕事を請け負ってもらつ場合は書類を作ること

ふーん…なるほどな…

・その二 請け負つて貰つた場合はその仕事の評価は請負部隊にいく
本当に主任になつたんだな…

・その三 実績によつての給料の上がり下がりが激しい
頑張つたら上がるんだ…
いくらかな…？

・その四 總統を捕まえてきて

さつそく依頼！？

しかも書類貰つてないし！

…まあやるか

その前にオフィスに行こうか

「おはよう」

「おはようございますー朔さん」

葵がもうオフィスにいた

「今日は早いね
どうしたの？」

「新しい部署なので早く行つたほうが良いと思ひまして」

「葵は良い子だね」

頑張つてゐる人は評価することを目標にしている

「あ、あ、あ、ありがとうございます!!
もっと頑張ります!!」

葵は顔を真っ赤にしてそう言った

…なんで顔が真っ赤になったんだろ？

「…なんか私にとって悲しいことがあった気がするですー…」

「悲しいこと？」

…何だろうね？」

「…気にしないでください」

なぜか葵はがっかりした表情をしていた

…俺のせいかな？

「おはよ!」

「萩原さんおはようございます」

萩原さんが二番目だ

「早いですね」

「嫌みか？」

あんたらに比べたらオレなんて遅すぎだろ」

そう言うと豪快に笑って自分の席に着いた

「おはようございます」

「斎藤君おはよう」

斎藤君が着いた

「…もしかして遅いですか？」

揃っている人数をみて不安そうにいった

「いやいや

みんなが早すぎるだけで普通だよ」

会社は8時50分から始まる

だけど俺はなるべく早く来るため8時20分には着いている

「そうなんですか…
安心しました」

ホッとした顔をして自分の席に着いた

「おはよう!」

「エリスおはよう」

エリスが到着した

「うむ

…なんだ私は遅かったようだな」

「あんまり気にしないでください
まだセーフですから」

現在時刻は8時40分

まだ10分も残っている

「あんまり急がなくても間に合えば良いんですから
それにちよつと遅れても見逃しますよ」

「天川…ありがとう!!」

エリスは感激して飛びついてきた

飛びついた時に頭が鳩尾に入る

「グハッ」

…なんで…飛びつかれ…たんだ…?

「朔さんから離れてくださーい!!」

葵がエリスを無理やり離そうとする

「いやだ！」

「離れなさい！」

「いーやーだ！！」

「…ごめん

そろそろ…仕事の時間だから…離れて」

そう言うとエリスは渋々離れていった

…鳩尾が限界だよ

「最後は金上さんか…

遅いな…もう始まるのに」

「…いますよ…」

その瞬間に全員が金上さんの席を振り向いた

「…どうしました…？」

「…いつからいました？」

「…萩原さんの少し後に…」

…気づかなかった

ごめん…金上さん

「仕事にしましょう！」

記念すべき請負部隊の初仕事

「まず…科学発明科の依頼だ

「現在発明中のロボットの調整を頼みます」

エリス、行ってくれるかい？」

「…前と変わらないようだが…天川の頼みだ
行こう」

そう言ってエリスは科学発明科に向かった

「次は…事務からの依頼か…

「ある書類の作成とコピーを頼みます」
行きたい人ー！」

「オレが行こうか」

萩原さんが行くことになった

「次は…諜報部からだ」

戦闘部隊などの部隊は入社一年たつと細かく分けられた部隊に入る

理由を副総統に聞くと

「それは一年で適正を見極めると情報漏洩を防ぐ為ね

だって一年もたてばどんな奴でも身も心もブラッキングに染まるからね…」

何か怖い事をさらっと言われたが気にしないことにした

「A社の情報を持ってきてくれ」

誰が行きますか？」

「…僕が…」

金上さんが立候補した

…うん、納得

「次は…事務からか…」

「早急に壊れた箇所を修理して欲しい」

これは…斎藤君かな？」

「あ、良いですよ」

斎藤君はそう言って事務にいった

「うーん

葵！一緒に総統捕獲してくれないかい？」

「よ、よろこんで!!」

「じゃあ行こうか」

「総統はどこだ…?」

「看護部隊じゃないですか?
女の子が沢山いるし」

確かにと思い看護部隊に向かった

看護部隊にいくと

「一緒にランチに行かない?」

「お断りです!」

ナンパしてた…

しかもバツサリと断られてるし

「またダメか…
よし!次だ!」

今まで見たことのないほどのやる気を出している

…仕事で発揮しろ!!

「総統！」

副総統からの依頼で捕まえに来ました
おとなしく捕まってください！」

「くっ！」

副総統め…新部隊を効果的に使ってきやがる…
だが負けないぜ！」

そう言つて総統はダッシュで駆け出した

「…行こうか」

「まてー！！！」

総統は地の利を生かして逃げ回っていく

本当に有能だからたちが悪い…

「あつ！天川さん！」

斎藤君がトイレの扉を修理していた

「総統見なかった！？」

「戦闘部隊の方に行きましたけど…」

「ありがとう！
よし！行くぞ！」

…あれ？葵がないぞ？

「ハア、ハア、ま、待ってくださいーい」

「大丈夫！？」

「…ハア、ハア…
は、速すぎですー」

うーん…困ったな…

葵は意外と体力がないみたいだな…

「す、すみません
わ、私は朔さんと別行動を取るので朔さんはそっちを追ってください」

「分かった！そっちも頑張って！」

そして俺は戦闘部隊に行った

「園音！！」

「あつ！天川じゃん！
どうしたのー？」

「総統を見なかったか？」

「あっちに行つたよ」

「分かった！ありがとな！」

「磯から上がれて言うから急がずに頑張っ
てね」

「多分急がば回れだ！」

それじゃあ海についての講釈だろ！」

まったく……

なんとか総統を追い詰めた

「総統……覚悟してください」

壁際にいるから逃げ場はない

「……こうなれば……奥の手だ！」

そう言うと言った壁にもたれかかり

壁が回転した

「忍者屋敷か！！」

何でそんな機能があるんだよ！」

くそっ！

俺も壁を回転させた

そして出たのは

「ここは…事務室…？」

どうやら事務室に通じていたらしい

「そうだ！総統は…」

ふつと見ると

血まみれのバットを持った副総統がいた

そしてその足下に

頭から血を流しながら痙攣している総統がいた

「…」

言葉が出ない…

「天川君

このバカを結果的には捕まえてくれてありがとうね
キチンとこれは評価しとくわ」

そう言つて副総統は痙攣する総統を引きずって奥の仕事部屋に入つていった

…戻るか

「ふー…
疲れた」

戻るとみんなが揃っていた

「みんなお疲れさま」

「「「お疲れさま」「」「」

時計を見てみるともう退社時刻になっていた

「みんな今日はお疲れさま
帰って体を休めてね」

そう言ってみんなと一緒に帰り支度をした

まあ…頑張っただけかい

「…帰りました…」

「「「金上さん!?!」「」「」

さっき帰ってきたらしい

金上さんを忘れてた…

…金上さん…本当にごめんなさい!…!

請負部隊へようこそ！（後書き）

更新は毎週の木曜日、日曜日を目安にしていきたいと思います

副總裁の秘密！？

「おはよう」

今日は俺が一番に着いたみたいだ

「んー？」

仕事が入ってるなー」

俺の机の上に新しい書類が置いてあった

今日はどんな仕事なんだろな…？

「白河さんからか…」

どんな依頼だろ

「今日、看護部隊に三人ほど頼みます」

「うーん…」

三人か…」

他の仕事を見てメンバーは決めようかな

「みんなそろったね」

仕事は白河さんのも含めて4つ

「葵は事務で書類整理などの雑用を
萩原さんは総統を捕獲してください

エリスは科学発明科へ行ってください」

…エリスは科学発明科にいるようなものじゃん!!

「俺と斉藤君と金上さんは看護部隊に行きます

では解散」

「白河さん

今日はどんな仕事ですか？」

看護部隊はなぜかゆったりとした雰囲気では仕事は無さそうに見える

「今日は私と尾行してくれない？」

「…尾行？

誰をですか？」

「副総裁よ」

「…何ですか？」

「今日は平日なのに副総裁はオフでしょ

普段は休まないのになぜか不定期に休むの

看護部隊の仕事もないし副総裁の休みの秘密を知ろうと思って」

…確かに真面目人間の副総裁が休む理由は気になる
だけど…

「すみません…やっぱり副総裁には良くして貰ってるので…」

「あら…天川君
耳を貸してくれない？」

耳を近づけると

「…『ごによ…まさか…あんな…』によ…」

「！」

…な、なぜそれを…！」

「ふふふ

私に知らないことは少ないの
やってくれるかしら？」

「…喜んで…」

…副総裁…すみません…
背に腹は代えられないです…

「さあ！行きましようか」

白河さんはウキウキしている

俺は…真逆だ…

「…なんで…知ってんだろ…」

「天川さん

何を言われたんですか？」

「斉藤君…聞かないでくれ…」

…バレたら恥ずかしくて死ぬかもしれない…

「副総統を見つけたわ、ついてきて」

早くも副総統を発見した

「…なんでこんなに見つけるのが早いんでしょうか？」

斉藤君がぶつけた疑問に

「簡単よ

副総統がこっちの方向に行くのは事前調査しておいたから」

…なんでこの人看護部隊にいるんだろ…

「副総裁…まずは花屋に行きましたね」

「誰かの命日とか、お祝いかな？」

副総裁は花を見て悩んでバラを中心に見繕って貰っていた

「バラか？」

「じゃあお祝いかな？」

「ふふふ」

この調子だと…あの情報に間違いは無いみたいね」

「…どんな情報ですか…？」

「ふふふ」

秘密よ」

…白河さんの情報源っていつたい…

話しているうちに副総裁は移動し始めていた

「私たちも行くわよ」

「次は…雑貨屋？」

そこは豊富な品揃えで名を売っている雑貨屋だ

「尾行しましょうか」

尾行してから副総裁が買った物は

・ペンライト

・使い捨てカメラ

・色紙

・サインペン

…これつてもしかして…

「あれ？」

白河さんは何を買ったんですか？」

「使い捨てカメラよ

写真に撮って残しておかないとね」

…怖いな…この人

「副総裁が動いたわ

多分そろそろ目的地に到着するわね
いくわよ」

「ここは…」

そこはコンサート会場

そして今日公演するのは

「…カトーン」

現在人気爆発中の超人気ジャニーズアイドルだ

「副総裁が嬉々として入っていく…」

…見たくないかも

「ケータイに私の番号を登録しておいてね
副総裁を見つけたら連絡お願い」

…行きたくない…恥ずかしい…

『みんな、今日は来てくれてありがとうー!!』

「『きゃーー!!!!!!』」

「ぎゃーー!!」

すごい人の波で押されていく

これは…キツイ

「副総裁は…どこだ？」

なかなか見つからない

何千人もいるのに見つかるわけねーよ！

「まあ言ってもしょうがないか…
探そう」

「どこだ…!!」

探し始めて一時間は経過した

「見つかるわけねーよ…」

あそこにいるテンションの一際高い人でもない限…副総裁!？」

テンションの一際高い人は副総裁だった

…見て悲しくなるほどの熱狂ぶりだ…

「そつだ…連絡しないと」

連絡後、颯爽と現れた白河さんは副総裁を撮影していく

…音がでない？

「音が出てないですけど」

「ちょっと改造したの」

…本当になんであんたは看護部隊にいるんだよ！

「ふう」

ここではこれぐらいで良いかな」

「他にもあるんですか？」

「ふふふ」

終わってからがこういうのは面白いの」

…哀れ副総裁…

「あ！

終わったみたいです」

斉藤君がそう言つと

「裏口ね」

そう言つて白河さんは裏口に向かつていった

…何で裏口？

「…すげーな…」

そこには数十人の人がカートーンを待っていた

「お疲れ様でした」

裏口の扉の後ろからマネージャーらしき人の声がしてカートーンが出てきた

「「「きゃー!!」「」」

カートーンに熱狂するファン達

その最前列に副総裁がいることに涙がでてる

「サインならオッケーです!

触らないで下さい

写真もダメです!」

マネージャーの人がそう言ってファン達をなだめている

副総裁はサインを早速貰っている

「副総裁…ジャニーズ好きだったんだ…」

俺の横で白河さんは写真を撮りまくっている

カートーンがいなくなって満足げに副総裁が帰っていく

「ふふふ

副総裁に会いに行きましょうか

副総裁ー!」

「…げっ!!!

な、何で貴方たちが!？」

「ふふふ

今日は最初から最後まで見せて貰ったわ
面白かったわよ」

ふふふと笑いながら白河さんはそう言った

…本当にエグい性格してるな…

「…今日見たことは忘れなさい
さもないと減俸よ」

横暴な事を言い出した！！

「ふふふ

写真も撮ってあるんだけど…」

睨んでいる副総裁と笑っている白河さん

正直今すぐここから逃げ出したい…

「…くっ！

わかったわ！こっちの負けよ！

望みは何！？」

副総裁が折れた

白河さん…どんな事を言うんだろ…

「あら

願いなんて無いわ

まあ、写真を取り上げないでもらうぐらいよ

…今後ともよろしくね」

白河さん…本当にエグすぎる！

弱みを掴んだままって一番キツいし！

「…わかったわ…好きにして…」

副総裁は放心状態だ…

…白河さんが真の支配者じゃないのか…？

今日は疲れた…

「…金上さんは！？」

忘れてた！！

「金上君には別角度からの撮影を頼んだの」

道理で見つからなかったはずだ

写真ってたくさん撮るんだな

「…あっ！

もしかして…俺の写真も…」

「うん

あるわよ」

「…処分は…」

白河さんにはっこりと笑い

「しないわよ」

…白河さんに頭が上がりなくなった…

副総裁の秘密！？（後書き）

なんか内容に変化がないですね

そろそろ新キャラを考えています

風邪には注意を！

「ゴホツゴホツ」

…風邪を引きました

「あー…ツライ…」

風邪なんて何年も引いてないのに…

「…園音に頼むか
園音え！」

ドゴオ

「呼んだー？」

「…風邪引いたみたい
会社に今日は休むって伝えておいてくれないかな…」

何でか園音は不思議そうな顔をして

「…壁を壊したけど何も言わないの？」

「…うん…気にしてない…」

「こりゃ大変だ！

ツツコミがツツコまないなんて！

毎回壊したときのツツコミを楽しみにしてたのに！」

「…わざとだったの…？」

「うわー！！」

そんな風に聞いてくるなんて！

いつもは

「わざとだったのかよー！！」

ってツツコんでくるのに！

いったい何度熱があるの！？」

園音は近くにあった温度計を使って俺の熱を計った

「…四十度！！」

これは…大変なのかな？

あたしはこれぐらいの熱だったらフルマラソンできるけど…」

「…一般人は高熱だよ…」

「うーん

会社に行ってくるからきちんと寝とくんだよ！」

そう言ってももの凄いスピードで園音は走っていった

…あー…ツライな…

ピンポン

「…はい…開いてますよ」

ガチャ

「朔さん！！
大丈夫ですか！？」

「天川！！
心配したぞ！」

「天川さん！
お見舞い持ってきました！」

「うーん…
これはインフルエンザかもしれないわね」

「うわー
それは大変だ！」

「久々に出番だー！！！」

「うん
私も久々だ」

さ、騒がしい…

上から葵、エリス、斉藤君、白河さん、白夜さん、長瀬さん、唐木
さんがやって来た

「大丈夫かい」

「白夜さん…ありがとうございます…」

常識人がいるありがたさがよく分かる…

「…ってみんな…！
仕事は…？」

「私は萩原さんに簡単な仕事を貰って、さっさと終わらせましたー」

「私も同じような感じだ」

「僕はお見舞いに行きたいなーって思ったら仕事がなぜか無かったんで」

「私は仕事の一貫ね
天川君を診察するから」

「みんなが無茶しないか見張るために副総裁直々に命令を貰ったんだ」

「私は…出番が欲しいから…
あと病人食を作るのも理由の一つね！」

「私は薬の処方だね」

心配してくれるなんて…ありがたいな…

でもみんな…理由にそれぞれ…個性がでてるな

斉藤君は…相変わらず運が良いな

仕事って…アフターケアみたいなものかな

あと…出番って…

「みんな…ありがとう…」

「じゃあ診察するわね」

そう言うのと聴診器を当てたり粘膜を取ったりした

「…うーん

ただの風邪みたいね」

「そうなんですか…」

「暖かくして寝ておくのよ
じゃあ私は帰るわね」

そう言って白河さんは帰っていった

…本当に診察だけなんだ…

「朔さん！

何か食べないといけないと思ってコレを作ってきましたー！」

「…コレ…なに…？」

緑色でなぜかウニユウニユと動いている物体が置かれた

「お粥ですー！」

…お粥って緑色で動くっけ…？

「…食べようかな…？」

「いやっ！！」

天川！！止める！！

明らかに食べ物ではないぞ！！」

エリスがそう言っただけ俺は気づいた

…本当だ…なんかの生物だ…

「エリスさん！！」

嫌がらせですか！？

朔さんに食べてもらおうと思ったのに！！」

「貴様はこれを食べ物と定義するのか！？
バイオ兵器でもこんな物はないぞ！」

「た、確かに見てくれは悪いですけど…」

「動いている時点で食べ物な訳が無かるっが！」

葵は悔しそうな顔で持ってきた食べ物？をしまった

「天川

私も作ってきたぞ！

エリス特製お粥だ！」

今度はまともな色をしている

「…いただきます…」

まずは一口

…美味しい

「エリス…」

「ん？」

何か問題があったか！？」

「…ありがとう…美味しいよ…」

そういつた途端にエリスが真っ赤になって

「わあああああ！！！」

と叫びながら部屋を出ていった

…どうしたんだろ…？

「…うん

天川君…すごい破壊力だ」

「あれはいたたまれなくなりますね」

「弱った顔でのあのセリフ…」

エリスが本当に珍しく動揺したのを見た」

「…私も言われたかったですー…」

みんなが何かを話しているがよく聞こえない…

「天川君！！」

私がお粥を多めに作っておいたからお腹が空いたら食べるんだよ」

長瀬さんはそう言って他の人と雑談を始めた

「天川君はモテモテだね！！」

「そうですね

羨ましい限りです」

「私は婚約者がいるから良いですけどね」

「婚約者いたんですか！？」

「はい

今年で二十二歳の彼女ですよ」

「良いなー！！」

「…長瀬さん…そう言えば帰らないんですか？」

「久々の出番を逃すとなかなか出られないからねー！！」

「…」

うーん…なんだか眠く…なって…来…た…ぞ…

「うーん…！」

気づいたら夕方になっていて体が楽になっていた

「うーん

何とか調子はよくなったなー」

良かった良かった

明日からは仕事に出れるな

「元気になって良かったね…！」

「長瀬さん…まだ居たんですか!？」

あれから何時間もたっていたのに

「ははは

私だけじゃないよ!」

長瀬さんが指を指した方を見ると

「くー…」

「…ムニヤムニヤ…」

葵とエリスが寝ていた

「あの二人はずっと看病をしていてくれたんだよ
感謝しないとね」

…心配かけたな…

「ありがとうな
葵、エリス」

病気になって改めてみんなの良さを再確認できたな…

「…これからよろしくな…」

葵とエリスは起きて少しゆっくりした後長瀬さんと共に帰った

長瀬さんは帰り際まで

「出番がー!!」

と叫んでいた…

「…コレ…どうしよう」

部屋で這っていて通った後に水たまりができるナメクジみたいな物
体…

葵が作ったお粥？が部屋に転がっていた

…どうやって処理しよう…

風邪には注意を！（後書き）

皆さんも風邪には気をつけて下さい

インフルエンザは本当に大変です…（作者は四十度ぐらいの熱を出すので本当に死にそうになります）

総統に大騒動！

「…へ？」

風邪から立ち直って会社に着きました

何人もフリーズしていたので何事かと思ったら

なぜか…総統が…

仕事を自分からやっていた！！

「な…なんで…？」

あ、ありえない…！

総統が仕事をしている…？

「おい！！！」

「そ、総統…何でしょうか…？」

総統はみんなを恐慌に陥れるある言葉を使った

「固まっでないで仕事をするぞ！！！」

「「「いやああああ！！！！」「」「」」

總統の言葉に

パリーン！

応接用の湯呑みがすべて真つ二つとなり

ブチッ！！

靴紐のある靴を履いていた人の靴紐は千切れ

ニャーーーー！！！！

何処からか数十匹の黒猫が現れ乱舞した

「いやっ！！！！

不吉すぎる！！！！」

總統のセリフは何かの呪文…？

「騒がしいわね！！

何を騒いでいるの！？」

「ふ、副總裁～！

あ、あれを見て下さい！！」

「何だつて言うの！」

そうして恐慌に陥り通行の邪魔になっている隊員を愛用のバットで殴り飛ばしながら總統の部屋に向かう

…バットで殴っちゃだめだろ！

「…は？」

カリーン

手からバットを落として副総裁は固まっている

「そ…総統が？」

し、仕事をしてる…？」

あっ！これは叫ぶ！

「…も、もしかしたら…」

どうでも良いようなくだらない仕事ね！！
まったく…！見せなさい！」

（な…なんだ…そうだったのか…）

そんな空気がみんなに渡った

…まあ総統がまともな仕事なんてあり得るわけが…

「…「来年度における部隊の資金問題」

「正義のヒーロー撲滅計画書」

「世界征服進行状況の報告と対策」」

副総裁がぼーぜんとした顔をして

「いやあああああああ！！！！！」

ボキッ！！！！！！

副総裁のバットがいきなり折れ

パリパリパリーン！！！！！！

会社中のガラスがすべて割れ

にやあああああ！！！！！！！！

数百匹の黒猫が大群で通つていった

…総統は何なんだ――！！！！！！

ブラックリング社の会議室で

「…これより総統の仕事事件の対策会議を始めるわ」

…変な会議が始まった…

「総統が自分から仕事を始めるなんて創立五年…一度もなかったわ」

…あんま関係ないけど創立五年なんだ…

「やらせても面白そうで、仕事とは呼べないような仕事ばかりをやっていたのよ」

「…総統仕事しろよ」

「総統が仕事をするなんて何かがあるに違いないわ…
みんなで考えましょう」

「誰かを殺した!」

「借金をした!」

「副総裁の何か大切なものを壊した!」

「ブラックリング社を辞める!」

「…みんなが総統をどう思っているかが良く分かるな…」

総統の自業自得だけだな

「…みんな…様々な意見をありがとうね
まずは辞める意見を調べるわ」

副総裁はそう言って会議室から出ていった

…十分後

「…総統は辞めないみたいね」

…まあ分かってたけど

「あつ！部隊主任なら何か分かるんじゃないですか！？」

「なるほどね…」

「じゃあ行ってみましょう」

戦闘部隊

「総統が仕事！？

明日は吹雪になってオーロラがみれるね！」

…あながち間違っていないし本当にオーロラが見える気がする

「理由？

知らないよ？

知ってたら吹雪なんて言わないし」

「そう…ありがとうね

次に行きましょう」

科学発明科

主任はエリスがいなくなってから唐木さんになったみたいだ

「総統が仕事…？

私が秘密に処方した実験薬にもそんな効果をもたらすのはいけません」

「いやいや！

秘密に実験しちゃだめだろ！」

「うーん…

分からないな…

ごめん、力になれないや」

「分かったわ

ありがとうね

次に行きましょう」

看護部隊

「ああ、聞いているけど理由が分からないのねー…」

「そうなの…

あと写真返しなさい」

「ふふふ

返すわけ無い…

そうだ…今ここであの趣味を暴露したら返すわよ」

いやいや！

ばらしたら返してもらう意味ないし！

「…帰るわよ

最後は食堂ね」

食堂

「…と言つことなの
長瀬ちゃん、分かるかしら？」

「知ってないけど理由なら心当たりが！」

おおっ！

どんな理由だ！？

「最近出番がなかったから出番が欲しいからだよ！」

「「「……………」」」

聞いた俺たちがバカだった…

っ！か最近長瀬さんそればかりだし！！

「…まあ…聞いてみるわ…」

総統の仕事部屋

「総統！！」

総統はバリバリ仕事をしていた

…もっほっというて良くないか…？

「よう！」

「なんか用か！副総裁」

「最近出番で悩んでないかしら？」

「いやっ！別にっ！」

「ダメだったか…」

「しかし総統…やけにやる気が出てるな」

「総統…本当に熱でもあるんじゃない…」

「熱っ！！！」

「何度あるんだよ！」

「ふらふらするな」

「看護部隊！！！」

「少しして総統は看護部隊に運ばれていった」

「今日は良く動いたな」

「あっ…！仕事…！」

「請負部隊」

「天川さん今日も休みですか」

「早く復帰してほしいな……」

扉の前で聞いていたたまれなくなつた……

……本当にごめん！

給料パニック！

「給料日だなー」

今日は給料日だ

前はなんだかんだでたくさん使って残らなかったから今回は貯金するぞ！

「さーてと、会社に行くか」

ピンポンパンポン

いきなり放送…？

何か…いやな予感が…

「皆さん、今日は給料日です
給料日でしたが…」

いったいなんだよ！？

「総統と数名の総統の仲間が給料を持ち逃げしました」

…あのクソやろおお！！！！

「総統を捕まえるまでは給料が支払えませんが
給料が欲しければ捕まえて下さい」

ふん縛つてでも捕まえてやる…！

「…待ってるよ…クソ總統！！」

「…と言うことだ

今日の仕事は給料奪還だ！」

みんなもやる気が出ている

「家賃不払いで追い出されたくないです」

葵…何か共感できる…

「ふむ…

欲しい機材やパーツが買えないな
あと天川と遊びに行くお金もいるし…」

「？

最後の方聞こえなかったんだけど？」

「き、気にするな！！

な、何でもない！！」

気になるな…

「僕はお母さんに仕送りしないといけないし」

…やばい…斉藤君が良い子すぎる

「今月こそは総統にオレが貸していた金を返してもらおうと思っていたが…」

総統には地獄を見てもらおうか…」

萩原さん怖ええ!!

つか総統金借りてんのかよ!

「…今月はピンチなんで…」
金上さんは普通だな

「殺さない程度の攻撃は許可されている
ボコボコにしても良いぞ

みんな頑張れよ!」

よしっ…総統…待ってるよ!

ピンポンパンポン

「総統の率いる給料強奪チームの情報です
リーダーは総統
副リーダーは堂背」

あのバカ!

最近見ないと思ったら何やってんだ!!

「人数は不明ですが腕に灰色の腕章を付けています
皆さんも頑張つて私の給料も奪還して下さい」最後のは言ったらダ

メだろ！

「おっ！園音！」

「よっ！」

いきなり園音に遭遇

「いやー！久々の実戦だから腕が鳴るね」

「これ実戦なんだ！」

たしかに実戦に近いけど…

「みんな給料を取られてるからやる気は凄
いよ…あっ！いた！」

灰色の腕章を付けた男が歩いていた

「くらえー！」

愛用の金棒で殴り吹き飛ばす

「…死なないか？普通…」

「大丈夫！手加減はしたから」

…トゲがついてる時点で手加減は関係ないだろ…

「俺はあつちに行くからな

じゃあな」

園音と別れて単独で狩りにいく

給料泥棒め…後悔させてやる…

「待てっ！！」

「なんだ？」

後ろから声をかけられて

振り向くとそこには灰色の腕章を付けた大軍がいた

「天川朔！

我々はエリスちゃん、葵ちゃんファンクラブだ！

ブラックリングス二大アイドルを独占している貴様をボコボコにする
ために総統のチームに入った
覚悟しろ！！」

「ファンクラブあるんだ…」

確かに二人共可愛いけど…

「我々は百人を超える！

貴様をボコボコにするために集まった同士だ！！」

「「「オオオオオ！！！！」」」

「その団結力を他に使えよ……」

別に葵とエリスを独占してないし

しかし百人か……こりやさすがにヤバいな……

よし！逃げよう！

「あつ！逃げた！待ちやがれ！！」

うわっ！

百人が追っかけてくるのって怖っ！！

……もっとスピード上げるか

「ふー……」

何とか逃げきった……」

疲れた……

「あつ！萩原さん」

「総統……殺す殺す殺す殺す殺す殺す
ん？天川か」

萩原さん…何か怖いことを呟いていたような…

「そろそろかな…」

できれば総統死んでくれ…」

「なんの話で…」

ドゴォォン！！

「…なんの音ですか？」

「時限爆弾だよ…」

罨も仕掛けたんだ…」

…萩原さんって軍人じゃないのか？

萩原さんと並んで歩いていると

「爆弾でやられた仲間のかたきだ！
死ね！！」

いきなり敵の襲撃がきて、萩原さんが狙われる

「萩原さん危な…」
バンバン

…物凄いスピードで取り出したハンドガンで一瞬にして倒した

バンバンバンバンバン

「は…萩原さん…」

そんなに撃つたら流石に死ぬんじゃない…」

「…そうね」

良かった…殺人犯にならなくて

「この弾は総統に残さないかね…！」

ダメだったー！！

「…萩原さん…くれぐれも殺さないように…」

「…善処する」

さて、また移動するか

「くらえー！！」

あつちではエリスがロボットを使って応戦している

「朔さん！

大丈夫ですか！」

「天川さん！

無事ですか！」

斉藤君と葵が同じ事を聞いてきた

…打ち合わせしたのか？

「大丈夫で無事だけど…三人共ここに固まってるんだ」

「はい…私は戦闘能力が皆無なのでなるべく前線に行かないようにしてるんです」

「へえー」

「そうなんだ」

「僕も同じ感じです」

…斉藤君…戦闘部隊だったよな…

「それで、エリスさんと組んでロボットで倒してもらってるんです」

「そうなのか…」

「「「天川ー！！待てー！！」」」

「やばっ！

もう来やがった

じゃあケガをしないように気をつけてな！」

そう言っつて俺は脱兎のごとく逃げる

…やっぱ百人だと威圧感が凄いな

走っているうちに敵は俺を見失ったみたいで後ろには誰もいなかった

「はっはっは！

久々だな！」

「まさか…この声は

バカ！！」

「えっ…！堂背だけど…」

バカのほうが分かりやすいけどな…

「今まで何してたんだ？」

そう聞くと堂背は悲しい顔で

「…ボーナスの時の実験で生死の境をさまよってた…」

そう言っただけだ

明らかにトラウマに触れてしまったようだ

「…すまん」

なんか変な空気に…

「だが俺は！

何とか生き残り物凄い回復力を手に入れたんだ！」

「…良かったな」

…生死の境をさまよって手に入れた回復力…

なんか微妙だな…

「そして！最近出番がなかったから総統に入れてもらったんだ！」

…なんか涙がでてきた…

理由が悲しすぎる…

「天川！お前を倒せばもつと出番が増える！
だから勝負だ！」

「…分かった」

なぜか断われなかった…

「くらえー！！」

堂背は直線的なパンチを繰り出す

それをかわして鳩尾を殴る

「…ほっ！」

堂背は悶絶している

…完璧に入ったからな

「痛っ！めっちゃめっちゃ痛い！
回復力が上がってんのに！！」

「あー…回復力が上がっても痛いもんは痛いぞ」

「えっ…！」

堂背は信じられないといった表情で

「痛みもなくなるって…言ってたのに…俺…痛みがなくなるって言ったから…やったのに…俺が…死にかけた…意味は…？」

そう言っただけで堂背は糸が切れたように気絶した

成仏しろよ…

総統が見つからないので出口に行くことにした

「ん…？」

ホールが騒がしい…？」

通りがかったホールからやけに騒がしい音が聞こえてきた

「総統！？」

ホールには総統と数人の部下が萩原さんや戦闘部隊と対峙していた

「総統…殺す殺す殺す」

萩原さん怖いよ!!

総統が

「給料は俺が持っている…」

下手に手出しは出来んぞ!!」

と言っている

…なんかむちゃくちゃ腹が立つ

「ふははは

近づいてみる! 給料を燃やしてやる」

そう言ってライターを振りかざす

…本気で腹が立つ!

だがそれは効果的でなかなか手出しができず硬直状態になる

だが

ガシッ

「…動かないでください…」

金上さんが後ろから総統を羽交い締めにする

「…動いたらこれを当てます…」

そう言う金上さんの手にはスタンガンが

「くっ…

さすがサイレントファントムと呼ばれ、ブラックリングーの隠密技術と暗殺技術を持つ金上だな…」

「金上さん看護部隊でしょ!？」

「ふっ

しかし」

うわっ!ムカつくぐらい普通にスルーされた

「お前がこの俺に手出しがギャアアアアアア!！」

いやっ!

喋ってる途中に攻撃したよ

「…すみません…

…うるさかったんで…」

…金上さんってマイペースだな…

っーか案外あっけなく終わったな…

「さて…なぜ総統はこんな事をしたんですか?」

総統達は縛られていて尋問されている

尋問しているのは白夜さんだ

「…白夜さんでいいのか？
あの人優しいし」

「あー…大丈夫
あいつは昔笑う無限地獄って呼ばれてたの
なんで分かる？」

園音の問いに俺は分らないと告げると

「昔からキレたら手をつけられなくてね
顔は笑ってるけど気が収まるまですつつつと攻撃し続けるの」

「…白夜さんって以外と危険人物なんだ…」

「なんでこんな事をしたんですか？」

白夜さんの問いに総統は

「…実はな…」

「実は？」

「最近キャバクラにハマって…ツケを払わないといけないんだ」
ブチブチッ！

明らかに白夜さんの血管が切れるような音がした

…完璧にキレたな

「総統…覚悟してくださいね」

白夜さんは殺気のこもった笑顔でそう言つと総統とその仲間を奥の部屋に連れて行つた

その日一晩中ブラックリングからは悲鳴が聞こえ続けた

次の日

給料はきちんと渡された

そして総統達は

「あー…」

「うー…」

全身を包帯でまいてミイラ男になっていた

「自業自得だな…」

…白夜さんは怒らせないようにしよう…

〇〇がやって来た！上

ふー…

今日も疲れたな…

風呂でも入ってさっぱりとするか

ガチャッ

「ん？お帰りなさい」

「…」

ボタン

…えっ…？

なんであいつが居るんだ…？

…これはもしかしたら幻覚かもしれない…

疲れてるからな

ガチャッ

「もう！…いきなり閉めるなんて失礼だよ！でも久しぶりだけど相変わらず…」
そして天川の顔をみてニツコリとほほえんで

「貧乏くさい顔だねー」

居るだけで気分が滅入ってくるよ…

なるべく人と関わらない生き方をしないと迷惑だよ

兄さん」

「…静…相変わらず口が悪いな…」

「ひどーい！

事実を言っているのにそんな事を言われるなんて…

兄さんは最低な男だね…」…この口の悪い泣き真似をしている女は

あまかわしず
天川 静

俺の妹なんだけど兄を全く敬ってくれない

それどころか暴言を言われるし…

「…つーか静…なんでここが分かったんだ…？」

「園姉さんに貰った手紙に書いてた」

園音 えええ！！

なんでお前は厄介事ばかり持ってくんだよ！

「それにしても元気で良かったね」

…心配してくれてたのか…

やっぱり良い妹だったん…

「元氣だったら金を持つてるよね！」

「ここまでくるのに使った電車代払って！」

…前言撤回、やっぱり兄を敬ってくれない悪い妹だ

「金はないよ」

「やっぱりニートの兄さんじゃダメか…」

「ニートじゃねえええ！！」

「ちゃんと働いてるわ！！」

「なんて会社？」

「ブラックリングだ」

…よく考えたら秘密結社だから言ったらいけないんじゃない

「園姉さんと同じ所なの！？」

「試験官は風邪でも引いてたの！？」

「…本当に兄を何だと思ってるんだ」

「つか園音も教えてんのかよ」

ドゴン

「静ちゃん久しぶりー！！」

「園姉さん！
久しぶり！」

…この二人はやけに仲が良い

「綺麗になったね！静ちゃん！」

「園姉さんもトップアイドルみたい！」

「そうかなー？」

「そっいえば学校のリーダー何だよね？」

「うん！」

リーダーか…さすが優等生だな

「スゴいね！でも修行はきちんとしてるの？」

「うん

毎日欠かさずやってるよ」

「よし！私が修行の成果を見てあげる！」

ビュッ

…風を切る音が聞こえて園音のパンチが放たれたと分かった

「ひゃー！」

相変わらず凄いキレのあるパンチ

でも私も強くなったんだよ！

園姉さん！」

明らかに音速を超えてそんなパンチを受け流して静は回避した

正直静は俺よりも強い

園音を力としたら静は技だ

静は主に防御や返し技を得意としていて園音と良い勝負をしている

そんな二人は俺の部屋で少年マンガのようなバトルを繰り広げている

…人間じゃねーな…あいつら

一時間後

「…痛い…」

とぼつちりを食らってノックダウンされた…

…激しすぎだよ

全く攻撃が見えないし戦いの影響で壁がボロボロに

…俺が払うの？

「うーん！

強くなつたねー！」

園音にそう言われて静は嬉しそうにしている

「…相変わらず強いな…」

俺も誉めてみる

「うるさいなー」

弱い人に言われても嬉しくないし」

…俺って本当に兄なんだよな？

「それにしても…どうしていきなり遊びにきたの？」

聞く順番が間違ってるけど確かにそうだ

静は高校二年生で学校では優等生として通っている

なのに何で平日の今日ここにいるんだ？

「親子喧嘩をしちゃって…」

どこに行こうか悩んでたら園姉さんを思い出して…

だから園姉さんの住んでる場所を探しにきたの」

「親父と喧嘩か？」

「うん」

過保護でウザすぎる父さんから逃げてきたの

何でかいきなり私の婚約者を探して連れてきたし…」

「婚約者！？」

「うん

なんか悪い虫が付く前に結婚しろって連れてきたの」

…あのバカ親父…何考えてんだ…？

「母さんは止めなかったのか？」

「驚く私を見て爆笑してた」

…そうだった

他人の不幸は密の味が座右の銘の母さんだからな…

つーかそんな母親はどうなんだよ…

「園姉さん！

あのバカ父さんが反省するまでここに置いて！
お願い！」

「いいよー」

「軽っ！」

ノリが軽すぎだろ

「つーか学校はどうすんだ！？」

「しばらく休みますって連絡しといたし」

それで良いのか！？学校！！

「園姉さん！よろしくね！」

…そんなこんなで静は泊まることになっな

…あのバカ親父…早く反省して連れて帰ってくれ…

次の日

ピンポーン

朝飯を食っているとチャイムが鳴った

こんな朝早くに…いったい誰だ？

「兄さん」

何故か静が家の前にいた

「…なんか用か？」

「ちょっとお願いがあるんだけど…」

俺の頭の中で警報がなる！

静が頼んだ事はいつもろくな事にならないからな…

「連れて行って欲しいところがあるの…」

…連れていくだけなら問題はないか

「いいぞ

どこに連れていけばいいんだ？」

「ブラッキングにつれてって！」

…

「何iiiiiiii!？」

続く

〇〇がやって来た！上（後書き）

続きます

一二話ぐらいで終わる予定なんで楽しんでください

〇〇がやって来た(下)(前書き)

後書きのお知らせがあります

〇〇がやって来た(下)

「はぁー……」

本当に嫌だ…

「兄さん、しけた顔していると不幸になるから顔を見せないでよ」

…泣きたくなってきた…

なんで静を連れて行っていいんだよ…

昨日の晩

「総統！

家の妹が見学したいと言ってるんですけどダメですよね！」

「うーん

別に良いけど」

「軽っ！

いやっ！ブラックリングは秘密結社でしょうが！

一般人に見せちゃダメでしょー！！」

「その妹っていくつ？」

「…十七歳の高校生ですけど…」

「絶対連れてきてくれ!!」

これは総統命令だ!

破るとクビだぞ」

ガチャン

ツーツ

そして現在

あのバカ総統…本当に死んでくれないかな…

「いやー社長さんって良い人だね!」

ちなみに総統のことは社長と言うことにしている

「あー…あんまり迷惑かけんなよ」

「分かってるよ!

いるだけで迷惑な兄さんに言われたくないし!」

…なんか死んでしまおうかな…

「へー!結構大きいね」

「総と…社長に挨拶に行くから行くぞ」

總統のいる部屋まで歩いていくと

「…堂背…！？」

なんであいつが出てくるんだよ！？

あいつが居たらろくな事にならねーのに

「よー！天川！

今日はスパルのヒーロー倒しに行く…」

グシャツバキツゴシャツ

「おい！どうしたんだ？

気分が悪い？それは大変だ！医務室に行こう！」

そう言つて堂背を死角になつていて通路から見えない場所に運び放置しておいた

「すまん…また今度ジュースでも奢つてやるからな…」

「…俺の値段…安くね…？」

ゴッ

「…ふう

これで本当に意識を失つたな」

さて、静の所に行くか

「おまたせ」

「遅ーい！」

可愛い妹を放置するなんて男の風上にも置けないよ」

「いや…可愛いってところには語弊が…」

ドボッ

…静の肘が鳩尾にクリーンヒットした

「可愛い…よね？」

その顔はまるで肉食獣のような顔だった

「…うん」

…妹に舐められてもしかたなくなってきた…

さすがに情けなさすぎるぞ…俺…

「…じゃあ…社長に会いに行くぞ…」

「早く行こう！」

…いやマジで鳩尾がキツイ…

「天川です」

「入ればいいぞ」

ガチャ

ドアを開けた先には総統と副総統が立っていた

「いらっしやい

そっちが妹さん？」

「はい

そうですけど」

そう言うのと総統は静の所に歩いていき

「お嬢さん…私と一緒にどこかお茶にゴハアア！」

いきなりナンパし始めた総統に俺の膝蹴りと副総統のバットが顔面に直撃した

「ごめんなさいね…

このバカは気にしなくて良いから」

「は、はあ……」

さすがに静も面食らっている

いきなり会った最高責任者が殴り倒されたら誰だって面食らうよな…

「…ここってどんな会社なんですか？」

静はそんな疑問をぶつける

…まあ社長を殴る会社なんて気になるからな

「悪の秘密結社よ」

「うおおおい！！」

この人あつさり言っちゃったよ！！

「あ、悪の秘密結社…？」

静…混乱してるんだろうな…

「…素敵！！！」

…はい？

「悪の秘密結社結社！？

凄い素敵だ！！

卒業したら就職したいよ！！」

「ふふふ

あなたみたいな将来有望な子は大歓迎よ」

「…ははは…」

そうだったな… 静も頭のネジが外れてんだっ たな…

「兄さん！

こんな素敵な会社見ないと損だよ
案内して！！」

…もつどうにでもなればいいや…

「…ここが戦闘部隊ね」

… 静はキラキラと子供のように目を輝かせている

「おい！

静ちゃん！！」

いつもテンションがたけーな

「園姉さん！！

あたしもやってみたい！！」

いきなりだなオイ

「いいよっ！！

誰かこの子とやるー？」

軽いな！

ノリが！

「俺が！！」

「いやっ！俺が」

「てめえやましい気持ちなんなら辞めやがれ！」

「やましい気持ちはてめえだろ！」

…なんか前にも見たような…

「私が決めてあげるよ

うーん…キミ！」

「ひゃっほー！！」

うわっ

ウザいな

「ねえ…兄さん」

「なんだ？」

「ウザイから本気だして良い？」

「…俺もウザイと思うから良いぞ」

そう言つと意気揚々と構える静

ありゃ相手の奴死んだな…

「始めー！」

そう言つたとたんに飛びかかる戦闘員

静は軽くかわして地面に叩きつけて鳩尾に蹴りを入れて間接を決めながら耳元で何かを囁いている

なんていつてんだ…？

「…だからクズみたいな戦闘員つてよばれるし彼女なんて永遠に出来ないしいらない存在になるんだよ」

…うーん…戦闘員泣き出したぞ

「ま…参りました…」

泣きながらギブアップをした

…可哀想になつてきた

「ふー！」

スッキリした！
次にいこつ！」

「あ…ああ」

「ここが化学発明科だ」

「頭が痛くなってきた!!
次ター!!」

…化学とか大っ嫌いって言ってたもんな

「兄さんお腹すいた」

「じゃあ食堂にいくか」

食堂はまあまあの人で長瀬さんは少し忙しそうだった

「あたし高級サイコロステーキと有機栽培サラダのセット」

…そんなんあるの!?

ヤバイ…金足りるかな…?

「俺は……!?!」

安い…けど…怪しい!!

『長瀬さんの日替わり気まぐれオリジナルメニュー
三百円』

…正直気がすすまねえ…

でも腹が減ってるしな…

…よし！買おう！

「おまたせ！！」

天川君！サービスといたよ！」

…俺の前にデンと置かれた洗面器

その中に…唐揚げがあつた

…あれ？

普通？

「…に、兄さん…なんて言うか…食べるの？」

…気づいてしまった…

唐揚げになっているもの…それは…

竹

筍ではなくて竹

…どうしろと言うんだ…？

「ふー」

美味しかった!」

「ははは…」

良かったな…」

どうにか食おうとしたけどヤッパリダメだったよ…」

腹減ったな…」

「兄さん」

「…ん?」

「ありがとね!」

そう言って少し駆け足で走っていった

「…そう言えば昔から何だかんだでお兄ちゃんっ子だったからな…」

「最後に請負部隊だ」

看護部隊は静には特に縁がないから紹介は省いておいた

「みんなー」

入るぞー」

入った途端に

ドスッ

「ごはっ！」

エリスと葵のダブル突進を食らった

しかも鳩尾にまた入った…

「エリス…葵…いきなり…なんだ…？」

「天川！」

遅いぞ！心配したぞ」

「…朔さん…

そちらの方は…？」

なぜか葵が氷点下の視線で静を見ている

「…俺の…妹だけど…」

「…そうですか…」

なぜかだまっていた静が

「兄さん…

この人達は…？」

なぜか氷点下の視線で聞いてくる

「俺の同僚だけど」

「葵さんにエリスさんだったよね…？」

なぜか敵意を持った視線と口調で語りかける

「あんた達は兄さんには釣り合わないんだよ…だから馴れ馴れしく兄さんに関わらないでよ…」

その言葉に葵が少し怒った表情で反論した

「朔さんな釣り合わない訳がないです！
どうすればアナタに認めて貰えるんですか！？」

…もしかして俺の事でケンカしてる…？

「そうだね…」

私にあんた達が勝てば認めないでもないよ」

「受けて立とうか…
で？」

何の試合をするんだ？」

「この勝負…俺が預かるうか」

なぜか総統が登場

「天川を賞品として君たちの勝ったものに与えよう
それで良いかな…？」

「もちろん

兄さんは渡さないよ」

「天川を取り戻してやる……」

「朔さんは渡さないですー……」

あれ？

俺の人権は？

続く

〇〇がやって来た（下）（後書き）

次回はつきたいタイトルがあつたので下にしました

次回が3部作の本当の完結です

ややこしくしていません…

最強乙女決定戦！

「どうもみなさん！

作者が司会に使えそうなキャラがいらないと言っことで私が生まれま
した！

ふくさわ
福沢と申します

さあ今日は

ここにいるどこのギャルゲー？的なハーレム状態のあんちくしょー
天川争奪合戦です！」

「…好き放題言いやがって…
あと裏話はすんな」

「さーまずはブラックリングの清純派アイドル
香坂葵ちゃんです
意気込みをどうぞ」

「あの二人には絶対負けません！
朔さんは私の物です」

「コメントありがとうございます！
いやー天川さんは死んで欲しいですね
続いてはブラックリングのツンデレアイドル
エリス・クロフォードさんです
コメントをどうぞ」

「誰がツンデレアイドルだ！
人を不愉快なカテゴリーに入れるな！！」

そしてその二人には天川は渡さん！」

「興味のない人はツンツンして天川さんにだけデレデレする！
私達は天川さんを抹殺したいと思います！」

最後は期待の超新星静さん！

コメントをどうぞ」

「兄さんは渡さない…」

「どうやらファンクラブ暗殺部隊が天川さんを狙っているようです
成功すると良いですね」

「…さつきから俺は何回死ねと言われたんだ…
それにファンクラブに暗殺部隊はいらんだろ」

「さーて天川争奪戦は三回勝負！
それでは開幕です」

…無視された

「まずは第一試合

料理対決

それでは…スタート！」

料理か…葵が心配だ…

「おっーと！

静選手！プロの手つきです

ゲストの総統さん

どうですか？」

「上手いな
静もエリスも」

確かに静はなかなかの手際の良さで料理を作っている

エリスもなかなか上手い

「葵選手は…？」

「…ノーコメント」

葵は…俺もノーコメントだ…

「さーて静選手！

これは…麻婆カレーです！

ティーズの伝説の料理！麻婆カレーです
それでは試食をどうぞ」

まずは一口

「うん、美味い

ピリリとした辛さで具材はトロトロ
とても美味い」

「べた褒めです！

次はエリス選手です

これは…チンジャアオロールです
普通に美味しそうです！」

一口食べてみた

「うん普通に美味しい」

「微妙です！コメントが微妙です！」
…うるさいな

「次は葵選手ですが…
なんですか…これ？」

「キシヤー！」

…なんで料理なのに生きてるんだろ…？

「自信作です！」

…牙が生えてるし明らかに俺が狙われてる

「キシヤー！！！」

「ぎゃー！！！」

「おーっと

天川さんに料理？が襲いかかりました
なんの料理ですか？アレ？」

「ハンバーグです」

「…ハンバーグは襲いかからなくて来るなー！！！」

「キシヤー！！！」

「はあ…はあ…」

つ、疲れた…

「一位は誰ですか？」

「し、静で…」

「おめでとうございます！」

「一回戦は静選手の勝利です！」

静はエリスを見て得意げに笑っている

そして葵を見て…かわいそうな物を見る目で見ている…

「さーて二回戦は…」

裁縫対決です！

ミシンでどれだけ上手く縫えるか勝負です！
スタート」

意外と上手いのがエリスだ

「ふっふっふ…」

機械であれば何でも上手く使えるからな…！」

なるほど…

「おーっと静選手
ひどい有様です！」

…うわっ…ひでえ

あれは縫うという名の破壊行動だろ

針が折れてあちこちに刺さり布はビリビリに破れ糸はあちこちに絡み付きミシンが黒煙を上げている

「…どうやったらそうなるんだ…？」

「おーっとエリス選手
終わったようです」

エリスはクッションを作っていて店に出てもおかしくないぐらいの出来だ

葵も上手いがエリスにはかなわない

「…一位はエリスかな」

「おめでとうございます！
一位はエリスさんです！」

「さーて次は…洗濯対決です！
どれだけ手際良く洗って干せるかの勝負です！
それでは…スタート！」
葵が意外と手際が良い

「おーっと

葵選手終わったようです！

エリス選手！服を破らないでください！！」

手洗いで洗っているがなんで服が破れるんだろ…？

「エリス選手物干しを折らないで下さい

葵選手！終わったようです！」

うーん…

きちんと皺も伸びてるし綺麗に洗えてる

…しかも早い

「葵が一位だな」

「一位は葵選手！

おーっと！

どうやら勝ち点が並んだようです！！

ゲストの総統さん！

この解決策はありますか？」

「…これは第四回戦を開くしかないな」

「それでは最終決着の第四回戦です」

…そろそろ飽きてきたな…

「ルールは簡単！

商品の天川さんを捕まえたら勝ちです！」

「えっ!？」

だからなんで俺の許可を取らないの!？

「それでは天川さん

がんばって逃げて下さい

それでは…スタート!」

「天川!おとなしく捕まれ!」

「朔さん!捕まってください!」

「兄さん…捕まらないと後が酷いよ…」

…なんか捕まったら明らかに大変なことになる…!

つーか最後のは脅迫だろ

「ふっふっふ

ロボット部隊!」

エリスの一声で大量のロボットが現れて俺に向かってくる

「朔さん!捕まって」

そう言つて第一回戦で作っていたハンバーグ?が襲いかかってきた

「兄さん…大人しく捕まるんだよ」

静は存在が恐怖だよ！

「…ん？」

ふと前を見るとキラリと何かが光ったような…

パーン

ゴッ

銃声の後何かが頭に当た…って…

「…ここは…？」

目覚めるとなぜか自宅のベットに寝ていた

「兄さん大丈夫？」

「…俺はどうなったんだ？」

「なんかファンクラブの暗殺部隊からの攻撃だった」

本当にいたのかよ！

「まあそれで気絶して起きないから連れて帰ってきたの」

「そうなんだ」

ピリリリ

「あつ、メールだ」

静が携帯をとってメールを見ると

「兄さん…こんなメールが…」

そこには親父から…

「私が悪かった！

だから帰ってきて！

お願い！」

と言うメールと

「お父さんの土下座を撮った写メがついてる…」

…久々に見る親父が土下座って虚しくなってくるな…

「うーん…

仕方ないから帰らないと…」

さすがにプライドを捨てて土下座した親父を哀れに思ったか…

つか親の威厳ゼロだよな…

「じゃあね

また遊びに来るよ」

そんな不吉な言葉とともに静は帰っていった

「…慌ただしかったな…」

いつもの数倍疲れた…

最強乙女決定戦！（後書き）

なんかグダグダになった気が…

…もっと精進します

天川が記憶喪失！？

「うーん…」

なんか疲れが溜まってるな…」

やっぱりここ最近慌ただしかったからな…

「疲れをとる方法ないかなー…」

トントン

いきなり肩を叩かれて振り向くと唐木さんがいた

「疲れが溜まっているようだね」

「分かりますか？」

「うん

随分とダルそうにしていたからね

これを飲むと良い」

渡されたカップの中には赤銅色の液体が入っていた

「…これは何ですか…？」

「疲れをとるオリジナルドリンクだよ
長瀬さんにも協力してもらったんだ」

「長瀬さん創作料理のセンスがやっぱり悪いだろ！」

赤銅色になる素材って何だよ！！

「まあ味は良いんだよ」

「…本当ですか？」

「うん」

堂背君で実験したからね」

…最近堂背の扱い酷いよな…

「まあ堂背君に害はなかったからからね
天川君も飲んでみてくれたまえ」

…限りなく嫌だ

でも飲まないといけない雰囲気だし…

「い、いただきます！」

ゴクッ

「あ、あれ？なんだかフラフラして…」

バタッ

「馬鹿者！」

天川になんて事をしたんだ」

「うーん…」

堂背君には問題がなかったんだけどな…」

「アイツは実験して薬への耐性があるんだ！
一般人の天川にそんな薬を使うな！！」

「朔さん

大丈夫ですか…？」

「うつ…」

「あつ！

目が覚めましたよ！」

「天川！

大丈夫か？」

「…あんだ達は誰だ…？」

「天川…？」

ふざけているのか…？」

「天川…？」

俺の名前…？分からない…全然分からない…」

「唐木！！
まさか！」

「…うん
記憶喪失みたいだね」

「…この馬鹿者ー！ー！」

どうも、斎藤と申します！

天川さんが記憶喪失でナレーション出来ないので僕が代わりにやる
ことになりました！

頑張ります！

「…俺は…なんて言うんだ…？」

「天川朔さんです」

「天川朔…？
それが俺の名前なのか…？」

本当に記憶喪失になってるんだ…

「うーん…
時間がたてば戻ると思うけど…何時になるかはわからないな…」

「どうするんだ…！」

「薬による記憶喪失だからね…
やっぱり天川君に関する記憶を聞かせるといいんじゃないかな？」

…なるほど

天川さんに関することを言えばいいのか

「天川さんはこのブラックリングって言う秘密結社に勤めているんです」

「秘密結社…？
うっ…頭が」

「記憶を取り戻そうとしているな…
もっと言ってみよう」

葵さんも天川さんに話しかけた

「朔さんは主任なんですよ」

「主任…主任…」

「天川…！！
大丈夫か？」

堂背さんがきました

「誰だお前は」

「堂背だよ堂背！
忘れたのか？」

「…ピンとも来ない
お前みたいな知り合いはいない」

「いやっ！

多分記憶が戻ってないからだよ！

エリス、葵、斎藤、萩原、金上…ピンとくるか？」

「…ううう…知ってる…みんな会ったことがある…」

「俺本当に忘れられてる！！」

ガガンと言う音が聞こえそうなほどビクビクしてトボトボと帰っていく

…記憶がなくなっても堂背さんへの対応はあんまり変わってないよ
うな…

「…私は葵なんですけど…」

次は葵さんがチャレンジしてます

「私達付き合っていたんです！」

「何言ってるんですかぁー！！」

明らかに捏造ですよ！

「刷り込んでおけば記憶が戻ったとき何かと有利に…」

「馬鹿者！」

そうです！

エリスさん！怒って下さい

「天川！貴様は私と付き合っていたんだ」

「エリスさん！？」

あなたもですか！？

「私が」

「いや！

私だ」

なんか醜い争いが起きています…

天川さんは…？

「付き合っていた…？…二人？…まさか」

何か思い当たったようです

「二股を掛けていたのか！？」

そっちに行かないでー！！

「二股かけるなんて…最低だな…死んだ方がいいんだ…死のう…」

「ネガティブにならないで下さい！」

天川さんは二股なんて掛けてないですよ！」

「…しかし」

「大丈夫ですよ！」

あの二人は天川さんが大切だからそんな事を言うんです」

そう言うのと天川さんは落ち着いてきました

ふう…本当に大変だな…

いつもやってる天川さんも疲れるだろうな

しかし…

「うーん…

なかなか記憶が戻らないね…」

そうなんです

色々と言ったけど記憶が戻らないんです…

「天川…エリス…葵…斎藤…金上…萩原…秘密結社…」

頑張っているのに天川さんは記憶が戻らないんです…

…と言うか堂背さんはやっぱり忘れてますよね…

「…万策つきるかな…」

ドゴン

いきなりすごい音がして壁がぶち破られました!!

「ヤッホー

天川は大丈夫かな？」

園音さんです

「天川さんならそこに…」

…

「ぎゃー!!」

白目むいて泡吹いて痙攣してるー!!」

どうやら園音さんが入ってきた時に飛んだ壁の破片が天川さんにぶつかったようです

「大変だー!!」

「天川さん…大丈夫かな…」

「園音！

貴様という奴は…!」

「…朔さん…」

…みんな心配しています

天川さんはみんなに心配されてるからやっぱり人望はあるんですね…

「…ううう」

「天川さん！？」

目覚めました

「…斎藤君？」

「天川さん！？
記憶が…」

「エリス…葵…園音
心配かけたな」

そう言つと笑つて立ち上がりました

「うーん

どうやらあの破片がぶつかったショックで記憶が戻ったようだね」

その言葉にみんなビックリしました

「…園音…
貴様を怒鳴つたのは…すまなかつたな」

「あはは！

いいよいいよ

ただのラッキーなんだから」

そう言つて園音さんは笑いながら帰つていきました

「うーん…

大変だったなー…」

バン

いきなり堂背さんが入ってきました

「天川！！

記憶が戻ったんだって！？」

そう言つと

「…どちら様で？」

…

「忘れられてるーーーー！！！！」

この後天川さんが堂背さんを思い出すまで二時間かかりました

天川が記憶喪失！？（後書き）

次の更新は月曜日です

そう！クリスマスです

次はクリスマス特別編をしようと思います

今日はクリスマス！！（前書き）

今回はクリスマスということで特別編です
視点がころころ変わるのでご了承ください

今日はクリスマス!!

どうもみなさん!

作者の読書家です

今回はクリスマス特別編とすることでみんなのクリスマスの過ごし方を教えます!

それではどうぞ!

天川の場合

今日はクリスマス

なぜかブラックリングには冬休みがある

…学校か!

「土日祝日休みで冬休みあり…よく成り立ってるな…」

休みばかりだし…

「しかしクリスマスなのに一人は寂しいな…」

うーん…

寝るかな…

「…最近疲れ溜まってたからな…」

しかし…最低なクリスマスの過ごし方だな…

「…ま、いつか」

寝よ…

エリスの場合

「今日はクリスマスか…」

天川…何してるのだろう…（寝てます）

「うーむ…」

クリスマスなど意識したことがないからな…

…どうすればいいんだ？」

…ネットで調べてみるか

「…恋人と過ごす…

彼氏にプレゼント…

…これだ！」

よし！天川にプレゼントを買って天川の家に行こう！

葵の場合

「うー…」

また失敗です…」

「キシヤー」

あつ！どうも、葵です！

ケーキを作ったのですが…

「キシヤシャー」

…やっぱりケーキが生き物になってしまいました…

「…やっぱり食べれるケーキを作りたいです…」

朔さんに食べてもらいたいのに…

「どうでしょうか…」

…そうだ！長瀬さんに教えてもらえばいいんだ！

「…長瀬さんに教えてもらってケーキを作った朔さんに食べてもらうんです！」

よーし！

長瀬さんに会いに行こう！

斉藤の場合

「…うん…元気にしてるよ…うん…職場は良い人ばかりだよ…分かってるって…お母さんも元気だね…じゃあ」

ピッ

斉藤です

今日はお母さんに電話をしていました

お母さんは一人暮らしなので心配になるのでよく電話するんです

「うーん…

この後は何しようかな…」

カレンダーをみると

「…あっ！クリスマスだ」

クリスマスなのをすっかり忘れていました

「今日は一人でいるのは寂しいな…」

誰かクリスマスを一緒に過ごす人はいないのかな…

「…いないな…」

…クリスマスなのに…

「寂しいな…」

総統の場合

「そこのお嬢さん…私とクリスマスを…」

「ごめんなさい」

そう言つて足早に去つていった

…総統だ

クリスマスなのに…一人とはいけなれないと思いナンパをしているが

「ごめんなさい」

「キモイ」

「ウザイ」

「邪魔」

「どっかに消えろ」

…泣きたくなつてきた…

百人中百人に断られたし…

「どうするかな…」

ケータイを見てみるが登録しているほとんどの女の子が駄目だった

し…

「あつ」

副総裁だけがまだだったな…

「…最後の手段だな…」

あそこにいる女の子にナンパして失敗したら電話しよう

「お嬢さ…」

「早く死ね」

…副総裁に電話しよう…

副総裁の場合

「うー…」

なんでクリスマスにジャニーズのコンサートがないのよー」

副総裁よ

クリスマスに一人…

結婚しろって実家の親から催促がくるし…

「あたしなんて売れ残りだよー…」

ピロピロ

「…メール？」

總統から…？

「今晚はクリスマスと一緒に酒でも飲んで過ごさないか？」

…絶対ナンパが失敗したから私に送ってきたわね…

「…まあいつか」

どうせ一人よりはましだろうし

「…たまには酒飲みながら語り合っかな」

白夜の場合

「どうしようかな…」

どうもみなさんこんにちは

久々の登場です

何を悩んでいるかというと

「…園音さんはオーケーしてくれるだろうか…？」

園音さんをクリスマスに誘おうと思っています

ちなみに私は園音さんが好きです

…言ってて恥ずかしいですね…

性格破綻者の彼女ですが恋は盲目と言うことで気になっていません

…盲目と言うよりも潰れている方が近いですが

「…悩んでいても仕方ない!」

プルルル

ガチャ

「もしもし?」

「もしもし」

「園音さん?」

「白夜君じゃん

メリークリスマス!!」

「メリークリスマス

それよりも今日は一緒に過ごさない?」

「いーよー!

じゃあ私の家で!」

ガチャ

…軽っ！！

再び天川の場合

ピンポーン

「…ん？」

起きて時間を見てみると午後八時

こんな時間に誰だろう…？

ガチャ

「あ、天川！

め、メリークリスマス！」

そこにはなにやら荷物を持ったエリスが立っていた

「どうしたの？」

「う、うむ！

天川！き、今日は一緒にクリスマスを過ごさないか？」

その提案に

「いいよ

一人は寂しかったからね」

…でも二人だけって言うのもな…

「エリス

二人だけだと緊張するから他にも呼ぼうか」

「う…うむ…

別に良いぞ…」

…少し落胆している…

俺と一緒に何がいいんだろ…？

まあいつか

「そうだな…

斉藤君に葵に金上さんに萩原さんかな」

十分後

「朔さんメリークリスマスです！！」

葵が到着した

「天川さんメリークリスマス」

次は斉藤君

「おう！メリークリスマス」

なぜか少し酔っている萩原さん

「…金上さん遅いな…」

「…メリークリスマス…」

「うわっ！！」

いつの間にか部屋の片隅に金上さんがいた

「金上さん…何故そんなところに…？」

「…特に理由は…」

無いのかよ

「…まあ何はともあれメリークリスマス！」

その後はエリスと葵にプレゼントを貰ったり…

葵のケーキが普通だったので食べようとするといきなり飛びかかってきたり…

萩原さんが持ってきた酒を飲んでバカ騒ぎしたり…

なんだかんだで楽しいクリスマスになった

この作品を見ている皆さんにも…

メリークリスマス！

…ちなみに

「…ううう…」

堂背は公園で野宿をしていた

「…町内会の人は天川の家を張っているし…」

何をしたのか町内会に追われて逃げている堂背

「…ううう…」

今日はクリスマスか…

メリークリスマス…

うわっ！追っ手がきた！！」

そうして堂背は町内会の人と追いかけてあってクリスマスを過ごした…

「俺の扱い酷くね！！？？」

大掃除をしよう！

今日は冬休み

「なのになんで仕事なんだ…？」

仕事がなぜか大晦日にだけある

「今日の仕事について総統から説明があります」

「あー

総統だ

今日は大晦日と言うことで大掃除をしようと思う
ということに頑張ってくれ」

…大掃除か

まあ頑張るか

「つーか請負部隊の部屋って汚れてねえな」

「まあ最近使い始めましたからね」

うーん…掃除をしないといけないんだけどな…

「そうだ

他の部隊の掃除を手伝えればいいんだ！」

「あー

なるほど」

「良い案じゃないか」

「頑張ります！」

「オレもやんのか？」

「…了解…」

まあみんなやる気はあるだろうし

「じゃあ行くか」

「まずは…戦闘部隊に行くか」

多分戦闘部隊は汚れてるだろうな…

「こんにちは」

請負部隊が掃除を手伝いにきました」

「いらつしゃーい！」

園音の元気な挨拶で戦闘部隊の部屋にはいるが

「うわっ…」

酷いものだ…

埃で前が見えず床は痛んでいる

機材には錆や黴が生えてるし…

「つーか全員ガスマスクつけてるよ」

…そんなに危険なのかよ

「まあ手伝ってくれるんならこれを付けてね！」

そう言つてガスマスクを渡された

…本当に掃除だよな？

掃除中はずっと空気清浄機をかけているが…

「主任！」

また壊れました！」

…これで三台目…

普通に使うだけで壊れるなんてどんな空気の汚れだよ

「主任！」

何人かのガスマスクが埃などで使用不能になりました！！」

もうそれは埃じゃねーだろ！！

園音は掃除と言う破壊活動を行っている

… 掃除で床が抜けたり壁が抜けたり…

… あいつは掃除の意味を分かってんのか…？

「主任！

また壊れました！

ストックありません」

「壊れたのー？

じゃあ換気扇でも回そー」

こんな危険な空気を外に流すなよ！！

「ピー…」

外に流した空気で雀が死んでる！？

もはや毒ガスじゃねーか！！

… そんなこんなで戦闘部隊の掃除は終わった

体調不良が半数

意識不明が数十人と戦争のような被害が…

… 本当に掃除だったんだよね…？

次は看護部隊に行くか…

「いらっしゃい」

白河さんが出迎えてくれた

「ふふふ…」

久々の出番だから張り切っちゃうわ」

…気にしてたんだ

「あとこれを付けてね」

そう言って渡されたのは

ガスマスク

「危険な薬品があるからね」

…ガスマスクしか見てないような…

「なんだここは…」

ここも酷い…

葵ちゃんが

「きゃー!!」

壁が血で真っ黒になってるー!!」

トラウマになりかけたり

斉藤君が

「きゃー!

ミイラ男が襲ってくるー!!」

「ああそれは患者さんね」

トラウマになったり

萩原さんが

「オラオラー!!」

「ひいひい!!」

斉藤君にトラウマを与えたミイラ男にトラウマを与えたり

…掃除だよな…?

「ふふふ」

「…くつく…」

…白河さんと金上さんが談笑している…

めっちゃめっちゃ気になる

…ちょっと聞いてみるか

「久しぶりね金上君

3月には面白い情報をありがとうね」

「…いえいえ…

…8月の時には…お世話になったんで…」

「ああ

あの時ね

8月の時の人は社会的に抹殺したから気にしないでね」

「…その代わりに…情報ですね…

…これからも…よろしく…」

「ふふふ

こちらこそ

…聞かなけりゃよかったな…

「ありがとうね

おかげで早く終わったわ」

看護部隊の掃除が終わりみんな少し疲れが出ている

「次で最後にしようかな」

「そうそう」

長瀬ちゃんが掃除が大変って言ってたから食堂に行ってあげてね」

「あ、はい」

食堂か…

「長瀬さんいますか？」

「はいはい」

長瀬さんが食堂から出てきたが…

「…何ですか…それ…」

エプロンになぜか返り血が…

「あははー」

大掃除なんで使わない食材を片付けてたの」

「…どんな食材でそんな返り血が…？」

なんせエプロンが真っ赤だからな…

「猪なんだけどね」

捌いてたら以外と血がでてねー」

「捌いてたのかよ!!」

「っ！かなんで捌かれてないんだよ!!」

「まあ気にしない気にしない

それよりも掃除なんだけどねー

あらかたやつちゃったから掃除してないのはキッチンだけなんだからそこをやってくれる？」

「はい

構いませんけど…」

「そう！

よかったー!!」

「二つあるんだけど一つはこれを付けてやるんだよ!」

「そうして渡されたのは

…またガスマスクかよ!!」

「デビルジュースと魔王ジュース製作所だから気を付けてね」

「行きたくなー!!」

「ふつつの厨房の掃除か…」

「ごめん…

「斉藤君と萩原さんと金上さん…

エリスと葵があまりに俺と一緒にのところでっつから折れてもら
ったんだが…

「エリスさん!!」

お皿を割らないでください!!」

「貴様もなぜ洗っただけで包丁が折れる!!」

」

…二人とも驚くぐらい洗い物のセンスがない

「二人とも…俺がやるよ…」

「ようやく終わった…」

時間を見るともう終わりだった

「…斉藤君たち大丈夫かな…?」

見に行くと

「斉藤君!!」

うつぶせに倒れている斉藤君

「ふはは…」

ガスマスクが効かないなんてな…」

萩原さんは壊れかけている

「……………」

金上さんは…？

「……………ガクッ」

気絶したー！！

その後、看護部隊に入院した斉藤君たちを置いて今日の仕事を終えた

帰ってからふと思ったことがある

「今日って…掃除だったんだよな」

うーん…

今度から大掃除は遠慮したいな

大晦日に年越しそば！（前書き）

すいません

大晦日に更新をしようと思ったんで少し更新が遅れました

しかし秘密結社へようこそもついに三十話目！

読者数も一万人突破！

これもみなさんのおかげです

これからも秘密結社へようこそへの感想などをお待ちしています！

大晦日に年越しそば！

今日は大晦日

この前、請負部隊で年を越そうという話をしたのだが…

「そのマンガとって下さい」

「天川さん

お蕎麦は買いましたから」

「うーむ…

コタツがあつたかい」

「酒無いのかよ酒ー！！」

「……………」

…なぜか俺の家に集合している

「つーかさ…

何で毎度毎度俺の家なんだ？」

「「「みんなここなら場所を知ってるから」「」

…俺にプライバシーはないのか…？

「なあなあ天川」

「なんですか？
萩原さん」

そう訊くとニヤリと笑い

「ゲームをしないか？」

「ゲーム？」

「おう

くじを引いて当たった奴が蕎麦を作る
そしてまたくじを引いて当たった奴がその蕎麦を食べる
どうだ？」

うーん…

面白そうだけだな…

「よし！

やるぞー！！」

「返答してませんよ！？」

最初からやる気なんじゃん！

「よーし

じゃあくじを引け」

なんだかんだで始まった年越しそば大会

「誰が当たった？」

「ぼ…僕です」

一番手は斉藤君になった

「よし作ってきてくれ」

うーん…

待ってる間は暇だな…

「なんかする事無いかな？」

テレビは面白いのが無いし

「テレビゲームでもしたらいいんじゃないですか？」

でもテレビゲーム持ってないしな…

「…テレビゲーム…持ってます…」

金上さん…何気にタイミングがいいな

「出来ましたよ」

斉藤君が台所から戻ってきた

その手には美味そうな蕎麦が

「じゃあくじを引け」

うーん

ここで当たった方がこの後が楽だよな

「誰が当たった？」

「…はい…」

金上さんか

「味はどうですか？」

金上さんに蕎麦の感想を聞くと

「…美味しい…」

なんか普通だなー…

「次は誰だ？」

「私です」

葵が…当たったか…

「じゃあ頑張ってください!!」

…正直頑張らないでほしいな…

「…どうする?」

台所で明らかに蕎麦ではない音がしている

「正直…誰も食いたくないよな…」

「誰か人柱になってくれないかな…」

ピンポン

「はい」

こんな時間に誰だ?

「やつほー!

天川!久しぶり!」

…なんだバカか

「あー

なんだ?」

「腹減ったからなんか食わせて」

ちょうど良いタイミングだな

「良いぞ…上がれ」

「出来ましたよー!」

葵が蕎麦らしき物体を持っている

「堂背が食いたいらしいからな
食わせてやってくれないか?」

「良いですよ
堂背さんどうぞ」

うーん…

見た目は蕎麦なんだが…

「うおーー!
いただきまーーす」

そして堂背が食べようとすると

キシャー

「つぎやー」

いきなり蕎麦が蛇のように動き出し堂背に飛びかかった

「さーて

次やるか」

…無視って萩原さん…鬼だな

「次は誰だ？」

「あつ、俺だ」

次は俺が作る番になった

「じゃあ作りに行ってくる」

「出来たぞ」

そう言うと

「くじを引くぞ」

「いかさましないで下さいね…！」

「天川の手作り蕎麦…」

「…なんか怖いですね…」

そんなに力を入れることか…？

「誰が当てた…！」

「ぼっ…僕です！」

萩原さんの大きい声にビビりながら斉藤君が名乗り出た

「斉藤君か

じゃあどうぞ」

斉藤君は食い始めるが

「天川さん…美味しいけど美味しくないです…」

…そりゃあ斉藤君をハズれた三人が睨んでいたらな

「…一番マトモそうな蕎麦をとられた…」

「…私が食べたかったのに…」

「…天川の蕎麦が………」

…みんな口に出てるよ

斉藤君がめちゃくちゃ居心地悪そうだし

「じゃあ次は誰だ？」

「私だ」

エリスか…

ふっと時計を見たらずいぶん遅い時間になっていた

けっこう時間がかたつのが早いな

「出来たぞ」

エリスが作った蕎麦はなかなかの出来で

「誰が当たった？」

「私です」

葵ちゃんか

少し食べて感想を聞くと

「ええっと…すいません普通に美味しいです」

…コメントしづらいな

「じゃあ次は…」

オレか」

萩原さんの番となり台所に入っていく

「そういえば…萩原さんは料理出来るのかな？」

台所の方に耳を澄ますと

ガガガガバキッグシャドスッ…
ドゴオオオオオ

「…なんの音だあああ！！！」

うちの台所は大丈夫なのか！？

「出来たぞー」

萩原さんが持ってきた蕎麦を見ると

「うわっ…」

…まずは麺が黒こげ

…ダシが無色透明

…上にはなぜか納豆とキムチが

「…蕎麦？」

「おう

さあ食べ」

「…誰が当たった…？」

「…私だ」

エリスが当たったみたいでめちゃくちゃ泣きそうになっている

「エリス…無理だったら俺が食うぞ」

「…その時には頼む」

…なんというか…戦地に出兵する我が子をみる感じだな

エリスが一口食べると

「…なんというか物理的に不味い…」

…可哀想に…

「最後は金上か」

もはやこれも最後になったか

「……………」

無言で作りに行く金上さん

「よし

くじを引くぞ」

引いて当たったのは萩原さんだった

「しかし…

金上は料理出来るのか？」

…確かに謎だからな…あの人

「…出来た…」

そう言うと机の上に蕎麦をおいた

「おう

いただきます」

一口食べた萩原さんに感想を訊くと

「…美味いんだが

どこかで食ったような…」

「…それ…インスタントの…ダシだから…」

「…なんか嬉くねえ」

…まあ失敗じゃないから良いのでは？

「ふー

食った食った」

なんだかんだ言いつつ全部食べた萩原さん

周りを見ると

食べてコタツの中でゴロゴロしている斉藤君と葵

気分が悪くなり寝ているエリス

いつの間にかコタツにいる金上さん

未だ蕎麦と格闘しているバカ（堂背）

「結局いつものメンバーで年越しか」

まあ嫌ではないけどね…

「…あつ！」

俺は蕎麦を食ってない！

「…しょうがない
作るか」

その後蕎麦を作ろうとしたが蕎麦がなくなり偶然あったカップめんの蕎麦を食べた

…一人だけ寂しいな

「さあカウントダウン五秒前」

いよいよ正月か

まあ来年も頑張ろうな

「四、三、二、一、ゼロー…！」

「あけましておめでとう！」

うーん新年になったなー

これから秘密結社にようこそをよろしく！

新年羽つき大会！（前書き）

すいません…

スランプでずいぶんと更新が遅れました

楽しみにしててください！た方に誤ります！

ごめんなさい！！

…ちなみに今回はシリアスが入ります

秘密結社では初めてのシリアスなので上手くできてないかもしれませんが…これからも秘密結社を見捨てないでください！

1/10 本文にミスがあったのを修正しました
ご指摘ありがとうございます

新年羽つき大会！

ピンポン

「はい」

今日は正月

仕事はまだ先なのだが、すこし用事をしていて疲れが溜まっていた

「動きたくないな……」

疲れが溜まっていて今日は寝ていたい……

「ヨイショ……」

今行きま……」

ドゴオオ

「……なんかこれも久しぶりだな……」

「ヤッホー！

一緒に遊ばない？」

唐突な展開にもなれてきたな……

「何をするんだよ」

「羽つき！」

羽つきか…

昔にはやった記憶があるんだけど…

「ところで二人だけか？」

二人だったら悲しすぎる

「いやいや

ちゃんとブラックリングのメンバーが揃ってるよ！」

…みんな暇人だな

「明けておめでとうございます」

総統や副総統に挨拶をしてからメンバーをみると

葵、エリス、白夜さん、園音、斉藤君、萩原さん、金上さん、白河さん、バカ（堂背）といったもののメンバーが揃っていた

「それでは新年ブラックリング羽つき大会を始める」

「大会だったの！？」

どんだけ小規模な大会だよ！

「今いるメンバーで羽つきをしてもらう
一番勝った者には賞金を渡す」

…賞金つてなんかブラックリングは金遣い荒いよな

「負けたらエリス特製墨汁で顔にラクガキされる」

「特製？」

「うむ

墨が自然と分解されるが1日たつまでは何しても消えない」

…明日まで消えないって事か

帰りがキツいな…

「それでは第一回戦、バカ（堂背）対園音！」

…試合は圧倒的だ

園音の打った羽は堂背の羽子板を砕き

堂背の骨を砕き

堂背の内臓を砕いた

…死ぬんじゃないかな？

しかも降参した堂背に墨を塗りたいくる

…鬼だ

堂背は顔に髭と額に肉とほっぺにぐるぐると描かれた

…捕まるんじゃないか？

その後も順調に進んでいき副総統が総統に羽をぶつけまくり総統を降参させたり

白河さんが某王子の出てくるテニスマンガの技を出したり

…白河さん凄いな

「俺か…」

相手は白夜さん

「天川君

容赦はしないよ」

…オーラがでていて怖い

「…ま…参りました」

「危なかった…
だが勝利したぞ」

「勝者！

白夜！」

…期待したみなさんすいません

善戦したけど普通に負けました

「天川君

覚悟は良いかな？」

…墨はやだな…

五分後…

顔に夜露死苦やら喧嘩上等やらいろいろ描かれた…

そつえば白夜さん…もとヤンキーだもんな…

その後も続いていき白河さんが優勝した

「ふふふ…

久々だから頑張っちゃったわ」

…そうですか

「ただいま」

帰りの時に周りの視線が痛かった

ピピピ

「…電話か」

誰だ？

「もしもし？

兄さん？」

「静！

どうしたんだ？」

「お正月…帰ってこなかったね」

「…そりゃあ親父と絶縁してるから…」

「兄さん…

父さんは気にしてないから帰って来いって…」

「…でも一度絶縁したんだ
そう簡単には」

「兄さん…」

そう遮って静は

「あの人のこと…まだ…探してるの？」

その言葉に 時間が 止まった

「兄さん…あの人のことは兄さんのせいじゃないんだよ！
何時までも引きずってもあの人は悲しむだ…」

「静」

自分でも驚くほど冷めた声が出た

初めてかけられた冷たい声に静は黙る

しかしまた話し出す

「兄さん…あの人の事を忘れないと兄さんは幸せにはなれない…
兄さんは気づいてるんでしょ？
あの人はそんな事望んでない！」

「…」

「兄さんの周りには良い人ばかりじゃない
それにエリスさんや葵さんは絶対に兄さんの事が…」

「…知ってるよ」

「…えっ？」

俺はあの二人に憎からず思われていることも

秘密結社にいれば幸せになれることも

全部…気づいてた

「でもな…静」

俺は…あの人が忘れられない

「俺はあの人がいないと…本当の幸せにならない」

その言葉を聞くと静は

「…兄さんの…バカ…!」

そう言っで電話は切れた

「…静…泣いてたな…」

バカか…

そんな事…気づいてるよ

「ははは…」

乾いた笑いをした顔に涙が流れていた…

ブラックリング最大の危機！！（前書き）

またまた遅れました…

次の更新も遅れそうなので…みなさんにはご迷惑をおかけします

ブラックリング最大の危機！！

「う…嘘だろ…？」

静からの電話がきてから一週間

あの電話以来、あの人を探す事を今までよりも力を入れて探し始めた
しかし休みを使って探す、全くと言って良いほど収穫はなかった

「…どこにいるんだろうな…」
体の弱かったあの人…

生きているかも分からない

死んでいたら…

…俺も死ぬんだと思う

体ではなく…心が…

いつものようにブラックリングに出社した

変わらない毎日…

しかし…そこには

「…なんだこれは！？」

ブラッキングの会社は半壊しており何人もの社員が倒れていた

「どうしたんだ!!」

倒れていた社員に駆け寄る

「あ…天川さん…

敵が…やって来て…中に…まだ…みんなが…」

「分かった!!」

その言葉に急いで社内へと駆けていった

「…ヒドいな」

社内はボロボロになり人はみんな倒れている

「…早く行かないと」

おそらく敵がいるであろう総統室に向かう

総統室では総統と副総統、さらに園音もいた

「…天川

今、ブラッキングは危機に瀕している」

「見れば分かります」

「…なんか反応が冷たい」

「総統？」

「そんな事どうでも良いでしょう？」

「分かったから…副総統さん…怖いって」

…コントかよ

「そろそろ本題だ」

「敵は一人…正義のヒーローからの刺客だ」

「…一人？」

「つまり相手は…」

「とても強い…」

…本当にブラッキングの危機だな…

「現在、白夜と堂背に対応してもらっている」

「大丈夫なんですか…？」

「大丈夫だ、秘策があるからな」

秘策…？

「白夜が危険なときは堂背を盾に」

そしていざとなったら堂背を犠牲に敵を攻撃する作戦だ!」

…ただ堂背が犠牲になるだけじゃん

「しかし…勝算はほとんどない…」

そのために一様今後の作戦を話しておこう」

作戦…?

「まず我々がここから脱出する

トップが残っていれば復活できるからな

そして倒された社員だが…白河たち看護部隊が安全な場所で待機している

彼女たちに事後処理は任せる

そして天川…

請負部隊でできる最善の行動をとれ

これは命令だ!

拒否権はない」

最後とばかりに初めて総統らしい仕事をした総統は

「では…頑張つてこい!」

最後の励ましの言葉を言った

「…わかりました」

そして俺は…ブラックリングの請負部隊主任として…最善の仕事を
する

ドゴオ

「…！」

向こう側の壁が破壊された

その事実は白夜さん達がやられたことを意味する

「…無事でいてくれ」

そして壁から現れたのは

真っ赤な鎧

「…この組織ノリーダーハドコ？」

ボイスチェンジャーを使っているのか異様な声で訪ねてくる

「もう逃げたよ

…あんたの名前は？」

「…赤騎士…」

赤騎士…？

「ソナコトハドウデモイイ
ソコヲ通シテ」

「嫌だといったら？」

「…容赦ハシナイ」

ドゴオ

「…ドウシタ？
ソナモノ？」

「くっ！」

赤騎士という敵が現れて数分

戦い、その力が分かった

「…強い」

独特な使い方、槍を操り、リーチを読ませない

紙一重で交わすのにも限界がきた

「…マダカワスノ？」

そう言って槍を突き出し

「くおっ！！」

なんとか横にかわし距離をとる

正直…白夜さんたちがやられた相手にかなうとは思えない

だから…総統たちが逃げるまでの時間を稼ぐ…！

それが俺にできる…最善の仕事だから…！

「…コレデドウ」

赤騎士は槍を横に凧ぎ、それを交わしたところに

槍を投擲した

「くっ！？」

なんとか体をひねり回避したが…

「…サヨナラ」

そしてその拳の一撃で意識は昏倒し…

「ガガ…こちら本部…敵兵を…抹殺したか…？」

「…戦闘不能ニシタノデ、ソノ必要ハ…ナイト…」

「…ガガ……了解…しかし…命令…を…遂行できなかった…罰は…
受けてもらう…ガガ…」

「…了解」

そして俺總統の逃げた方向を向き

「人ハ…殺シタクナイナ…」

その言葉を最後に意識は完全に失われ世界が暗転した…

ブラックリング最大の危機2（前書き）

またまた遅れました…

今度はあまり遅くならないようにしたいと思います

ブラックリング最大の危機2

「…ここは…?」

「やつと目覚めた?」

そこは白い部屋で隣には白河さんが座っていた

「葵ちゃん達みんなが心配してたわよ」

「…そうですか」

赤騎士の戦闘の後…どうやら看護部隊に回収されたらしい

「ちなみに総統はうまく逃げたわ
本当にゴキブリ並の逃げ足ね」

なぜか白河さんが辛辣な事を言ったが

「まあ…」

生きていたらまた再建できるけどね」

…白河さん

「金の切れ目が縁の切れ目、今月分のお給料払ってくれないと切り
たくても切れないからね」

…前言撤回、白河さんは辛辣すぎるよ…

「…そういえばブラックリングはどうなったんですか…?」

「うーん…」

赤騎士の襲撃による被害は確か負傷者二百人、ビルはもうほとんど壊れてもう使えないわね」

…改めて聞くとすごい被害だ…

少なくとも今までなれ親しんだブラックリングは無いってことが…

「あとね…不思議なことなんだけどこれだけの被害があって死者は一人もいないの」

「…」

あのととき…

「人八…殺シタクナイノ」

…あの言葉はまるで機械のような赤騎士から唯一感じられる感情だった

「死者はいないか…」

「あっ！

そうそう

堂背君はたぶん敵もム力ついたか生理的に受け付けなかったのか白
夜君の数倍の傷だったわよ」

…敵からも嫌われるって…

なんか堂背が不憫になってきたよ…

「死ななかったのは偶然に近いぐらいだったわ」

…本当に堂背が不憫だよ

「じゃあそろそろ家に帰ります」

そう言うつと

「まあ体調は良いと思うから無茶はしないでね」

「わかりました」

「後これね」

そこで手渡されたものは…

「…これは？」

「北海道に行ってたからお土産ね」

…なんで昆布…？

「白河さん…いろいろ言いたいですがなぜ昆布なんですか？」

「おいしいお出汁が飲みたくて」

そう言つてキラキラと何かを期待する目をする白河さん

「…またなんか作ってきます」

「お願いね」

そう言つてにつこりと笑う白河さんに俺は勝てないと思った

「ただいまー」

ようやく我が家へと歸つてこれた

帰ること事態が久々だなーと思いながら家の中へ上がる

「お歸りなさい」

「お歸りー」

…あれー？

外に出て確認するが…俺の家だよな…

…誰かいる

「…俺のいない間になにが起こつたんだ…？」

家の中に上がりリビングに行くとな人の気配がする

そして思い切って開けると...

「... 総統？
副総統？」

そこにはリビングでゴロゴロしている総統とテレビを見ている副総統がいた

「なにをしてるんですか...？」

副総統はテレビを見ているだけだから良いのだが総統は...

コタツに入りお菓子を食べながらマンガを読んでいる

... 俺の家だぞ？

「はー...
お菓子はもうないのか？」

「ありませんから早く出ていけ！穀潰し！」
なんか腹が立つたので暴言を吐く

「ひ、ひどい...」

わざとらしくそういつて泣き真似をする総統に副総統は蹴りを入れる

「じぼっ」

とても痛々しい断末魔をあげた総統はほおっておき、副総統から事の顛末を聞く

「どうしてここにいますか？」

「逃げていたら天川君の家があつてね、つい思わず…」

…どんな理由だよ

「なんでそんな勢いとノリだけの理由なんですか…？」

「それは総統がいきなりそう言いだしてね…」

…総統もバカだよな…

「何でこのバカが総統なのかしら…？」

「同感です」

「それよりも副総統…」

ブラックリングはどうなるんですか？」

そう訪くと副総統は

「そうね…」

少なくとも今の場所からは移動ね…
再開にも少し時間がかかるわ
だから…業務は一時停止ね」

それはブラックリングの完全敗北…

「でもね…

やられっぱなしじゃあ面白くないでしょ？
だから反撃をしないとね」

「反撃…？」

ブラックリングは機能停止しているのに方法があるのか…？

「…あつ！

ごめんなさい！
用事があるから家に帰るわ！
総統をお願いね！」

そう言って走りながら副総統は帰っていった

…さっき小さい声でジャニーズのコンサート始まっちゃうって言う
てたな…

「つーか…一番肝心なところだったのに」

ものすごく内容が気になる…

「続きは俺が説明しよう」

そう言つて総統が起き上がり話し始めた

「実はエリスに新兵器の発明をしてもらったんだ
それを着ければお前の力を…」

そう言つと電話を取り出し

「…もしもし？」

エリスか？…天川なら帰つてきたぞ

…うん

ところであの新兵器…力を何倍にするんだっけ？

…五倍！？

すげーな！

…うん

ありがとな

…うん

お礼はするよ

じゃあ」

…きちんと確認してろよ…

「五倍だそうだし
すげーな」

…人事かよ

「どうやら天川用に作られているらしいからな

「お前がつけるんだ」

そう言って渡されたのは、腕時計のような機械だった

「これが…新兵器？」

「ああ

「お前が着けるんだ」

「俺が……ですか」

「そうだ！」

試しにつけてみる

使うには変身！って言いながらコサックダンスをするんだ」

…
ダン
ダン
ダン
ダン

(コサックダンスをしている)

「变身」

「ぶつ」

わはははははは！

す、すまん、ははは

嘘だ！

「は は は は は は は」

⌋
⋮
⌋

עצמ

プルルルル

「もしもし？」

「天川！！」

久しぶりだな！！

どうしたんだ！？」

「あの新兵器ってどうやって使うのかな？」

「む…？」

総統に教えたはずだがな？

それを持つて装着と言えば使えるぞ

と言うか…天川？

なんか声が怖いぞ？」

「あー…」

気にしないで

うん

またね」

…

「装着」

そう言った瞬間にその機械が光り出し、体に纏わりついた

そして…その光は真っ黒で硬質的なフォルムになり、鎧となった

「ははははは

…ん？

おお！

それこそが新兵器

その名も『ブラックフォース』だ！」

…確かにこれを付けた瞬間に力が溢れる

さてと

「総統」

「ん？

なんだ？」

「死ねやこのアホンダラアアアア！！」

（残酷すぎて描写できません）

「ふー…」

真っ赤な固まりとなった総統はほおっておいて…

赤騎士…今度は勝つ！！

ブラックリング最大の危機3（前書き）

これでブラックリングの危機編は終了です

ブラックリング最大の危機3

「どうやって赤騎士を呼ぶんだ？」

そう、リベンジは良いのだが赤騎士を呼べなければ意味がない

「ふっふっふ

大丈夫だ

ぬかりはない」

赤い何かの塊から復活した総統はそう答えた

「いま斎藤と金上に頼んで偽の情報を流している」

「偽の情報？」

「そうだ」

そう言っただけでパソコンを開き動画をクリックした

「ふはははははは！！

やあ正義の味方君！

君が潰したと思ってているブラックリングの総統だ！

何故潰れてないのか！？

確かに被害は小さくはなかった…

しかし！我が結社の技術力により…」

そう言った瞬間後ろを移すと…

無傷のブラックリング社が写っていた

さらに人も出入りしていて本当に再生している

「ふははははは！
どうかね？」

しかしこちらもやられっぱなしでは気がすまない
よって君たちに言う！

この映像をとった日から一週間後
またブラックリングに来てもらおう
来なければ君たちの負けだ

分かったかね？
一週間後だよ？
楽しみにしている…ふははははは！！」

「…」

総統はとても良い顔をしている

「どうだ！？
力作だぞ！」

…

「いろいろと聞いて良いですか？」

「ドンと来い！」

「ブラックリングが治ってましたけど…」

「あれはハリボテだ！」

「人が沢山いましたけど…」

「エキストラだ！」

「一時間ブラックリングに入ったり出たりで五千円だ」

「あと最後にこれいつ作りました？」

「六日前だ！」

……

「明日じゃねえかこのポケ總統がああああ！！！」

再度赤い塊になった總統は放置しておき

「明日か…」

この前は手も足も出なかった…

しかし今は、

このブラックフォースを使って赤騎士と善戦できる

「次こそは…絶対に負けない！」

次の日

「後もう少しか…」

赤騎士との決闘まで時間がなくなってきた

「頑張れー!!」

…後ろでは請負部隊や総統たちが応援している

…正直小恥ずかしい

「天川君」

白夜さんが松葉杖をつきながら歩いてきた

「大丈夫なんですか？」

「ああ

何とか調子はいいいんでね

…すまない

私の敵をとってくれ…」

「…わかりました」

「天川！」

次はエリスがきた

「信じているぞ！」

勝ってこい！」

「…ああ」

「天川君」

今度は白河さんからだ

「頑張つてねー」

「軽っ！」

…シリアスじゃなかったのか…？

「天川！！」

「うるさい黙れ」

「ひぐえ！」

飛びかかってきた堂背は蹴り飛ばした

飛びかかってくる意味がわかんねーよ

その後も何人もの応援をもらった

そして…

「…マタアナタ？」

「赤騎士…」

この前の苦い思い出がよみがえる…

だが…

「装着」

そしてブラックフォースを纏った

「…ソレハ！？」

動揺する赤騎士

「やられたらやり返す

今度は無様なやられ方なんてしない！」

そして赤騎士を睨みつけ

「これで…お前を倒す！」

そついった直後、ダッシュで赤騎士に近寄る

「！？」

いきなりダッシュで近寄られ、さすがに怯んでしまう

「ここだー!!」

怯んだ隙についてガードのされていない脇腹に渾身の一撃をたたき込む

「グッ！」

しかしギリギリにガードされたため、直撃は避けられた

「…コンド八手加減シナイ！」

そう言うつと背中から槍を取り出し構える

「…覚悟！」

「…くっ！」

槍を使うとき、懐に入られた場合は抵抗できないと思った

しかし柄を使うことでショートレンジの戦いをこなし、隙をつくらない

最初の一撃以降の手を考えていなかったから正攻法で戦っているため、隙を作ることもできない

「八方塞がりか…」

「天川！」

右腕のボタンで武器が出るぞ！」

いきなりエリスからそう言われ、ボタンを押した

すると右腕から出てきたのは黒い銃剣だった

「ナ…ナニ？」

赤騎士は動揺している

「いくぞ…！」

そういつて引き金を引く

弾は発射され赤騎士へと向かう

「クッ」

それをかわす赤騎士

「なるほど…槍では上手く弾けないからな」

何発も撃つが隙を見て接近戦に持ち込む

銃であれば接近戦は不利だ

そう…銃であれば

「クラエ！」

しかし…俺が持っているのは

「銃剣だ！」

ガキン

槍と剣がぶつかり音を出す

何度も競り合い疲れは溜まっていく

だが至近距離からの銃撃をかわしながらの攻撃のために疲れは向こうの方が溜まっている

そして、疲れのせいでよろけた赤騎士

「…いまだ!!」

そして銃剣を捨て、顎に拳を叩き込む

「ウグツ!？」

そう言った後、赤騎士は力を失い…気絶をした

「…勝った…」

後ろではブラックリングのみんなが歓声を上げている

「…勝ったんだな」

「気がついたか？」

赤騎士を縛って動けなくした後、起きるまで待っていた

「……」

黙っている赤騎士に総統が尋問する

「聞きたいことがあるんだが……
いったいどのヒーローなんだ？」

「……」

「答えないか……
なら質問を変えよう
君は女の子だね？」

「ダツタラ……ナニ？」

薄々感づいていたが、赤騎士は女の子だった

「出来ればスリーサイズをグギャアア!!」

バカな質問をした総統の副総統が股間を蹴りあげた

……泡を吹いて失神している

… 人事ながらみていて痛い…

「痛そうだね…」

白夜さんに同感

「全く総統は…」

誰か尋問してくれないかしら？」

「なら俺がスリーサイギイヤアア」

さっきと同じように副総統はバカの股間を蹴り上げる

「… 全く… ここにはバカなのが多すぎるわね」

… 激しく同感

「アナタたちハ… ナンナノ？」

さっきまでやりとりを見ていた赤騎士がそう聞いてきた

「アナタたちハ悪

ダカラ私ハアナタたちヲ攻撃シタ…

デモ… ナンデ悪クナイノ！？」

ナンデ普通ナノ！？」

… コレジャア… 私たちが間違イジャナイ…」

そう言う赤騎士

… それは懺悔でもあった

「おい…！」

たまらず俺は言う

「間違いなら正せ

正せないなら自分の正義を貫徹
後悔はなにも救わない

救いたいなら…前を見る！」

その言葉に赤騎士は

「…クスッ」

「…俺変なこと言ったかな？」

周りは

「クサイセリフね」

「ありきたりね」

「うーん…ちょっとクサかったな」

「天川…陳腐だが良かったぞ！」

「…お前ら」

…好き放題言いやがって…

後で覚えてるよ…

「違ウハ…マサカ悪ノ秘密結社ニ教ワルナンテト思ッテ
…ソウネ
前ヲ向カナイト」

そう言つた赤騎士

「赤騎士ヨ
簡単ニ陥落サレオツテ」

「誰だ!？」

振り向くとそこには黒、白、灰色の鎧を着た騎士が居た

「…ヘルナイツ…様…」

「赤騎士
貴様程度ノ雑魚デハ全滅ナドデキンカ…」

赤騎士を…雑魚扱いだと!？

「仕方ナイ…我ラガヘルナイツ（地獄の騎士）ガ…ココラ地獄ニカ
エヨウカ
ソシテ赤騎士…貴様モ処分シヨウ」

今居るメンバーは赤騎士に勝てなかった人だけ

そして俺は満身創痍

…絶対絶命だ…

「ソレデハ…サラバダ」

「ドッカーーン!!」

「又グウアアア!？」

いきなり白い騎士が蹴り飛ばされた

「イエエエエイ!!」

園音さんのお帰りだーい!!

今まで修行で居なかったけど十倍以上にパワーアップだーい!!」

「テンションも数倍上がってんじゃねえか!」

何というか…トコトンシリアスにさせない奴だよな…園音…

「ふははははー!!」

私の可愛い子分に手を挙げるなんてチョコパフェ並に甘い!

私がギッタンギッタンにして東京湾にさらしてやるぜー!!」

「子分でもねーしテンションがおかしすぎるだろうが!」

本当にムチャクチャだよ…

「覚悟だよ!」

「我ラガ三人二单身デ立ち向カウナド笑止
来世デ後悔スルガイイ」

「ふははははは！！」

最後に…名付けて！『ディズニールランドで身長制限に引っかかって
アトラクションに乗れなかった子供の悲しさアターック！！』

「無駄になげーよ！！」

っーか…強っ…

ほとんど時間たってねーし…

二、三分もたたないのに最早ボロボロのヘルナイツ

…何か色々と虚しくなってくるよ

「ふうつ

勝ったよー！」

…赤騎士が言葉を失っている

…赤騎士の数倍強い奴らをほんの数秒で…

俺が生きてる意味有るのかな…？

「しっかし弱いね！

二割程度でしか戦えなかったよ」

…死んでしまおう！

「アノ…」

赤騎士が尋ねてきた

「私…アナタたち二酷イ事シタケド…私ハモウ見捨テラレタシ…
出来レバ…アナタたちト」

「分かった！！」

総統が股間を抑えながらようやく起き上がった

「仲間にしてあげるよ！」

「エッ…？」

驚く赤騎士

そして副総統が間髪入れずに聞く

「総統…！？

そんな即決でいいんですか？」

「なら入れないのか？」

「…っ！

いえ…歓迎しますが…」

そう言うと総統は微笑み

「だろ？」

それに女の子は大歓げ「おおお！？」

総統本日二回目の股間への蹴り

「…私がバカでした…」

…総統が悪い

そして赤騎士に微笑み

「秘密結社にようこそ！」

そう言うと赤騎士は嬉しそうな声で

「ヨロシク才願イシマス」

「ねえねえ」

園音が赤騎士に話しかける

「仲間なんだしー顔を見せてよ」

「…ハイ！」

そう言って仮面をとる

「可愛いわね！」

副總統が驚く

だが…俺は…知っている…

誰だか…知っている

「…そうですか？」

その声も…知っている…！

あの人の…あの人の…！

「名前はなんて言うの？」

「…紅です」
くれない

あの人の名前…紅を聞いた瞬間に俺の意識はなくなり…最後にみたのは驚いたみんなの顔と…俺の最愛の人…紅の顔だけだった

ブラックリング最大の危機3（後書き）

何とか一ヶ月以内に更新できたー！

…すみません

作者の根気がなくて遅れました

前は早くなるかと言いましたが出来ませんでした…

…こんな作者ですか見捨てずに秘密結社へようこそをよろしく願います

過去の追憶（前書き）

今回でシリアスは終わりです!!

最終話までコメディ一直線で突っ走っていきます!!

過去の追憶

「うつ…」

「目が覚めた？」

白河さんがそう聞いた

…そうか…俺…気絶したんだ

…ドコにいるか分からない紅が赤騎士だった…衝撃的すぎて意識が保てなかった

「天川さん」

久々に斉藤君がやって来た

「赤騎士さんが心配していましたよ

天川さんが赤騎士さんを見て倒れたものだから赤騎士さんが驚いて」

「…ごめん…心配かけた」

「い、いえ！別に大丈夫ですよ！？」

よほど悲痛な顔をしていたのだろう

斉藤君が慌て慰める

「天川君

赤騎士ちゃんならエリスちゃんに体を調べてもらってるわだから会うのは後になるわね」

「…そうですか」

…色々聞きたかったんだけどな

「天川君

ちよつと聞きたいんだけど…」

…白河さんの聞きたいこと…紅との事だろうな

「赤騎士ちゃんとの話聞かせてくれない？」

「…ええ、いいですよ

あれは五年前ですかね…」

俺が中学生の頃…園音と地元の不良グループが喧嘩したんですよ…

で、園音に勝てないと悟った不良グループが園音の知り合いを襲撃し始めたんです

で、俺も何十人にリンチされて入院したんですよ

まあその後園音は不良グループ全員を一年以上病院送りにしましたけれどね…

「園音さん…昔から無茶苦茶だったんですね…」

で…入院しているとき、暇でしょうがないんで散歩してたんですよ
…で、中庭に行ったらあの人…紅が居たんですよ

その人は見た感じとても綺麗で偉い印象を与える人だったんですよ

花壇を見てるのかと思って聞いてみたんですよ

「…花壇を見てんの？」

「…あそこにある花を見てたの」

その花って言うのは中庭の花壇に生えている花の中でも目立たない
花で…

「…他にも綺麗な花があるのに…何であの花なの？」

「あたしはあの花に憧れるの…目立たなくても強く生きられるあの
花に」

「…そうなんだ」

思えばあの時から紅の事が気になってたんでしょうね

いつもお昼ごろに花壇の前で花を見ている紅に会いに行くのが日課
だったんですよ

「あなたも変な人ね」

「…俺が？」

「だってあたしに毎日のように会いに来るから」

「変かな？」

「とっても変…でも…嫌ではないわ」

そう言つて微笑んだ紅のことが忘れられなかったんです

それから毎日会いに行つて…いろんな話をしたんですよ

主に園音の話ですが…

「…で、校舎を爆発させて校長に無理矢理契約したんだよ」

「ふふふ…」

園音さんつて本当に凄いね」

「俺を巻き込まなければ良いんだけどな…」

いつも笑っていてくれてそれを見る度に俺も嬉しくなってくる

…だけどある日

「ねえ…朔君」

「…何？」

「あたしね…このままだと後二ヶ月しか生きられないの」

「えっ…!？」

衝撃でしたよ

何時までも一緒にいたいと思っていたのに…いきなりそう聞かされました

「あたしね…もともと心臓が弱くて何時まで生きられるか分からなかったの

最近は朔君のおかげで元気だったけど…

それも限界みたい」

儚く笑いながらそう言った紅に…何にも言えませんでした

自分にはなにも出来ない

そんな気持ちでいっぱいでした

「だから…もつと大きい病院に行くの
でね…元気になって朔君にまた会えたら…伝えたいことがあるの」

「伝えたいこと…？」

「…うん

伝えたいの

だから…また…会えたらいいね」

そう言って紅は…いなくなりました

それから…高校を卒業してから紅をずっと探していたんです
あの時、伝えたかったことを聞かためたに…

「と言うことです…」

言い終わったとき、誰も一言も話さなかった

「でも…紅はなんで俺のことを覚えていないんだ…？」

「それはだな」

エリスが扉を開いて現れた

「どうやら紅は記憶の改竄をされているようだ」

「改竄！？」

「ああ

病気を治した後、兵士として不必要な記憶を改竄したようだ」

そんな事を…

「酷い…」

「全くだ

正義のヒーローどころか悪の秘密結社だ
しかし戻す方法はある」

「本当か！？」

「ああ

天川…記憶は決してなくなる
ないだからお前と過ごすことで…過去の記憶が戻る可能性がある
ただ」

「ただ…？」

「いつ戻るかは分からない
もしかしたら一生思い出すこともないかもしれん」

「…構わない」

俺は…紅に思い出してもらいたい

一生かかっても良い

それが俺に出来る唯一のことだ…

「そうか…と言うことだ

紅、天川と一緒に過ごすことになるが…いいか？」

「…えっ！？」

エリスの後ろから紅が現れた

…正直めちゃくちゃ恥ずかしい

これは聞かれたらいけないだろ…

「あたしも… 忘れた記憶を取り戻したい
だから… よろしく願います」

と、俺に頭を下げた

「…俺こそ… よろしく願います」

そうして俺は紅との同居が決まった

家にて

「綺麗な部屋ですね」

俺の部屋に紅がいる

探し求めていた大切な人

大切だから… 記憶を取り戻すためには何でもする…

ピンポン

「はい？」

誰かがきた

…誰だろう？

「よう息子、久々だな」

「…か、母さん！！??」

そこにはおそらくこの世に勝てる人のいない最強の人物

俺の母親…天川 零^{れい}が立っていた

「い、いったい何の用が？」

「おう、お前の家にちよつと泊まるぞ」

…なにiiiiiiii!!?

天川の母親登場！！（前書き）

少し短いですがとても早く更新できました！

そしてきずいてみれば五万PV突破！

これもみなさんのおかげです！

これからもがんばるので、よろしくお願いします！

天川の母親登場！！

「なんだ？」

何を驚いているんだ？」

…なぜかうちに母さんがきた

現在三十五歳。二人の子を持つ母親で、最強生命体

なぜ人類じゃないかって？

ははははは

爪で日本刀を叩き切る人が人類なわけないでしょ？

「だが爪が市販の爪切りで切れないのが難点だ
いつも噛みきっているがな」

「…心の中を読まないでください」

人類が出来るスキルは全部使えるらしい

やっぱり人類じゃねえ…

「まあどうでもいいだろ？
上がるぞ」

勝手に上げられた

家の中で座っている紅を見ている

… っ て！説明しないと！！

「か、母さん！実は！」

「よお

紅か。赤騎士は辞めたんだってな」

… え っ ？

「な、何で知って…」

「まあ病気を治すために彼処に連れて行っただがな

まあ私との約束を破ってお前を兵士にした奴らは地獄の苦しみをあ
じわっているがな」

… え っ ？

「母さんが紅を…？」

「ああ

病気を治すのに長けた正義の結社が有ったんでそこで治していた
まあ、私が治してもよかったんだが」

「母さん…なんで！？」

「息子の幸せを願わない親なんかそうそう居るもんじゃない

まあ紅を治した方が幸せになれると思ったんだがな」

…この人はそういう人だ

傍若無人なのに他人のことが大好きだからだ

「でも紅は記憶を忘れているし…
思い出さないと幸せなんて」

「出せるぞ」

「…へ？」

「私なら思い出させることなど造作もない」

「…はあああああ！！！？？」

滅茶苦茶だこの人！！

明らかに常識やら何もかも無視してるよ！

「まあ無粋だからしないからな
自分で思い出させた方が感動が大きいだろ？
まあ思い出さなかったら私に言え
一瞬で思い出させてやる」

…あはははは

本当に人間じゃねえな

「あー…今家になんにもないからなんか買ってくるよ」

「ああ、食つもんならあるぞ」

と、いつの間にか置いていたでかいバックから取り出したのは…

「美味そうだろ？」

「ミューミュー」

…

「それは…？」

「ホワイトタイガーだが？」

「食いもんじゃねえー！」

「なんだ？」

好き嫌いはだめだぞ？」

「天然記念物だから食べたら捕まるわ！！」

「そんなこと言ったらこのカブトガニも…」

「返してこーい！！！」

食えない天然記念物の動物しか持ってきていなかったなので鍋の材料

を買いに行った

ついでに園音を呼ばうと部屋を見る

『零さんが来ると思っているので逃げます
探さないで』

…そういや、園音は母さんが苦手だったな

まあいいか

「ただいまー」

「おう」

「さ、朔さーん！」

紅が泣きながら駆け寄ってきた

震える指の指す方向を見ると麻袋があり蠢いている

「母さん…それは…？」

そう言つと麻袋を開けて

「園音だ」

縛られて猿ぐつわをされている

珍しい…泣いてる

うちの母親はいつか捕まるんじゃないかな…？

「おお、早く鍋をしてくれ」

…まあいいか

母さんといると妥協を覚える

それもいいだろうな…

「うまい」

母さんと紅と園音、なんだこのカオスなメンツは

鍋は美味いが居心地は悪い

「そう言えばお前はブラックリングに勤めているんだよね？」

「だから何で知ってたんだよ！？」

うちの母親は何者なんだ？

「明日は何にも予定がないんだ」

「だったら何で家にきたんだよ」

何を考えているか読めない

分かってしまうのもイヤだが…

「実はな、私はブラッキングにすくなくならず関わりがあるんだ」

初耳だ

俺はもしかしてブラッキングに入るべくして入ったのだろうか？

「まあもう辞めたから私の居た頃のメンバーもいないだろうがな
チズルと龍平りゅうへいは元気か？」

…誰だ？

「たしか総統と副総統になったらしいが…」

ええええええ！！

何の伏線もなくここで名前が出るの！？

「ああ、その反応だとまだいるみたいだな
じゃあ久々に遊びに行くかな」

そついうと電話を取り出し電話し始める

「もしもし？誰だと？私だ

久々だな龍平

そつだ、零だ

？何をあわてている？

…チズルか

おう、遊びに行くんだ

なんでだと？

家の息子がそこで働いているんだ

…分かった

息子、変わったと」

「…もしもし？」

「息子さんって天川なの！？」

まあいいわ！阻止して！！ここに連れてこないで！！」

「…無理です」

「…そう…覚悟しとくわ」

…本当に母さんは何をしたんだ？

「楽しみだな」

…次回に続きます

天川の母親暴走！！（前書き）

どうもお久しぶりです

今回も遅くなりすいません

随分と間があいてしまいました

もう少し更新が早くできるようにしたいんですが…

最近は学校の用事などが重なりなかなか大変になってきました

これからも更新は不定期になりますが温かい目で見てください幸いです

天川の母親暴走！！

「ふむ、しばらく見ない内に随分とボロボロになったものだな」

「まあ、最近紅が壊したからね」

「う」…「ごめんなさい…」

「あ、別に気にしなくても誰も気にしてないよ」

「だれだ　　！！」

ブラックリングを壊した奴を許さぎやあああああああ！！」

空気を読まなかったバカにドロップキックをお見舞しておく

「じゃあ行こうか」

「総統？

いますか？」

総統の部屋の前で聞いてみる

「…返事がない」

中に入ろうと試みる

ガチャ

「あ、鍵がかかっていない」

中に入ると机には一通の手紙

「えっと…なにになに？」

『旅に行きます

お土産はちんすこうです』

「沖縄に行つてんの！？」

これは完璧に逃げたな

つーか普通に場所が判明してるよ

「むう…ならば連れてくるか
ちよっと待っている」

そう言つとどこかへ消える母さん

…連れてくるって…沖縄なのに？

「あつ、副総統」

いつの間にか扉の前に副総統が立っていた

「…零さんはいないの！？」

「え…総統を捕まえに沖縄に…」

「…そう」

目に見えてがつくりとする副総統

…そんなに嫌なのか

「…何事もなかったらいいんだけど…
それは絶対じゃないわ…」

問題起こすことは確定なんだ

いや、正直俺もそう思うけど…

「ただいま

おう、シズルじゃないか」

「…お久しぶりです」

ものすごく冷や汗を流しながら挨拶をする副総統

そしてその手には…

「……………」

「……………」

「……………」

「ん？どうした？」

「え…そ、その手にあるのは…?」

「龍平だが?」

手に持っている麻袋（まるで血のような赤色）の中身は総統らしい

「おお、土産だ」

赤騎士には真つ赤な何かが付着したちんすこう

副総統にはヤンバルクイナ（天然記念物）

そして俺には…

「…これは西表島にしか生息しないととても貴重な天然記念物のイリオモテヤマネコではないでしょうか?」

「そうだが?」

「返してこい!」

なんとか母さんに戻ってきてもらい話をする

「しかしシズルは変わらないな」

「零さんが言うのと嫌みにしか聞こえませんよ」

「いや、私も随分と衰えたし大人しくなった」

…今でこんななのに昔が想像できないよ

「しかし龍平は変わらんな
沖縄でナンパ三昧だったぞ」

…昔からそんなだったんだ

まあ納得だけど…

「懐かしいな…

龍平がここに入った当初に私にナンパしてな…

あのときは血の後を片づけるのが大変だった…」

何が起こったんだ!!

「…零さんお久しぶりです…」

血のような赤色の麻袋の中から総統が這いだしてきた

「いきなり後ろから麻袋を被せられたとおもったら…うつ！頭が…
！」

…トラウマになってるし

「…まあ、それはいいとして…零さんは今日、なにをするんですか
？」

「んー… そうだな、久々に見学でもしていくか」

「まあ、あんまり暴れないでくださいね」

「ふつ、当たり前だろうシズル、最低でも多少破壊するぐらいだ」

「…十分暴れてます。本当に気をつけてくださいね？」

…こんな会話で、母さんのブラッキング見学が決まった

請負部隊

「あ… 何というか…
俺の母さんが見学に来ました
なので心してください」

「天川さんのお母さん!？」

「ふーん」

「あ、天川のお母様だと!？
あ、挨拶をしなければ」

「うつ… どうかして朔さんのお母さんにアピールしないと…」

「……………」

みんな思い思いの反応をしている

「ふむ…なるほど、これが我が息子の率いる部隊か…」

「いつの間に!？」

音もなくすぐ後ろに登場した

「面白いメンツだな」

いや、確かにそう思うけど…

「は、はじめまして!え、エリスと言う!」

エリスはしどろもどろになってるし…

「ん？」

おお!可愛いな!気に入った!」

…なんか気に入られてる

「むう…いいな、コレ

一家に一つほしい…持ち帰っていいか？」

「いや!普通にだめだろ!」

なんかエリスは複雑な顔をしている

「…天川のお母様に気に入られたのはいいが…玩具扱いな気が…」

…可哀想に…その通りだと思う…

「まあいいだろ
…ん？金上か？」

「……お久しぶりです」

金上さんがそう言うと、母さんは笑いながら

「ひさびさだな！元気にしてたか！？」

「ええ…」

「はははは！相変わらず影が薄いな！
さつきまで気がつかなかったぞ！」

…なんかとても失礼なことを言っている気が…

「つーか…知り合い？」

「おお、金上は龍平の同期だぞ？」

…知らなかった

え？總統の同期が配下って…

「……そういえばそうでしたね」

金上さんも忘れてたのかよ！！

「まあ気にしていても仕方がないな

それよりも仕事振りをみたい」

「…まあ迷惑にならないなら」

そう言うことで母さんの見学がスタートした

見学その一

「ん？何をしているんだ？」

「これは今月の部隊のお金を計算してやりくりしているんです」

斎藤君はいつの間にやら経理みたいな仕事をする事になった

「むづ…ここから幾らか削ればもっといいのではないか？」

「えっ？

……ホントだ！

今すぐやり直さなきゃ！！」

…役に立ってる

見学その二

「む？

そこの可愛い玩具（女の子）は何してるんだ？」

…なんか意味と読みが違うような…

まあいいか

「う、うむ

これは戦闘用のロボットなのだが…

プログラムが良いようにできないのだ…」

「ん…」

カタカタカタカタカタカタ

「これでどうだ？」

「……かつ…完璧だ…」

エリスは尊敬の眼差しで母さんを見ている

「つか…」

「…とても役に立ってる

…これは母さんの評価を一変させないといけないな

…ん？

「だれだ　！！

この重要書類を破いた奴は　　！！」

…ん？

「……………最近買った新品の機材が壊れている……………」

…んん？

「きゃ　！！

この部屋の壁が消し飛んでいます　　！！」

……

「ふっ…

すまないなあれは全部私だ」

「…何でこんなことに？」

「いやな？お前が話している最中暇だったんで侵入したんだが…
少し失敗した」

…なるほど

今までの善行は壊したお詫びだったんだ

あははははは…

「大人しくしててください……………」

「…ふー

ようやく一日が終わった……………」

長かった…永遠にも感じた…

母さんが何かを壊しかけた回数
約135回

母さんが何かを壊した回数
約57回

…請負部隊の資金は底を突きそうだな…

まあ母さんがある程度役に立ってくれたのは良かったけど…

「息子よ」

「…何？」

「今日はお前の仕事振りが見れて良かったぞ」

「…ああ」

いつも以上の頑張りだったよ

…母さんのせいで

「最初は心配したぞ…

お前がいきなり一人暮らしをするなんて言うからな

私は心配のあまり一人でケーキを3ホールほど食べてしまった」

「心配した人の食欲じゃねえ!!」

「…しかし頑張っているな
安心したぞ」

「……………」

なんかしんみりした雰囲気…

「お前が頑張っているのを見てようやく勇気が出た
実は昨日な…お前の部屋をつつかり壊してしまった…」

「……………は？」

「いやな…夫婦喧嘩をしてな…
お前の部屋を吹き飛ばしてしまった」

「俺の部屋が　！？
大切な本とかが沢山あったのに　！！」

「はっはっは
すまんな

まあ…きにするな」

「それは俺の台詞だ！！
…まあいつでも仕方ないか…」

…母さんと付き合うコッ
…それは妥協をすることだ

…ものすごく嫌なコッだな…

「よし

これで私の用事は済んだ」

「えっ？これが最後！？」

最後の最後に悲しい気持ちで終わった…

「ふむ

昨日から旦那の謝罪と土下座メールが来ているが無視をしていな」

「…せめて相手をしてやれよ」

「まあ、そろそろ帰ってもいいかな」

「ようやく帰るのか…」

「じゃあ帰るかな
サヨナラだ」

………

「待てい」

「ん？どうした？」

「その鞆の中に何が入っている」

「…さてな」

しらばつくれる母さんから鞆を奪い中身を見ると…

「エリス!？」

大丈夫か!？」

エリスがグルグルに縛られて猿ぐつわをされていた

「ぶはっ…

天川くく!!」

エリスが泣きながらすがりついてきた

「母さん!!」

拉致するなよ!」

「…すまん

やっぱり欲しくてな」

…最後まで良い話で終わらないな…

「…まあこれから頑張るんだぞ?」

そう言うと颯爽と家に帰って行った

「…嵐のようだったな…」

疲れた…

あ…つかエリス…

「そろそろ離れない？」

「……もう少しこのままで……」

…和むな

「ただいま」

「お帰りなさい」

あの後エリスで存分に和んだ後、それぞれの家に帰った

家に上がって早々に口に出た言葉が

「疲れた」

「お疲れ様」

ニコツと微笑む紅を見て途轍もなく癒される

「あー…今晚は何を作ろうか？」

「あつ、私が作っちゃいました」

なにっ!？

「食べる!!今すぐ食べる!!」

紅の手料理だと!？

食べないわけにはいかない！

「…うまそー」

今夜の晩ご飯はハンバーグ、ポテトサラダ、スープ、サラダ
今すぐにでも食べたい

「じゃあ天川さん
食べましょうか？」

「ああ」

席に座り挨拶をする

「いただきます」

さあ、まずは…

ピンポン

「……はい」

こんな悪いタイミングに来るなんて…誰だ？

「天川！！匿ってくれ！」

「堂背か…まあ屋根裏なら良いぞ」

「助かる！」

そう言つと屋根裏に急いで上り、隠れる

「理由は明日に話す！！」

だから俺はいないものとしてくれ！」

「了解」

まあ、元からいないものとして扱うつもりだったからな

…まあ、どちらにしても騒動は明日になるし…

おなかも減つたしな

「…早く紅のご飯食べにいく」

堂背の恋

「美味かったな …」

紅の手料理に感動した後、ゴロゴロして

「あつ…そう言えば堂背は何できたんだ？」

と言うことで、堂背から話を聞くことにした

「堂背？」

「…何？」

「いや、0時も過ぎたんで話してくれないかと思って」

堂背は降りてきて俺たちの前に座ると

「ああ…あれは何ヶ月前だっけな…」

語りだした

ここからは堂背視点

俺は道を歩いていたんだ

いや、散歩で

「あーあ、何か面白いことないかな　！！」

…そこで道端で女の子が絡まれていたんだ

「ゲッヘッヘ

俺たちと遊ばない？」

「や、やめてください！」

「ウヒヨヒヨ

良いじゃんかよ　」

「ひ、人を呼びますよ」

「ギョヘヘ

俺たちは有名な悪辣トリオだぜ？

悪の中の悪な俺たちに刃向かう奴なんざいねーよ」

「堂背…一言突っ込ませてくれ」

「なんだ？」

「そいつらの笑い方がウザすぎんだよ！！」

「確かに気持ち悪いです…」

「紅もそう思うか？」

「はい…でも、そんな人がいたら買い物とかが心配です…」

「…紅

明日携帯を買ってきてやる
何かあったら呼んでくれ
すぐに駆けつけてやる」

「天川さん…」

「あのー…次にいつて良い？」

あつ、堂背の事忘れてた

「じゃあ次に」

「うん…で、その後…」

「おい！」

まあ、困っている人は助ける主義なんで声をかけたんだよ

「あ？」

「何だデメー？」

「殺されてえか？」

「その子嫌がつてるだろ！
やめてやれよ！」

「はぁ？俺たちを誰だと思ってたんだ？」

「笑い方のキモい三人組」

「…てめえ！ふざけんじゃねえぞ！」

「俺たちをバカにして刃向かったことを後悔させてやる！」

「…本音なんだけど」

まあ、そのキモい三人組が殴りかかって来たんだけどな

「ほいつ」

「ひよぐえ！」

殴りかかってきたウヒョヒョ笑いの奴にカウンターを決め、

「どらっ！」

「ゲヘッ！？」

ゲッヘッヘッ笑いの奴の脳天にドロップキックを食らわせて

「うらっ！」

「ギョヘッ！？」

ギョヘヘ笑いの奴にヘッドバットをかましたんだよ

「お、覚えてやがれ！！」

まあ、そんな雑魚レベル百な台詞を残してキモい三人組は退散したんだ

「あ、あの！」

ありがとうございます！！」

「ああ、大丈夫だった？」

「は、はい！」

「よかったよかった」

まあ、それで帰ろうとしたんだけど

「あ、あのー！」

「何？」

「お、お礼させてもらえませんか？」

「もちろんー！」

「堂背……」

俺は本当にこれだけは言いたい

「少しは遠慮しろー！」

もちろん！ってどんだけ遠慮がねえんだよ！

「人に頼れる奴が…なんだっけ？」

「んなこと知るかあああ!!」

なんかカッコいいこと言おうとして失敗してんじゃねえ!」

もの凄く痛くてカッコ悪い

「もう次に行ってくれ!」

「ああ、俺はお礼してくれるって言うからついていったんだ…」

「あの…」

お礼に近くのレストランみたいなところに連れていってもらって、
甘い物を食べていたんだ

「ん?なに?」

「お、お名前を…教えてもらえませんか?」

「堂背次々だけど?」

「堂背さん…本当にありがとうございます」

「いやいや、困ってたらお互い様だし」

まあ、そんな感じで雑談をしていたんだ

「堂背さんはどんなお仕事なんですか？」

「ブラックリングっていう会社で…まあいろいろと」

「そうなんですか」

ちゃららら、ちゃららら

「おつ、携帯か」

まあ内容は仕事に出てくれてって奴だったんで

「ごめんな、仕事が入ったんで今日はこれで」

「あ…あの！」

「ん？」

「わ、私は！西園司^{さいえんじはるか}遙です！」

「ん…わかった、じゃあね、遙ちゃん」

「は、はい！さようなら！」

「…終わった？」

町内会に追いかけられている理由が一つとして分からない

「いや…問題はその後なんだ…」

それから数日たって、商店街に買い物に行ったんだ…

花屋で…

「すみません」

「堂背！

死ね！！」

「どわぁ！！！」

なんか牙とか生えた草が襲いかかってきたんで急いで逃げたんだ

薬局で…

「うわ…噛まれてる…すみせん
カットバンと消毒液を…」

「堂背死ね！！！」

「うぎゃあ！！！」

怪しい液体をかけられかけたんでかわしたら

ジュウウウ！！

…かかった床が溶けたんだ…

命からがら逃げ出したよ…

商店街を歩くだけで

「堂背死ね!!」

「堂背くたばれや!!」

「堂背シニナサーイ」

…なぜか襲撃されるんだ

「…で、だんだんエスカレートしていつて俺を捜し出し始めたんだ…」

堂背…さすがに可哀想と思う

「で、なんでそんなことになったんだ？」

「それはこれだ…」

出されたのは一枚のポスター

『堂背次々と言う男性を見つけたらこちらに連絡をください
西園司遥』

「…探されてるんだ」

まあ、また会いたいって言ってたしな

「下を見てくれ…」

『我がアイドル遥ちゃんをたぶらかす堂背を抹殺せよ
町内会長』

…嫌な町内会だな

「遥ちゃんに会えるんなら会いたいけどな…
もう一つ重大なことがあるんだ」

「何だ？」

「遥ちゃん…今年で14歳なんだ…」

………

「堂背」

たった一言

「警察に…いこうな？」

「いやいやいやいや！！」

まだ何にもしてない！」

「絶対に何かを起こすだろ？
だから…警察にいこうな？」

「く、紅ちゃんもなんかいつて！！」

「堂背さん…」

紅からたった一言

「面会…行きますからね？」

「ええええ！！」

味方ゼロ！？」

「さあ…警察だ」

「いやだあああ！！」

「まあ冗談はおいといて…」

「冗談だったのか…」

さっきのドタバタは疲れた

なので早々に解決策を話す

「西園司さんに直接会えばいいんじゃないか？」

「はっ！その手があったか！」

バカだ

「でもどこにいるかしらねえ！」

さらにバカだ

「まあ西園司なんて名字は珍しいんだし…ん？
西園司…？」

なんかどこかで聞いたことがあるような…

「…あつ！

まさか西園司グループか！？」

西園司

一言で言つと金持ち

経済の中核を握るとてつもない所だ

なぜ知っているのかと言うと、かなり昔、母さんの仕事についてい
った時に護衛対象として紹介されたからだ

普通に厳しそうなオッサンだったような…

まあ、十年以上前だからだいぶ記憶は無くなってるからな

「多分場所は分かるぞ
ちよつと待つてろ」

そして母さんに連絡をとることにした

母さんに連絡をとるとなればと場所を指定された

どうやら西園司さんも呼ぶらしい

「つーことで堂背、準備はいいか？」

「準備？何かいるのか？」

「バカ！相手は西園司だぞ！？」

少しはきちんとした格好をしろ！」

「いや、俺はこのままで良い
ありのままの俺だ」

…まあ、確かに変になれないことをするよりはありのままがいいが、
堂背の場合は…

「まあいいか」

堂背はありのままでダメだがよく考えたらきちんとしてもダメだった

しかし、堂背にも春が来たな…

「堂背は今まで恵まれてなかったからな
たまには良いだろ」

「堂背さん！！」

どうやら遙ちゃんが到着したようだ

…可愛い

絵に描いたような美少女だな

「…ん？」

ブロロ

キキー！

ガチャ

「きゃあ！」

ガチャ

ブロロ…

………

「遙ちゃんが誘拐された！？」

何てことだよ

いきなり大ピンチじゃねえか！

「…あれ？堂背は？」

堂背は近くにあったバイクに跨っていた

そして…

「待ちやがれ　！！」

……

行ってしまった

つか…バイク盗んだ…

それに…あいつ免許無いんじゃない？

私は遥です

今日は堂背さんに会える寸前だったのに…

お父様が最近、身の代金目的の誘拐が頻発しているから気をつけな
さいって言っていたのに…

しばらくするとどこかの工場に着いた

そこで無理矢理車から出されて、椅子に座らされ、縛り付けられた

「…西園司にいくら請求する？」

「向こうは大富豪だ…」

億なら楽に出すだろう」

「はっ！豪勢なこった！
なら、筆り取れるだけ筆り取るか？」

誘拐犯さんが話をしている間に逃げようとするけれど、しっかりと縛っていて動けない

「西園司の小娘だが…多少傷物になっても構わないだろうな」

「好きにすればいいだろ？
何せ止める奴はいねえんだから」

「へへへ…」

誘拐犯さんが近くに寄ってくる

…堂背さん…！！

「待てやそこおお！！」

「堂背さん！？」

バイクの音がして堂背さんの声が聞こえた

「あれ？ブレーキって…どわぁ！」

ガッシャーン

「堂背さん！？」

バイクが止まらず何か大変なことに

「いてててて…」

遙ちゃん！大丈夫か！？」

「は、はい！」

答えると堂背さんは犯人をみて

「てめえら…覚悟しろお！！」

堂背さんが跳び蹴りをしていきなりの登場で動揺していた犯人さんに当たって飛んでいった

「てめえ！」

殴りかかってきたけれど堂背さんはかわしてお腹を殴り、犯人さんは崩れ落ちた

「遙ちゃん！

大丈夫か！？」

そう言つと堂背さんは縄を解いてくれた

「あ、ありがとうございます！」

「いいよ、俺が助けたかっただけだし」

…私のためにここまでしてくれるなんて…

…決めた！

「堂背さん…私…」

「やってくれたな…」

最初に飛んでいった犯人さんが起き上がってこちらを見ている

その手には

「け、拳銃…！」

「動くなよ…！」

そう言つと銃を構える

「やってくれたな…！」

そう言つと拳銃を私に向ける

「てめえの大切なその小娘を殺してやるよ…！」

そう言つと引き金を引く…

だけど…

「遙ちゃん！」

堂背さんはそれよりも速く私の前に立ちはだかり

パンツ！

「…堂背さああん！！」

「堂背！！」

なんとか車を使い、追いついた

そこには

「堂背さん！死んじやだ！」

堂背が血を流し倒れている

「大丈夫だ…」

すぐに同じところに送ってやるよ」

拳銃を構え遙ちゃんを狙う男

すぐさま男に駆けより拳銃を弾き飛ばす

「なっ！？」

そしてすかさず顎に打ち込んで気絶させた

「堂背！」

堂背を見てみると背中に見えた傷がある

「これは…」

心臓の近くを撃たれてる

もしかしたら心臓に当たっているかもしれない…

それに貫通もしていない

中に銃弾が残ったままだ

「ヤバいな…早く治療しないと」

泣いている遥ちゃんを落ち着けて白河さんに連絡を取った

「……………」

白河さんがきて、応急処置をした後、白河さんの知り合いの病院に連れていった

遥ちゃんは堂背が手術室に入ってから七時間…ひたすらに堂背の無事を祈っていた

「…堂背さん…」

手術室のランプが消えた

白河さんが出てくると遙ちゃんも駆け寄り

「堂背さんは!？」

「堂背くんは危なかったわ
だけど命に別状はもう無いわ」

安堵の空気が流れる

「でも…」

白河さんは続ける

「意識が戻らないの
このまま目覚めないなんて事もあるかも…」

「……………」

…堂背が…

病室にはいると堂背が寝ていた

いつもバカばかりやっていた元気な堂背は動かない

俺も紅も静かになる

「…堂背」

呼び掛けても動かない

まるで死んでしまったかのように…

「このままずっと寝たままの可能性もあるわ」

白河さんが言う

「堂背…」

「私に…話させてください」

遙ちゃんがそう言った

「…ああ」

脇によけ、紅と並ぶ

「…堂背さん」

遙ちゃんが呼びかける

「私…堂背さんが不良から助けてくれたとき…とても嬉しかったです
私は堂背さんをずっと探していました

助けてもらってからお父様から婚約者の紹介をされたんです
私は…堂背さんと最後に会いたくて探していたんです

でも…今日、私は助けに来てくれた堂背さんを見て心に決めました
堂背さん…私と、結婚してほしいです

だから…起きてください…！」

そう言っで涙をこぼした遙ちゃん

「……分かった
……結婚……しよう」

！！

「堂背さん！？」

堂背が……意識を取り戻した！！

「遙ちゃん……俺が元気に……なったら……結婚しよう」

「……はい！」

涙をこぼしながら答える遙ちゃん

白河さんも涙を浮かべている

「……あつ……！」

いきなり、涙を浮かべた紅が驚いた声を上げた

「どうしたの！？」

「いえ……なんでもないです！朔君！」

そう言っで病室から一目散にでていった紅

…あれ？

何か紅に違和感を感じながらも、俺は堂背と遥ちゃんを心から祝福した

堂背の恋（後書き）

最終回に向けてのフラグ立てを開始しました！

長かった秘密結社へようこそ最後まで最後まで見えてきました
ここまで続いたのは皆さんのおかげです！

最終回までこれからも是非見て下さい！

新作のマジモンパニックを連載し始めました
学園コメディー物です！

是非ともこちらも見てください！

新たな旅立ち（前書き）

……ええ

殴ってください

正直、数か月ぶりに小説家になろうにインしました

いままで、色々別の活動をしていて全く参加はできませんでした
また復帰するので、暇だったら見てください！

新たな旅立ち

「……なんか久しぶりな感じがしますね」

そう唐突に紅が言う。

「いきなりだけど……確かに」

なんだろう？半年ぐらい久しぶりな感じがするな

「……ん、まあそこは置いてこう」

なんか天の声が泣きながら謝罪した感じがしたのでそこはスルーしておこう

「それよりも堂背君は元気になりましたね」

「そうだね

馬鹿だからね」

まあ、酷評だが仕方ないだろう

なんせ遙ちゃんに看病されて無駄に元気になり絶対安静だというのに遙ちゃんに良い所を見せたくて動き回って退院が三カ月も伸びたからだ

さすがに医者の人でも彼は馬鹿なのか？と俺に聞いてくるぐらいだからだ

「あはは……まあ仕方がないんじゃないんですか？
堂背さん、遥さんの事が取っても好きなんでしょうし」

「ん、まあそれはそうだね」

確かに、堂背はとてつもなく遥ちゃんの事を大切にしようとしている
今まで馬鹿なことばかりやっていた反動なのか、愛の力とか言っ
て無理やり立ち上がり、結婚しようと言って血を吐いて倒れる事を
繰り返し……

……あれ？やっぱり馬鹿？

「そう言えばお仕事は大丈夫なんですか？」

「あー、うん

今日はちょうどやることもないから非番なんだ」

「そうなんですか
じゃあゆっくりですね」

そう言っただけでたりとした雰囲気……

ドゴン

「……園音、ドアはあるよ？」

「気にしない！」

何故か園音が壁をぶち破ってこちらに来た

「つーか仕事は？」

「あー、休んだ！」

……なぜかいつもよりも元気が三割増しのような気がする

「ふーん、珍しいな

お前が修行でもないのに休むって」

その言葉にばつが悪そうな顔になる

「……なんかあるのか？」

「んー、まあ、正直に言いますと！」

そう区切って

「私はブラックリングで無期限休暇を取ります！」

「……なに！？」

無期限休暇……

それは事実上の退社だ

「んー、実はさー、ついこないだ零さんが来たでしょ？」

「うん」

「その時にね？」

零さんに仕事を手伝わなかったって聞かれちゃってね？」

……そうだった

園音は母さんが苦手だが、それ以上に母さんの事を尊敬しているんだった……

尊敬している人からの誘い……

……断れるわけないな……

「行けばいいじゃないか」

「んー、でもまだその話ブラックリングでしてないんだよね」

「まあ、明日話せばいいよ

お前が後悔しないんだったらついて行けばいいじゃないか」

その言葉を聞いて、にっこりと笑う

「そうだねー！

あたしとした事がうじうじしちゃったね！

よーし！零さんについて言って強くなるぞー！」

「……これ以上強くなるなよ……」

次の日、その事実みんな驚愕した

「園音ちゃんやめるの!？」

「むっ……、いなくなると寂しいな」

「園音さん……ほんとですか？」

「……正直ブラックリングにとっては痛い損失ね」

「ふっ……まさか俺のハーレムから脱退者が出
ぐはっ」

「総統？」

「寝言は死んでから言ってください」

「死んだら……言え……な……」

いつもと変わらない感じだけど、みんな正直に言えば悲しんでいる

「……園音さん」

白夜さんだ

「行くんですか？」

「んー、そうだよー」

「ごめんねー、いきなりで」

そう悲しそうな表情で園音は言う

「……園音さ……」

「みんな！

これ以上悲しんでもしかたないからな！
送別会をしようじゃないか！」

「ああー、私のために？
ありがとうー！」

……総統、白夜さんに対して謝れ

送別会は大規模に行われた

「むー美味しいねー」

酒や料理をガツガツ食べながらそう感想を漏らす園音

「ほらエリスちゃん
ジューズね」

「む、すまないな

……む？なんらかフラフラするぞ」

「って白河さん！

未成年に酒を飲ませないでくださいー！」

悪乗りしている白河さん

「さあそこのお嬢さん！俺と一緒に夢の旅へ……
ごぶえっ」

「総統？

死んでください」

暴走する総統と静止……か？をする副総統

「んー、なんらろー？

ころジューズ美味ひいれすねー」

「つて、斉藤君！

大丈夫か！」

ものすごく酔ってる斉藤君

「はははは！良い酒はうまいな！」

「……………」

テンションの高い萩原さんとやっぱり静かな金上さ……

ドサッ

「金上さー……ん！？」

「あはははは！

こいつすぐ潰れたよ！」

良く見れば飲んでいるお酒はアルコール度が半端なく高いお酒ばかり
しかも萩原さんがどんどんお酌をしてくるので自己主張しない金上

さんは倒れてしまったらしい

「むー！あまかわー！」

「はいっ！？

エリスっ！？」

「お前はゆうじゅうふだんならー！
はやくきめなきゃわたしがー！
……ぐー」

寝た……

エリス……酔うとたちが悪いんだ……

「ん？」

ふと気付くと園音も白夜さんもない

どこへ行ったんだろ……？

「園音さん」

「んー？どしたのー？」

園音さんがブラックリングを去ると聞いて、いてもたってもいられなくなった

「僕はあなたがいなくなるのが嫌だ」

「むー！

わがままだなー！」

確かにそうだ

園音さんに言われると何か釈然としないがわがままだ

「正直、あつた時から僕は思っていました」

そう、何年も秘めてきた思い

「好きです

園音さん、会った時から好きでした」

「あ……ははー？」

戸惑っている

確かに今までそんなそぶりは一度も見せなかった

だが、隠していただけでずっと心に在った

「僕はあなたが好きです

あなたはとうですか？」

「んー、君の事は意外と好きだよー」

……嬉しいが、それはオーケーの返事ではない

「でもねー」

そう言っただけなのに表情を歪め

「正直待ってもらうのはつらいの」

そう、真面目に返答する園音さん

「私はね、本当に死ぬかもしれない危険なところに行くのでもね？誘ってくれたのは昔から人として憧れてた人なの君の事は好きだよ？

でも私は死ぬかもしれない
そうだったら君は悲しむでしょ？」

そう言っただけなのに、誰にも明かしたことのないであろう園音さんの気持ち
を言った

「私は誰一人として私の近くにいる人を悲しませたくないんだ」

「こう見えて私は結構ネガティブなんだ
毎日明るくふるまわないと怖くて泣いちゃいそうなんだ

格闘技を頑張っていたのも強くないと悲しませちゃう事があるから
なの

初めて本当に強い零さんを見た時、憧れたんだ

私はこうなりたくなって

だから強く、明るくなるんだ

怒らせてもいいからだね一人として悲しませたくないんだ

だから……駄目なの

君を待たせるのはとっても悲しい

もし私が死んだら、君はもっと悲しい

だからだめ

私は……」

その次の言葉は言わせない

「待つてますよ」

「僕はずっと待つてますよ

あなたが死んでも、待つてますよ

もしもあなたが死んだらずっと悲しみながら待ちます

だから生きて帰ってください

それまでは喜んで待ちます

一回も悲しみません

だから帰ってきてください

そして、帰ってきてからまた告白します

返事はその時でいいです

だから……帰ってきてください」

「……でも」

「何を言っても無駄です

私は今この瞬間から絶対に待ちます

死んだら私は悲しみますよ？

でも、ただ待つてるだけなら喜んで待ちます」

「……なんでそんな事が言えるの」

そう言う園音さんの瞳は揺らいでいる

「そこまで言える理由なんか」

「好きだからです」

それは、偽り一つない本心

「あなたの事が好きだからです

正直あなたに在会った時から待ってたんですよ

返事がもらえるなら何十年延びたってかまいませんよ」

その言葉に園音さんは一粒の涙をこぼした

「……………いい……………おとこだね」

「今更気づきましたか？」

そう言って笑いあう

「うん！決めた！

帰ってきたら結婚しよう！」

「……………それ、僕が言いたかった……………」

「気にしない！」

そう言ってさらに笑う

……………その笑顔を見て、自分も一緒に笑う事にした

そして心の中で思う

僕は一生待っている

君が死んでも待っている

死んでも気にしなくていい

君がやってくるまで僕は喜んで永遠に待ち続ける

待つのはつらくはない

だって……

君の事が本当に好きだから

新たな旅立ち（後書き）

久々なので書き方を忘れてしまいました

キャラが違うとか言われても仕方ありません
私が土下座をします

それで勘弁してください（爆）！

……こぼれ話ですが、電撃大賞に小説を応募しようと思っています
全然違うシリアス風味のファンタジーですが、落選したらこちらで
掲載するのでその時はよろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8562c/>

秘密結社へようこそ

2010年10月25日02時21分発行